

鹿角市文化財調査資料87

特別史跡

大湯環状列石

発掘調査報告書(23)

2007. 3

鹿角市教育委員会

序

北東北の中央部に位置する鹿角市には、縄文時代から近世にかけての埋蔵文化財や地域と自然のなかから発生した民俗文化財が多く、秋田県内でもその宝庫として知られています。

特に大湯環状列石は、野中堂・万座環状列石を主体とする縄文時代の遺跡で、二重の環状に整然と配置された配石遺構と規模から昭和26年には国史跡に、さらに31年には特別史跡に指定されております。昭和6年に発見され、調査研究の歴史も永く、環状列石・配石遺構研究の原点となっています。

鹿角市教育委員会では、文化庁・秋田県教育委員会のご協力を得て、昭和59年度から発掘調査を実施し現在も継続しております。また、平成10年度からはそれまでの調査成果をもとに第Ⅰ期環境整備事業を、15年度からは第Ⅱ期環境整備事業を行っており、遺構や自然環境の復元、大湯ストーンサークル館建設等を行っております。

本年度は、第Ⅲ期環境整備計画地の資料収集のため史跡東端の発掘調査を行いました。この地域には一本木後口配石遺構群が存在することが知られており、今回の調査は配石遺構群の東側への広がりを調査するものでした。調査によって新たに縄文時代の配石遺構や平安時代の堅穴住居跡が発見され、遺構の分布状況や性格を考察する上で貴重な資料を得ることができました。

本報告書は本年度の成果をまとめたものであり、環状列石の研究資料として、また、平安時代の集落研究の資料として活用くだされば幸いに存じます。最後になりましたが、発掘調査並びに環境整備事業、報告書作成に対しご指導・ご協力いただきました関係機関・各位に厚く感謝を申し上げます。

平成19年3月

鹿角市教育委員会

例　　言

1. 本報告書は、平成18年度に国庫補助金を得て実施した「特別史跡大湯環状列石第23次発掘調査」の成果をまとめたものである。調査の概要については大湯ストーンサークル館事業「縄文に学ぶ」などで発表してきたが、本報告書を正式なものとする。
2. 本報告書の執筆と編集は、生涯学習県文化財班長 藤井安正、文化財班主事 三浦貴子が行った。
3. 石器類の石質鑑定は、秋田県立十和田高等学校長 鎌田健一氏にお願いした。
4. 土層や土器などの色調の記載には「新版 標準土色帖（日本色彩研究所）」を使用した。
5. 本報告書に使用した地形図並びに図面は次のとおりである。
国土交通省国土地理院発行「毛馬内（1/2500）」「花輪（1/2500）」「湯瀬（1/2500）」
6. 遺物の実測・採拓・清書などの一連の作業は調査担当者、調査補助員、作業員が行った。
7. 本報告書に掲載した実測図などには各々に示した。なお、写真図版については任意の縮尺とした。
8. 本文中において用語の主たるものは統一するように努めた。使用が数度にわたるときは簡略している場合もある。
9. 実測図・表・写真図版などで下記のような記号、スクリーントーンを使用した。
S X (S) …配石遺構、S K …土坑、S I …堅穴住居跡、S X (f) …焼土遺構
…遺構確認面下の層 …焼土
10. 発掘調査並びに環境整備事業、報告書作成にあたり下記の方々よりご指導とご助言をいただきました。心から感謝申し上げます。

斎藤 忠、小林達雄、富樫泰時、沢田正昭、安村二郎、熊谷常正、阿部義平、村越 澄、
葛西 効、小野健吉、本中 眞、岡村道雄、平澤 究、坂井秀弥、遠藤正夫、稻野裕介、
児玉大成、榎本剛治、石神 敏、岩田貴之、大野憲司、高橋忠彦、榮 一郎、三嶋隆儀、
五十嵐一治、糸谷和憲、吉川耕太郎、熊谷太郎、櫻田 隆、児玉 準、柴田陽一郎、
小林 克、高橋 学、利部 修、武藤祐浩、宇田川浩一、栗澤光男（敬称略・順不同）

本文目次

序	第V章 調査のまとめ	107
例言	参考文献	109
本文目次	写真図版	110
図版・表・写真図版目次	報告書抄録	
第I章 遺跡の環境		
1 遺跡の位置と立地	1	
2 周辺の地形と地質	2	
3 周辺の遺跡	4	
4 遺跡の層序	11	
第II章 調査の概要		
1 調査要項	12	
2 調査の目的	13	
3 調査方法	13	
4 調査経過	16	
第III章 A ₆ 区、A ₇ 区検出遺構と出土遺物		
1 説文時代の遺構と遺物		
(1) 配石遺構	18	
(2) 焼土遺構	21	
(3) 遺構外出上遺物	25	
① 土器	26	
② 石器	26	
2 弥生時代の遺構と遺物		
(1) 遺構外出土遺物	39	
3 歴史時代の遺構と遺物		
(1) 坂穴住居跡	43	
第IV章 分析と考察		
鹿角市内の奈良・平安時代の		
坂穴住居	48	

図版・写真・表目次

図 版 目 次

第1図 遺跡位置図(1).....	1	第29図 第1号竪穴住居跡・炭化物 出土状況.....	45
第2図 鹿角市の地質図.....	3	第30図 第2号・第3号竪穴住居跡 実測図.....	46
第3図 周辺の遺跡.....	8	第31図 元慶の乱当時の蝦夷の村.....	50
第4図 基本層序図.....	10	第32図 北の林I遺跡.....	53
第5図 調査区位置図.....	14	第33図 遺跡位置図(2).....	54
第6図 トレンチ配置図・遺構配置図.....	15	第34図 遺跡位置図(3).....	55
第7図 第1号配石遺構実測図.....	18	第35図 柱配置模式図.....	64
第8図 第2号配石遺構実測図.....	19	第36図 調査区北東部竪穴住居跡 分布状況.....	107
第9図 第3号配石遺構実測図.....	20		
第10図 焼土遺構実測図(1).....	22		
第11図 焼土遺構実測図(2).....	24		
第12図 出土土器(1).....	27	表 目 次	
第13図 出土土器(2).....	28	第1表 発掘調査の経過と成果.....	5
第14図 出土土器(3).....	29	第2表 周辺の遺跡一覧表.....	9
第15図 出土土器(4).....	30	第3表 鹿角市の風向.....	52
第16図 出土土器(5).....	31	第4表 鹿角市内の奈良・ 平安時代の集落(1).....	56
第17図 出土土器(6).....	32	第5表 鹿角市内の奈良・ 平安時代の集落(2).....	57
第18図 出土土器(7).....	33	第6表 鹿角市内の奈良・ 平安時代の集落(3).....	58
第19図 出土土器(8).....	34	第7表 鹿角市内の奈良・ 平安時代の集落(4).....	59
第20図 出土土器(9).....	35	第8表 鹿角市内の奈良・ 平安時代の集落(5).....	60
第21図 出土土器(10).....	36	第9表 鹿角市内の奈良・ 平安時代の集落(6).....	61
第22図 出土土器(11).....	37	第10表 竪穴住居跡長軸分布.....	62
第23図 出土土器(12).....	38	第11表 竪穴住居跡床面積分布.....	63
第24図 出土土器(13).....	39	第12表 柱配置ごとの数量.....	64
第25図 遺構外出土土器分布状況.....	40	第13表 住居跡の規模と柱配置.....	65
第26図 出土石器実測図(1).....	41		
第27図 出土石器実測図(2).....	42		
第28図 第1号竪穴住居跡実測図.....	44		

第14表	カマドの位置	66	第46表	堅穴住居跡観察表(1)	99
第15表	堅穴住居跡観察表(1)	68	第47表	堅穴住居跡観察表(2)	100
第16表	堅穴住居跡観察表(2)	69	第48表	堅穴住居跡観察表(3)	101
第17表	堅穴住居跡観察表(3)	70	第49表	堅穴住居跡観察表(4)	102
第18表	堅穴住居跡観察表(4)	71	第50表	堅穴住居跡観察表(5)	103
第19表	堅穴住居跡観察表(5)	72	第51表	堅穴住居跡観察表(6)	104
第20表	堅穴住居跡観察表(6)	73	第52表	堅穴住居跡観察表(7)	105
第21表	堅穴住居跡観察表(7)	74	第53表	堅穴住居跡観察表(8)	106
第22表	堅穴住居跡観察表(8)	75			
第23表	堅穴住居跡観察表(9)	76			

写真図版目次

第24表	堅穴住居跡観察表(10)	77	P L 1	配石遺構(1)	110
第25表	堅穴住居跡観察表(11)	78	P L 2	配石遺構(2)	111
第26表	堅穴住居跡観察表(12)	79	P L 3	堅穴住居跡(1)	112
第27表	堅穴住居跡観察表(13)	80	P L 4	堅穴住居跡(2)	113
第28表	堅穴住居跡観察表(14)	81	P L 5	堅穴住居跡(3)	114
第29表	堅穴住居跡観察表(15)	82	P L 6	調査区西側	115
第30表	堅穴住居跡観察表(16)	83	P L 7	調査区南側	116
第31表	堅穴住居跡観察表(17)	84	P L 8	調査区北東側	117
第32表	堅穴住居跡観察表(18)	85	P L 9	盛り土調査	118
第33表	堅穴住居跡観察表(19)	86	P L 10	出土土器(1)	119
第34表	堅穴住居跡観察表(20)	87	P L 11	出土土器(2)	120
第35表	堅穴住居跡観察表(21)	88	P L 12	出土土器(3)	121
第36表	堅穴住居跡観察表(22)	89	P L 13	出土土器(4)	122
第37表	堅穴住居跡観察表(23)	90	P L 14	出土土器(5)	123
第38表	堅穴住居跡観察表(24)	91	P L 15	出土土器(6)	124
第39表	堅穴住居跡観察表(25)	92	P L 16	出土土器(7)	125
第40表	堅穴住居跡観察表(26)	93	P L 17	出土土器(8)	126
第41表	堅穴住居跡観察表(27)	94	P L 18	出土土器(9)	127
第42表	堅穴住居跡観察表(28)	95	P L 19	出土土器(10)	128
第43表	堅穴住居跡観察表(29)	96	P L 20	出土土器(11)	129
第44表	堅穴住居跡観察表(30)	97	P L 21	出土土器(12)	130
第45表	堅穴住居跡観察表(31)	98	P L 22	出土土器・石器	131

第Ⅰ章 遺跡の環境

1. 遺跡の位置と立地

鹿角市は北東北のほぼ中央に位置し、北に十和田国立公園、南に八幡平国立公園があり、日本海に注ぐ米代川上流域の花輪盆地を中心とした農業と観光を主産業とする都市である。

鹿角市は、東に岩手県八幡平市、西に大館市、北に小坂町、南に仙北市というように県境並びに市町境を接している。古代から交通の要所となっており、岩手県盛岡市に通じる「鹿角街道」、青森県三戸町に通じる「来満街道」、青森県平川市碇ヶ関に通じる「濁川街道」がある。鹿角市内の主要国道である国道282号線は、鹿角街道とほぼ同じ道筋で盛岡まで通じている。また、JR花輪線は大館駅を基点に、十和田湖への玄関口となっている十和田南駅を通り、岩手県好摩駅との間を結んでいる。

奥羽山脈の懷に抱かれた盆地に発達した鹿角市には、奥羽山脈の四角岳に源を発した米代川、十和田湖外輪山を源とした大湯川やその支流によって形成された舌状台地が多く発達している。

これらの台地上には縄文時代や歴史時代等の416遺跡の所在が確認されており、大湯環状列石は国の代表的な縄文遺跡として昭和31年に「特別史跡」に指定されている。

大湯環状列石は、大湯川と豊真木沢川・根市川の浸食によってつくられた南北方向にのびる



第1図 遺跡位置図(1)

全長5.6km、幅0.5~1.0km、標高185m~144mの中通台地（通称「風張台地」）のほぼ中央に位置している。

平成10年度からは史跡環境整備が進められ、遺構や自然環境の復元、縄文文化を学び・体験できる施設「大湯ストーンサークル館」が建設されている。

本年度の発掘調査対象地は史跡北東側、一本木後口配石遺構群の北側隣接地にあたり、公有化以後は牧草地となっている。

鹿角市は707.34haの面積を有し、人口37,433人（2005年11月末）である。

2 周辺の地形と地質

周辺の地形と地質については、鹿角市文化財調査資料85『特別史跡大湯環状列石発掘調査報告書(2)』を参考に、その概要を述べる。

鹿角市内の地形

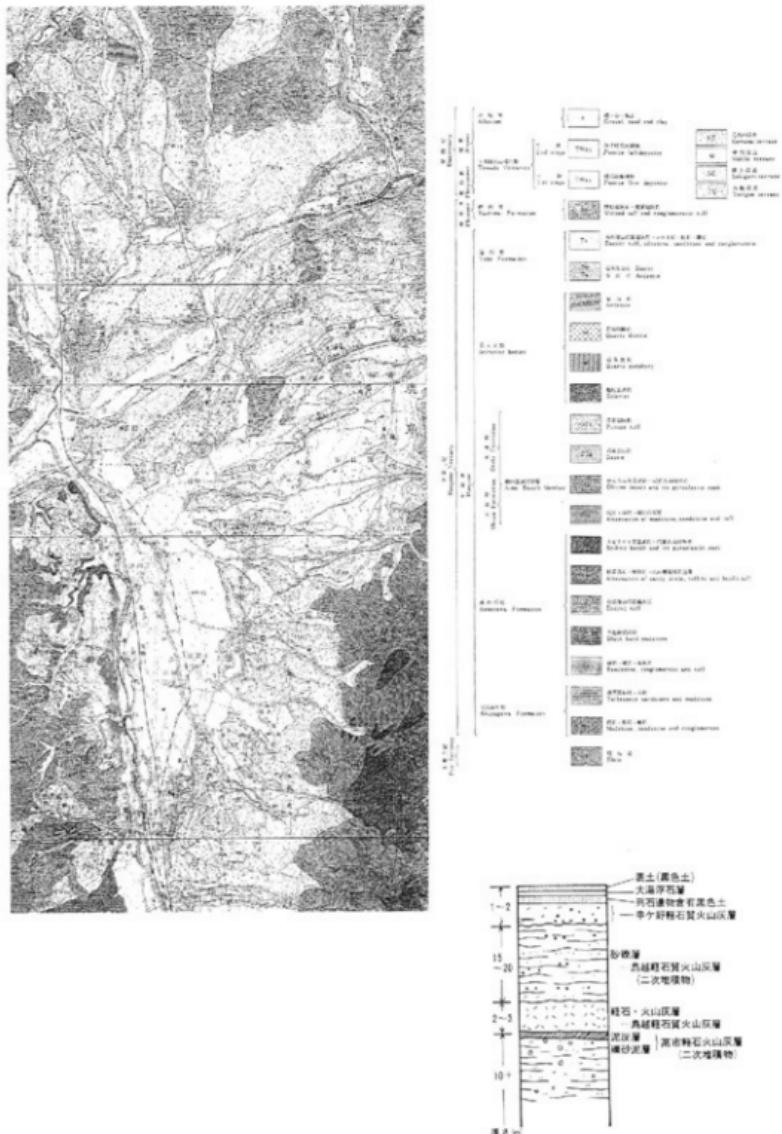
鹿角市内の地形は、東西の山地、盆地内の段丘地形及び沖積低地より構成されている。

東側に連なる山並は800m~1,100mの標高で、四角岳（1,003m）、皮投岳（1,122m）、五ノ宮嶺（1,115m）等を中心とする急峻な壯年期の山である。地質は下位より安久谷川層、瀬の沢層、大葛層、遠部層等の新第3紀の堆積岩類や火山岩類より構成されている。

一方、西側の山地は、標高400m~600m程の丘陵性の穏やかな山並で、東側山脈と同様、下位より新第3紀中新世の大葛層、大滝層、遠部層、樅内層で構成されている。

鹿角盆地は、東の奥羽山脈、西の高森山地に囲まれ、大小の河川によってつくられた台地・段丘とともに低地がいたるところにみられる。特に鹿角市北部には十和田火山由来のシラス台地が分布し、東部や南部は奥羽山脈を源とする河川によって形成された扇状地地形が特徴的である。

盆地内の段丘は4段に分けられる。最高位の面は浦志内川や歌内川等が盆地に注ぐ付近に扇状地状にみられる面で、標高270m~330mと傾斜がやや陥しい。かなり解析され、主に河成の亜角礫~角礫からなり、風化が著しい。2段目は標高180m~250mで、南部では扇状地状の地形を残すものの、大里地区以北では厚い火碎流堆積物に覆われ、「関上面」・「鳥越面」と呼ばれ、盆地内ほぼ全域に分布している。3段目は標高180m~250mで、主に米代川左岸に沿って尾去沢から松館・荒町にかけて分布している。「松館面」と呼ばれており、夜明鳥川、黒沢川等による扇状地の解析された面と考えられている。4段目は米代川右岸沿いに大里付近まで分布する面で「大里面」と呼ばれている。標高は150m~155mと低く、上部は砂礫層を主体としている。



第2図 鹿角市の地質図

沖積低地は標高100m～120mで、主に砂礫層からなり、花輪や毛馬内の市街地がのる。

発掘調査周辺の地質は大きく分けて、4枚の火山灰層から構成される。最下部は高市軽石質火山灰（25,850±1,360）の二次堆積物で、軽石や砂礫から構成され、地層中に平行ラミナやクロスラミナが発達している。この上に薄い泥炭をはさんで、厚さ2m～3mの鳥越軽石質火山灰層（12,000±250）が重なっている。さらにこの上に水の作用によって堆積した鳥越軽石質火山灰層の二次堆積物である軽石質段丘砂礫層がのる。この層の上に風化の進んだ大形の軽石質軽石礫を含む申ヶ野軽石質火山灰層（8,680±130）が重なっている。

最上部は黒色土層で、黒色土と黒色土の間に十和田a降下火山灰層（大湯浮石層）がみられる。

十和田a降下火山灰の降下時期については、これまでの発掘調査例から平安時代中頃、10世紀前半とされていたが、滋賀県比叡山延暦寺の僧侶が残した『扶桑略記』の記事から、この降下（噴火）時期は延喜15年（915年）7月とも言われている。噴火とともに発生した火碎流（毛馬内火碎流）は大湯川・米代川を下り、大館地区・鷹巣地区では家屋（北秋田市 胡桃館遺跡）を飲み込みながら、能代平野まで達している。

史跡周辺の地形

史跡は大湯川と豊真木沢川・根市川の浸食作用によって形成された舌状台地で、大湯市街地南側後方から全長5.6km、幅0.5～1.0kmで南北方向に延びている。

台地の北側・南側とも河川の浸食によって形成されたものと考えられるが、異なる様相を呈している。史跡の北側斜面を踏査したところ平場13ヶ所、湧水5ヶ所を確認した。台地上面から大湯川までは比高差30mを測る。平場は概ね三段の高さに区分され、最も大きな平場は斜面中程にあり長さ180m×幅14m～40mを測る。湧水は万座糞状列石の北西側に入り込んだ沢の水量が多く、以前はポンプを設置して農業用水（撒布用）として使用されていた。

一方、台地南側からは平場8ヶ所、湧水8ヶ所を確認している。台地上面から豊真木沢川までは比高差25mを測る。平場は斜面下方に見られ、北側斜面に見られるものと比較するとその規模は極めて小さい。湧水地点は北側と比べて地點的には多いが湧水量は極めて少ない。

3 周辺の遺跡

鹿角市は県内でも屈指の遺跡の宝庫として知られており、縄文時代から近世にいたる各時代・各時期の遺跡が416ヶ所も所在する。遺跡の内訳は縄文時代から平安時代の単独・複合遺跡349ヶ所、中世の館跡61ヶ所、近世の城郭関係・一里塚3ヶ所、その他3ヶ所となっている。

これらの遺跡は、米代川や大湯川等の大小の河川によって形成された舌状台地上に分布して

第1表 発掘調査の経過と成果

年	調査箇所	調査面積	調査の成果	主要文献
昭和 59年	史跡北東側 (A1 区)	1,825 m ²	配石遺構 9 基を検出。配石下に土坑が伴うことが判明。石材の風化地帯を確認する。	『大須賀式列石周辺の遺構発掘調査報告書 (1)』1985 年 3 月
60年	史跡の北東側 (A2 区) 野中堂西側指定地 (B1 区)	1,870 m ²	新たに 16 基の配石を検出。計 24 基となる。	『大須賀式列石周辺の遺構発掘調査報告書 (2)』1986 年 5 月
61年	史跡の北東側 (A3 区) 万葉の南側 (C1 区)	2,029 m ²	新たに配石を検出。計 43 基となる。これらは二重の配石に配置されることを確認。	『大須賀式列石周辺の遺構発掘調査報告書 (3)』1987 年 3 月
62年	万葉の北側指定地 (D1 区) 史跡の北東側 (E1 区)	2,347 m ²	D1 区より建築物 19 基、焼成配石遺構 3 基、平坦式の遺構跡 1 基を検出。列石周囲には規則的に遺構が分布することが確認された。	『大須賀式列石周辺の遺構発掘調査報告書 (4)』1988 年 3 月
63年	万葉の南側指定地 (D2 区)	1,576 m ²	遺構跡 11 基、フラスコ状土坑 25 基等を検出。列石周囲には規則的に遺構が分布することが確認された。	『大須賀式列石周辺の遺構発掘調査報告書 (5)』1989 年 3 月
平成 元年	史跡の北側指定地 (F1 区) 万葉の北東側 (E4 区)	1,648 m ²	F1 区より整穴住居跡、遺構跡 4 基を検出。整穴住居の存在が初めて確認される。	『大須賀式列石周辺の遺構発掘調査報告書 (6)』1990 年 3 月
2年	万葉の北側指定地 (F2 区)	2,810 m ²	整穴住居跡 1 基、T ピット 13 基を検出。整穴住居跡の東側が確認される。	『大須賀式列石周辺の遺構発掘調査報告書 (7)』1991 年 3 月
3年	万葉の南側 (G2 区)	1,619 m ²	昭和 38 年 - 39 年に存在が知られていた配石遺構を確認。	『大須賀式列石周辺の遺構発掘調査報告書 (8)』1992 年 3 月
4年	万葉の北側 (D5 区) 万葉の南側 (F3 区)	2,736 m ²	焼成配石遺構 2 基を検出。広範囲に広がることを確認する。	『特別史跡大須賀式列石周辺の遺構発掘調査報告書 (9)』1993 年 3 月
5年	万葉の北側指定地 (D3 区・D4 区)	3,180 m ²	遺構跡、配石列 (出入り口) を検出。列石周囲には規則的に遺構が分布することが確認された。	『特別史跡大須賀式列石周辺の遺構発掘調査報告書 (10)』1994 年 3 月
6年	万葉の東側指定地 (D6 区) 史跡の北東側の指定地外	2,656 m ² 1,520 m ²	遺構跡、フラスコ状土坑等を検出。列石周囲には規則的に遺構が分布することを確認した。	『特別史跡大須賀式列石周辺の遺構発掘調査報告書 (11)』1995 年 3 月
7年	万葉の南側指定地 (D7 区)	3,176 m ²	遺構跡、フラスコ状土坑等を検出。列石周囲には規則的に遺構が分布することを確認的となった。	『特別史跡大須賀式列石周辺の遺構発掘調査報告書 (12)』1996 年 3 月
8年	万葉の北側 (F4 区)	3,878 m ²	盆地に配置された遺構跡、大規模な遺構配石遺構を検出する。	『特別史跡大須賀式列石周辺の遺構発掘調査報告書 (13)』1997 年 3 月
9年	史跡の北側 (F5 区)	3,410 m ²	列石と関連のある遺構の広がり (北端部) を検出する。円筒形陶器 5 基を検出する。	『特別史跡大須賀式列石周辺の遺構発掘調査報告書 (14)』1998 年 3 月
10年	万葉の南側指定地 (D8 区) 万葉の南側 (G2 区) 万葉の南側 (F6 区)	4,508 m ²	D8 区の調査によって建築跡、フラスコ状土坑等を検出。列石周囲には規則的に遺構が分布することが確定された。	『特別史跡大須賀式列石周辺の遺構発掘調査報告書 (15)』1999 年 3 月
11年	万葉遺跡内石 (D9 区) 野中堂の南側指定地 (E5 区)	3,910 m ²	野中堂遺跡列石を中心に広範囲に遺構が分布することを確認された。	『特別史跡大須賀式列石周辺の遺構発掘調査報告書 (16)』2000 年 3 月
12年	野中堂の南側指定地 (E3 区)	2,743 m ²	遺構跡、フラスコ状土坑等多数検出。万葉遺跡内石と同形態を示すことが確認された。	『特別史跡大須賀式列石周辺の遺構発掘調査報告書 (17)』2001 年 3 月
	史跡の北東側の指定地外	931 m ²	フラスコ状土坑を検出。史跡指定地外にも遺構が分布することが確認された。	『特別史跡大須賀式列石周辺の遺構発掘調査報告書 (18)』2001 年 3 月
13年	野中堂の南側指定地 (E3 区) 野中堂の南側 (E4 区)	663 m ²	E3 区より列石とおおむね同時期の整穴住居跡を検出。E4 区からはカメ積みや土葺き配石遺構が検出され。野中堂と関連のある遺構が広範囲に分布することが確認された。	『特別史跡大須賀式列石周辺の遺構発掘調査報告書 (19)』1993 年 3 月
14年	万葉の西側指定地 (D9 区) 万葉の南側 (G3 区)	1,545 m ²	D9 区より列石と関連が非常に強い整穴住居跡 8 棟を検出。	『特別史跡大須賀式列石周辺の遺構発掘調査報告書 (19)』1996 年 3 月
15年	万葉の西側指定地 (G4 区)	1,485 m ²	D9 区で検出された整穴住居の南側の広がりを確認。	『特別史跡大須賀式列石周辺の遺構発掘調査報告書 (20)』2002 年 3 月
16年度	万葉の南側指定地 (G5 区)	770 m ²	土坑・燒成配石等を検出。史跡主要部から離れるにしたがって遺構の分布が異なることを確認。	『特別史跡大須賀式列石周辺の遺構発掘調査報告書 (21)』2003 年 3 月
17年度	一本木後口地区 (A4 区・A5 区)	1,547 m ²	一本木後口配石遺構群の南側を調査。新たに 18 基の配石を確認。二つとも高さとなる可能性を示唆。	『特別史跡大須賀式列石周辺の遺構発掘調査報告書 (22)』2006 年 3 月

おり、特に盆地東側の台地の密集度は高い。

第3図は、中通台地周辺の遺跡分布図である。表記した遺跡はこれまでに発掘調査が実施されたものを抽出したものであり、それ以外の遺跡は表記していない。時代・時期順に表記した遺跡の特徴をまとめると。

図面上で最も古い時期の遺跡は、物見坂III遺跡（No.12・No.13）である。No.12は平成13年度、秋田県教育委員会により、No.13は平成16年度に鹿角市教育委員会によって発掘調査が実施されている。遺跡名は同じであるが地形的な要素から本来は二つの遺跡に区分されるべきものと考えられる。秋田県教委の発掘調査によって、縄文時代早期の土器の様相が明らかにされ、鹿角市教育委の調査によって市内ではじめ早期の竪穴住居1棟、土坑38基が発見され、市内の最も古い集落の様子が明らかにされた。

縄文時代前期・中期を中心として営まれた遺跡は図面内に所在しない。どちらかというと鹿角市中央部や南部に所在し、代表的な遺跡は清水向遺跡、天戸森遺跡で、いずれも集落跡である。清水向遺跡では円筒下層d式時期の住居2棟、天戸森遺跡からは円筒上層e式～大木8・9式～中の平III式期の住居が140棟も発見されている。

後期に至ると大規模な遺跡は減少するが、市内各地に分布するようになる。最も代表的な遺跡が特別史跡大湯環状列石であり、その周辺には環状列石と関連が強いと考えられる下内野III遺跡（No.1）、小清水遺跡（No.3）がある。さらには米代川を挟んだ高屋集落の後方台地上には高屋館跡の環状列石が所在している。

特別史跡大湯環状列石は、昭和6年の発見以来、調査と研究が継続されている。昭和26年・27年の文化財保護委員会の発掘調査を経て昭和26年には史跡に、昭和31年には特別史跡に指定された。その後昭和48年～51年にかけて秋田県教育委員会、鹿角市教育委員会によって周辺遺跡の調査が行われ、環状列石と直接又は間接的に関連する遺跡の範囲が把握された。昭和59年からは鹿角市教育委員会が主体となり調査を行っており、現在も継続調査している。発掘調査と平行し、指定地の追加指定事務を行うとともに、平成3年度からは指定地の公有化を進め、全体の約91%の公有化が完了している。さらに平成10年度には文化庁の地方拠点地域史跡整備事業に採択された。史跡が余りにも広大であることから第I期から第IV期（1期は5ヶ年）に分けて行うこととし、10年度から第I期環境整備、15年度から第II期環境整備を行っている。第I期の主な整備内容は万座・野中堂環状列石を中心に環状列石の保存処理、遺構や自然環境の復元、仮称体験学習館（現 大湯ストーンサークル館）建設を、第II期では万座環状列石西侧地区の遺構と自然環境の復元を行っている。

また、平成17年9月26日、文化庁が「世界遺産暫定リスト一覧表」への登載遺産を各自治体に公募したことから、秋田県・北秋田市の共同提案として大湯環状列石と伊勢堂岱遺跡を「ス

トーンサークル」として提案書を提出した。その結果平成18年1月23日、文化庁発表において「北東北3県・北海道の縄文遺跡を一体として提案する」ようにとの指摘があり、初年度の暫定リスト登録は見送られた。

大湯環状列石周辺には環状列石との関連が注目される遺跡がある。同じ台地上に位置する小清水遺跡（№3）、大湯川を隔てた下内野Ⅲ遺跡である。両遺跡とも環状列石を構築する石材である石英閃綠玢岩が多数露頭しており、配石遺構群又は環状列石の存在が予想される。

また、高屋館跡の環状列石は平成元年に秋田県教委によって発掘調査され、直径約34mの環状列石とそれを取り囲み規則的な配置を示す26棟の掘立柱建物が発見されている。

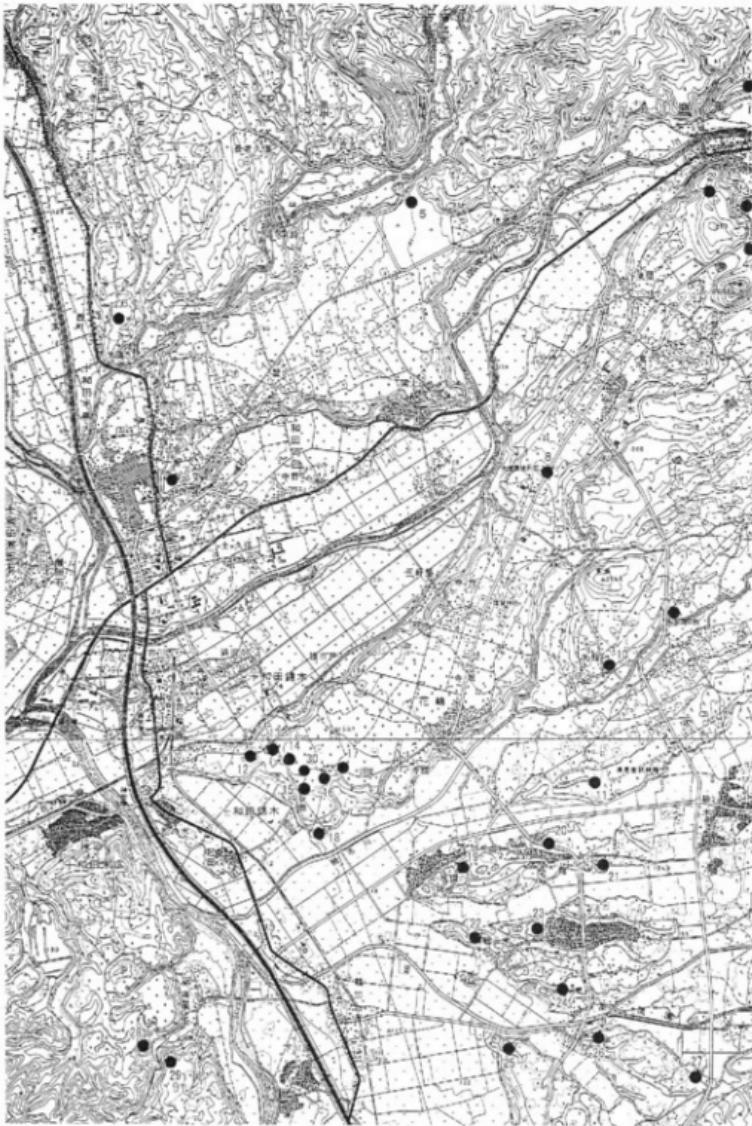
後期末葉から晩期の遺跡として草木A遺跡がある。昭和47年に鹿角広域農道建設に伴い消失する部分の発掘調査が行われた。また、平成18年にはほ場整備事業に伴う範囲確認調査が行われている。この結果、後期末葉から晩期にかけての土器が多量に出土しており、集落の存在を予期できる。

弥生時代の単独遺跡はほとんどなく、発掘調査によって土器片が出土する程度である。最もまとまって遺物が出土した遺跡は物見坂Ⅲ遺跡、物見坂Ⅱ遺跡で小坂X式土器が出土している。

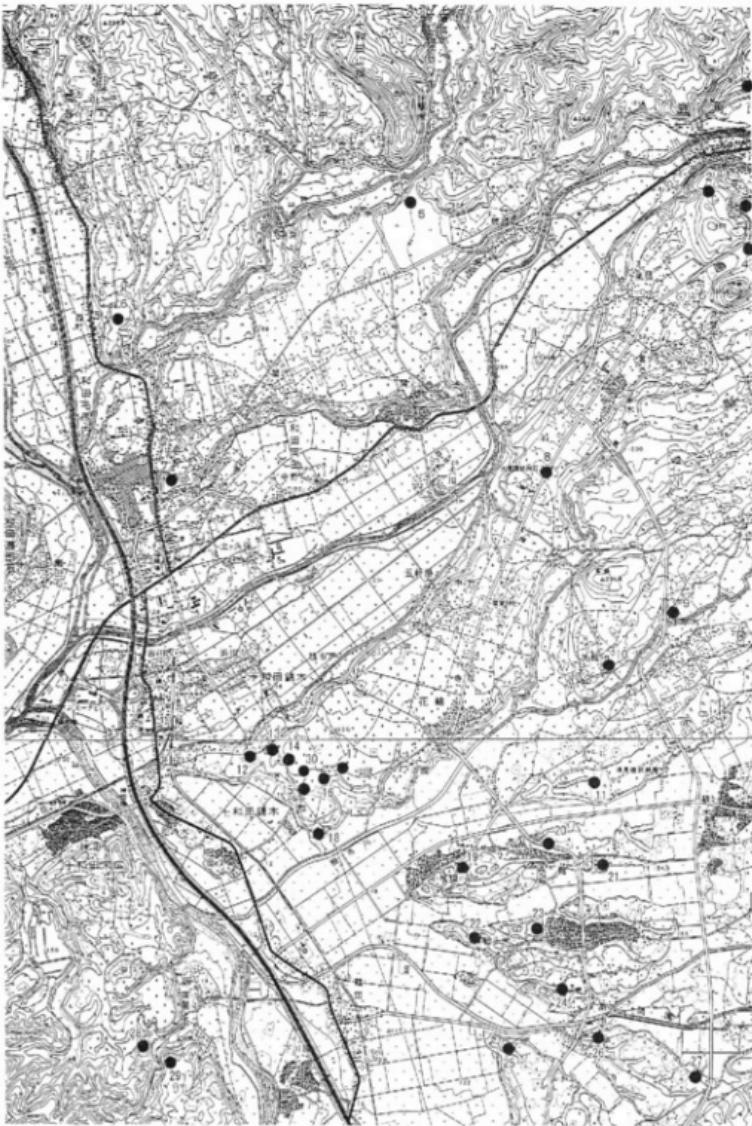
奈良時代の遺跡は鹿角市北部に集中している傾向にあり、本地域では物見坂Ⅲ遺跡（№13）、小枝桜館跡（№19）、源田平遺跡（№21）がこれに当たる。堅穴住居とともに丸底の土師器壺、頸部に段を有する長胴の土師器甕が出土している。

平安時代に入ると遺跡の数は爆発的に多くなり市内全域に分布する。そのほとんどは集落であるが、本遺跡ののる台地では集落とともに円墳が造られるようになる。平成16年度に調査を実施した物見坂Ⅱ遺跡では4基の円墳とともに鐵手刀2本、鎧金具が発見された。また、以前から知られていた枯草坂古墳（枯草坂Ⅰ遺跡 №18）は台地の南側斜面中段に所在する。勾玉やガラス玉が出土しており、東京上野博物館、秋田県立博物館、大湯ストーンサークル館で公開展示されている。また、鹿角市史に紹介されている泉森出土の鉄劍は記載文書を詳細に読み解くと、鹿角沢Ⅱ遺跡の南西側の台地縁に所在する泉森Ⅰ遺跡であることが分かる。泉森は「蝦夷森」がなまって泉森に変化したものと考えられることから、鹿角市北半にはエミシ・蝦夷と関連した多くの遺跡がまだ地中に眠っているものと判断される。

中世に入ると鹿角地区には多くの館跡が構築される。中世の館跡は、台地の先端を空堀で区切った多郭連続式の形態が特徴となっている。承久の乱後、関東武士団に恩賞として鹿角の土地が与えられ、彼らがこの地を支配するために築いた城館である。館跡に隣接して集落が発達し「一館一村」の形態をとっている。小枝指館跡（№19）は昭和30年東京大学東洋文化研究所によって、平成3年鹿角市教育委員会によって発掘調査が行われ、それぞれの調査によって「館は桃山時代まで存続していたこと」、「館構築の際の残土を利用し、館南側の湿地を埋め立て平



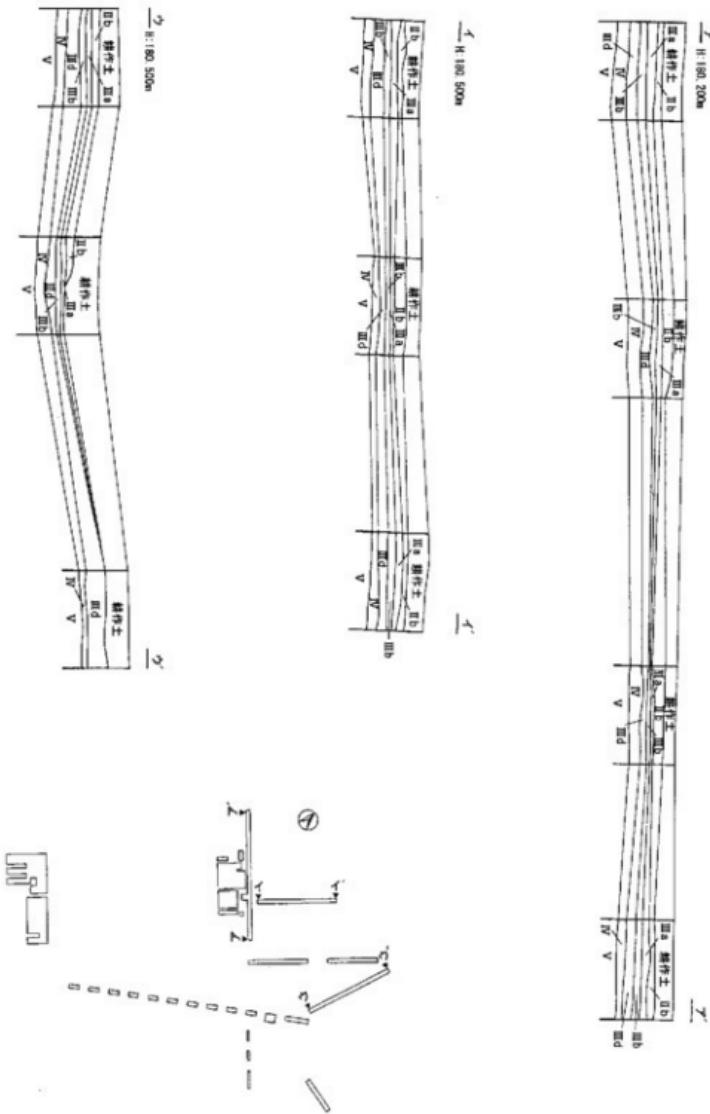
第3図 周辺の遺跡



第3図 周辺の遺跡

第2表 周辺の遺跡一覧表

No.	遺跡名	所在地	遺跡の種別	遺構と遺物	時期	以前報告書・参考
1	下内野三	鹿角市下内野大字下内野	配石遺構	配石遺構	縄文後期	鹿角市 77 「特別史跡大場遺跡(1)」 2005年
2	鹿角城跡	十和田大桑字古村	遺跡		中世	鹿角市 55 「鹿角の城(3) 鹿角城跡」 1984年
3	小清水	十和田大桑字小清水	配石遺構	配石遺構	縄文後期	鹿角市 77 「特別史跡大場遺跡(1)」 2005年
4	佐野原一塙塚	十和田大桑字佐野原	一塙塚	一塙塚	近世	鹿角市 55 「鹿角市の文化財」 1996年
5	下砂沢	十和田山根字上ノ平	配石遺構	配石遺構	縄文後期	鹿角市 40 「下砂沢跡発掘調査報告書」 1990年
6	当麻塚跡	十和田毛馬字内吉塚	遺跡・墓葬	聖火遺構・塚跡	中世・近世	鹿角市 37 「当麻塚跡発掘調査報告書」 1988年
7	船崎越跡	十和田大桑字内舟崎	遺跡	船崎・土坑	中世・近世	鹿角市 36 「船崎越跡発掘調査報告書」 1989年
8	大通塚伊河石	十和田大桑字万登	處状列石	處状列石ほか	縄文後期	鹿角市 77 「特別史跡大通塚伊河石(1)」 2005年
9	草木A	十和田大桑字草木小屋	遺物密集地	土器	縄文後期	秋田県 35 「鹿角大通塚伊河石遺跡調査報告書」 1975年
10	大通B	十和田大桑字大通	遺物密集地	土器	縄文	
11	一ツ森塚跡	石崎字一ツ森	遺跡	遺跡	平安	鹿角市 30 「鹿角の城(5) 一ツ森跡」 1986年
12	物見坂塚	十和田大桑字物見坂	墓葬	聖火生息・土器	縄文早中期・平安	秋田県 354 「物見坂塚」 2005年
13	物見坂塚	十和田大桑字物見坂	墓葬	聖火生息・土器	縄文早中期	鹿角市 79 「物見坂塚・物見坂II(1)」 鹿角市 2005年
14	物見坂II	十和田大桑字物見坂	墓葬	聖火生息	平安	
15	鬼塚I	十和田大桑字鬼塚	墓葬・古井	直刀	平安	鹿角市「鹿角市史」 1982年
16	鬼塚II	十和田大桑字鬼塚	墓葬		平安	
17	鹿角城II	十和田花輪字鹿角城	古墳跡	古墳・石室	前秦末期	前田修介「秋田県の考古学」 1964年 吉川弘文館
18	石塚塚	十和田花輪字石塚	古墳跡	古墳・石室	前秦末期	前田修介「秋田県の考古学」 1964年 吉川弘文館
19	小枝用賀跡	花輪字甲子用賀	遺跡・墓葬	聖火生息・遺跡	平安・中世	鹿角市 44 「小枝用賀跡発掘調査報告書」 1992年
20	鳥居	花輪字鳥居	墓葬	聖火生息	平安	秋田県 49 「鳥居遺跡発掘調査報告書」 1978年
21	源治平寺	花輪字源治平	墓葬	聖火生息	平安	秋田県 49 「鳥居遺跡発掘調査報告書」 1978年に収録
22	新小舟船跡	花輪字新小舟	遺跡・墓葬	聖火生息・遺跡	平安・中世	鹿角市 34 「新小舟船跡(1) 水谷船塚」 1980年
23	小舟船跡	花輪字小舟	遺跡・墓葬	聖火生息・遺跡	平安・中世	鹿角市 30 「鹿角の城(5) 小舟船跡」 1986年
24	鹿角向塚跡	花輪字鹿角向	遺跡・墓葬	聖火生息・遺跡	平安・中世	鹿角市 22 「鹿角市向塚跡発掘調査報告書」 1982年
25	立谷野塚跡	花輪字立谷野	遺跡	遺跡	中世	鹿角市 30 「鹿角の城(5) 立谷野塚跡」 1986年
26	高市塚跡	花輪字高市	遺跡	遺跡	中世	鹿角市 30 「鹿角の城(5) 高市塚跡」 1986年
27	御野V	花輪字御野	墓葬	聖火生息	平安	十和田高等学校『山脈21』 1973年
28	大田谷地塚跡	花輪字大田谷地	墓葬・遺跡	聖火生息・遺跡	平安・中世	秋田県 172 号 「大田谷地塚跡」 1988年
29	風呂塚跡	花輪字塚ノ沢	遺跡・古河	聖火古河・遺跡	縄文後期・中世	秋田県 198 号 「風呂塚跡」 1990年
30	物見坂I	十和田花輪字物見坂	古墳跡	古墳	平安	鹿角市 86 「物見坂II(2)・物見坂I」 2006年



第4図 基本層序図

場を作り出していたこと」などが分かっている。

江戸時代に入ると政情も安定し、柏崎館跡（No.6）に毛馬内通代官所、花輪館跡（花輪小学校）に花輪通代官所が置かれる。毛馬内地区は鹿角街道（大館市田代～毛馬内～花輪～岩手県盛岡市）・濁川街道（毛馬内～青森県碇ヶ関）・来満街道（毛馬内～大湯～青森県八戸市）が交差する交通の要所でもあった。

（藤井安正）

4 遺跡の層序

ここでは、表土から申ヶ野軽石質火山灰層と考えられる黄褐色火山灰層までについて記載する。それ以下の地層については先に述べたとおりである。

第Ⅰ層は大湯浮石層までの堆積層で、暗褐色土である。そのほとんどが耕作土で、植物根の混入が見られる。

第Ⅱ層はにぶい黄橙色や明黄褐色の浮石層で、十和田a降下火山灰である。約1,000年前の十和田湖の噴火によって噴き上げられた降下軽石と考えられている。本層は、浮石粒の大きさや色調などから2層（Ⅱa、Ⅱb）に分層できる。

第Ⅲ層は十和田a降下火山灰から地山直上の暗褐色土（IV層）までの黒色または黒褐色の土層である。色調や堅さなどから4層（Ⅲa～Ⅲd）に細分される。

第Ⅳ層は地山直上（下位火山灰）の層で、暗褐色でわずかに粘性があり、しまりのある層である。

第Ⅴ層は先に述べたとおり、申ヶ野火山灰層と考えられる黄褐色の火山灰層である。本層は上位に堆積する十和田a降下火山灰層に対比していることから「下位火山灰」、あるいは関東ローム層に相当するところからロームと呼ばれているものである。本報告書では、本層を「V層」以外に「地山」と表現している。

（三浦貴子）

第Ⅱ章 調査の概要

1. 調査要項

1. 遺跡名 特別史跡大湯環状列石（遺跡番号123）
2. 所在地 秋田県鹿角市十和田字万座、字野中堂、字一本木後口
3. 史跡指定 史跡指定年月日 史跡指定 昭和26年12月26日
特別史跡指定 昭和31年8月15日
- 史跡指定面積 249,833.60m²
4. 調査対象面積 25,700m²
5. 発掘調査面積 1,340m²
6. 調査期間 発掘調査 平成18年8月17日～平成18年12月12日
整理報告書作成 平成18年10月12日～平成19年3月30日
7. 調査主体者 鹿角市教育委員会
8. 調査担当者 鹿角市教育委員会生涯学習課 文化財班長 藤井安正
主事三浦貴子
9. 調査参加者 調査指導 榎一郎
(秋田県教育庁生涯学習課文化財保護室副主幹)
調査員 錬田健一(秋田県立十和田高等学校 校長)
山谷昌久(鹿角市立八幡平中学校 教諭)
調査補助員 武田正美
作業員 見沢サツ子、柳館愛子、闇イサ、田中美千栄、
田中栄子、成田由紀子、三浦茂雄、大森勝次、
佐藤一祐、石川三郎、黒沢謙雄、兎沢優子、
兎沢寛馳子、黒沢珠子、湯瀬晴子、成田則子、
加賀ユキ子、湯瀬トキ、黒沢文子、福島美紀子、
田中辰美、工藤幸江、大森みどり、三ヶ田さゆり
10. 事務局 鹿角市教育委員会生涯学習課
生涯学習課課長 相馬田富
文化財班長 藤井安正
主事田村信仁
主事三浦貴子
11. 協力機関等 文化庁文化財部記念物課、秋田県教育委員会、

秋田県埋蔵文化財センター、秋田県立博物館、
岩手県立博物館、北上市埋蔵文化財センター、

2 調査の目的

昭和48年～51年の分布調査により万座・野中堂環状列石の他に遺構や遺物が広く分布（大湯環状列石周辺遺跡）することが知られていた。鹿角市では広範囲に分布する遺構の形態、性格、構築時期並びに環状列石との関連の解明を主目的に昭和59年度より発掘調査を継続している。昭和59年度から61年度は一本木後口配石遺構群、62年度から63年度は万座環状列石の北西～西側隣接地、平成元年度から2年度には同列石の北側台地縁辺部、平成3年度には万座環状列石の南側に所在する配石遺構群の調査を行った。

平成2年3月に周辺史跡のほとんどが特別史跡に指定されたことから、3年度から追加指定地の公有化を開始、4年3月には「特別史跡大湯環状列石環境整備基本構想」をまとめるに至った。

この「基本構想」を背景に平成4年度からは史跡の環境整備を進めるため、直接的な資料を得る目的で発掘調査を継続した。

環境整備の年次計画を考慮し、第Ⅰ期環境整備計画地である万座環状列石、野中堂環状列石周辺の順に行うことにして、4年から10年には万座環状列石隣接部及び同列石北側地区、11年から13年にかけて野中堂環状列石隣接部の発掘調査を実施した。

平成10年度から14年度には第Ⅰ期環境整備として、万座・野中堂環状列石周辺地域の遺構や自然環境復元、さらに史跡北西側隣接地にガイダンス施設（大湯ストーンサークル館）の建設を行った。

平成14年度からは第Ⅱ期環境整備計画地である史跡西側に調査区を移し、遺構の分布、地形と基本層序の観察を目的に行い、16年度で同計画地内の発掘調査を終了している。

平成17年度からは第Ⅲ期環境整備計画地である史跡東側に調査区を移している。一本木後口配石遺構群の広がりとその他の遺構の分布状況、地形と基本層序の確認を目的に17年度には一本木後口配石遺構群南側地区、本年度は同遺構群北側の発掘調査を行った。

第1次から第22次発掘調査の成果については、第1表に示した。

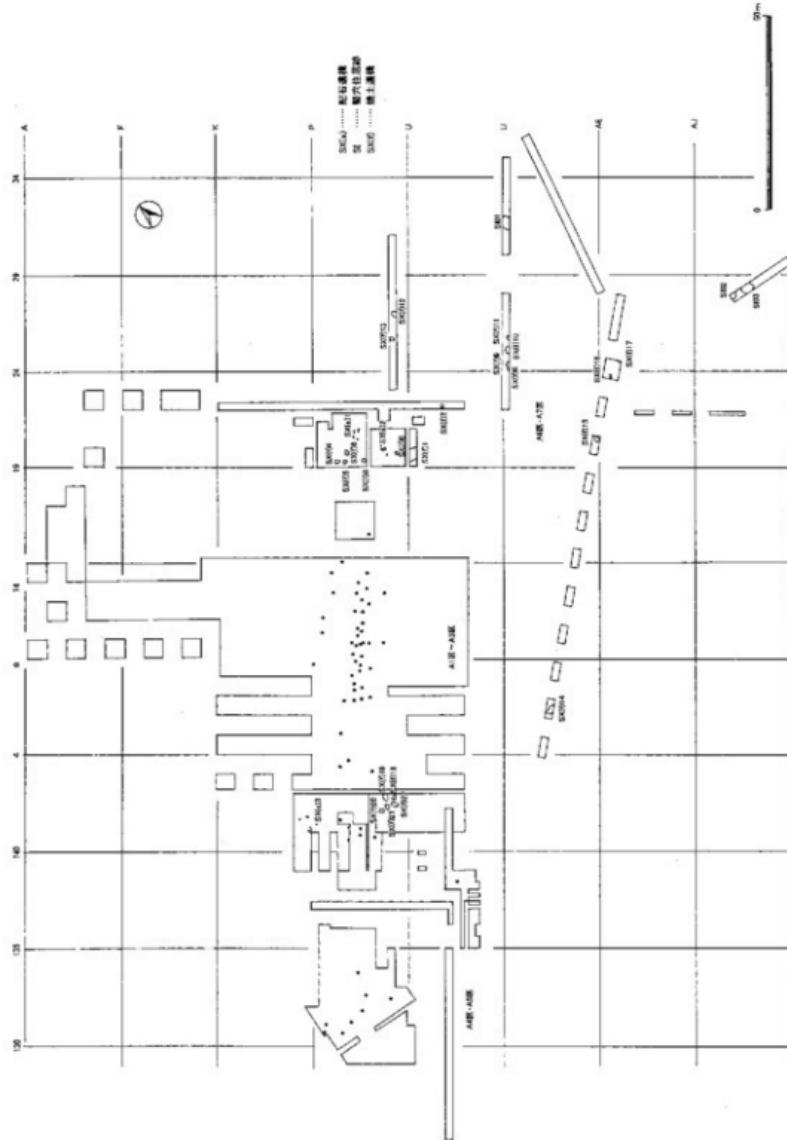
(藤井安正)

3 調査方法

グリッドは、第1次発掘調査以来のグリッドを延長した。N-49°-Wを基準とした5m四方のグリッドとし、グリッドの名称はアルファベットと算用数字を組み合わせ、西側の杭をもってグリッド名とした。

第5図 調査区位置図





第6図 レンチ配置図・造形配置図

発掘は遺跡の保存を第一に考え、トレーニング方法を基本としたが、必要に応じて拡張することとした。トレーニングの設定場所については一本木後口配石遺構群の分布状況、地形を考慮したほか、ボーリング探査（40cmメッシュ）を行い、確実に遺構を捉えるようにした。

表土については重機で除去、II層（大湯浮石層：十和田a降下火山灰）以下については人力による分層発掘とし、極力上面での遺構確認に努めた。

確認された遺構については発見順・遺構ごとに番号を付したが、精査途中で遺構として認定できなかったものについては欠番とした。

遺構の実測図作成はグリッド杭を利用し、簡易造り方測量により、縮尺1/10、1/20で図化した。なお、現地で作成した実測図については報告書作成段階で写真や調査員メモをもとに修正を加えて、トレースを行った。

遺物の取り上げについては、出土遺物については出土地点・出土レベル等の記録を取り、取り上げるようにした。

写真撮影については、一眼レフカメラ2台とデジタルカメラを使用し、調査の過程や遺物出土状況等を記録した。

4 調査経過

大湯環状列石第23次発掘調査は平成18年8月17日より開始し、1,340m²の調査を終了したのは12月12日であった。以下、調査日誌に基づき調査経過の概要を述べる。

8月17日、調査作業員に調査の目的・方法を説明し、事務連絡を行った後、重機により表土除去の終了した西側のトレーニングから掘り下げ始める。II層以下を層位的に掘り下げ、各層上面での遺構確認を行なった。一本木後口配石遺構群の隣接地でトレーニング設定のされていない区域については、40cm間隔にハンドボーリング探査を行い、配石遺構の検出に努めた。昨年度の第22次調査の際もそうであったが、I層が厚くて堅い上にII層の残りがよかつたため、ボーリング棒がII層で阻まれ、下層の石を探査することに非常に苦労した。

調査開始から9月上旬までは雨が多く、作業は難航する。9月8日、ハンドボーリング探査によって石が確認されていた箇所を掘り下げ、配石の一部とみられる石を確認する。検出された地点は一本木後口配石遺構群との隣接地にあたる。その後、第1号配石遺構の東側からもう1基の配石遺構が確認された。また、調査区北東側では上面に十和田a降下火山灰が堆積した堅穴住居跡が検出された。

10月3日、4日には大湯環状列石環境整備検討委員会が開催され、検出された配石遺構や堅穴住居跡などについて、今後の調査の進め方などのご指導をいただいた。

その後、調査区東側で検出されていた堅穴住居跡の精査を行ったところ、床面から多量の炭

化材が確認された。住居の中央部を中心に壁に向かって放射状に残る状態が確認され、焼失家屋と考えられる。10月は、一本木後口配石遺構群との隣接地を中心にして石の抜き取り痕の有無を調査すると同時に、昨年度配石遺構が検出された箇所と一本木後口配石遺構群との間についても配石遺構の検出に努めた。また、調査区北東端で新たに竪穴住居跡が2軒検出された。

11月に入り、天候が崩れる日が多くなる。調査区北東端で検出された竪穴住居跡の精査を行うとともに、住居跡に隣接する土盛りの調査を行う。調査区北東端については、古い資料に土盛りが多くあったという記述があり、古代の円墳である可能性が考えられたため、土盛りに小トレンチを設定し、調査を行った。

当初の設定よりもトレントが拡張されたため、重機による埋め戻し日数を考え、11月中旬からは精査・図面作成を行いながら、調査が完了した箇所については人力で埋め戻しを行った。11月末には重機により調査区の大部分を埋め戻すも、配石遺構周辺などの図面が間に合わず、埋め戻す。12月に入り、雪が降り始める中、図面作成の後、人力で埋め戻すという必死の作業が続く。

12月12日、現場でのすべての作業を終了し、現場を撤収した。

1月25日、26日には第2回大湯環状列石環境整備検討委員会が開催され、第23次発掘調査の成果について報告を行った。

なお、平成19年1月27日・28日、秋田県埋蔵文化財センター主催の「平成18年度秋田県埋蔵文化財発掘調査報告会」で調査成果の一部を紹介したほか、2月3日に開催された大湯ストーンサークル館事業「縄文に学ぶ」において調査成果を発表した。

(三浦貴子)

第III章 A₆区、A₇区検出遺構と出土遺物

1 縄文時代の遺構と遺物

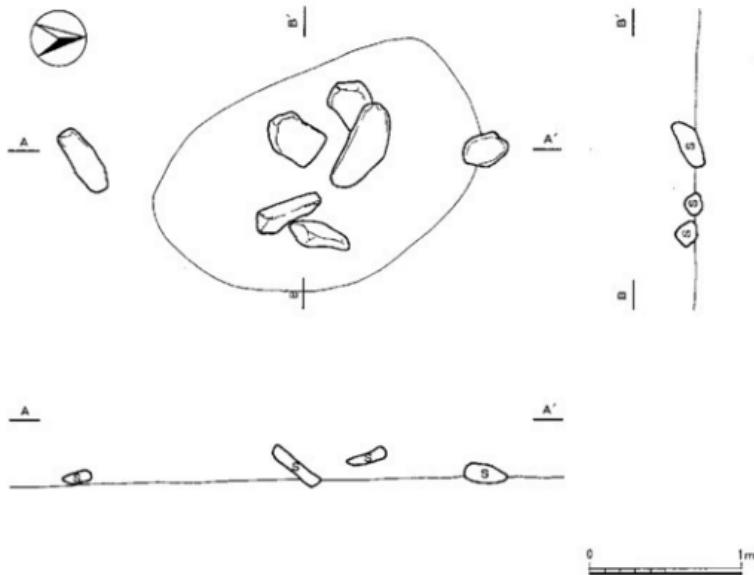
A₆区、A₇区において、確認された縄文時代の遺構は配石遺構3基、焼土遺構22基である。

(1) 配石遺構

A₆区、A₇区において、3基の配石遺構が検出された。

第1号配石遺構（第7図）

調査区西側、一本木後口配石遺構群との隣接地にあたるS-19、20グリッドに位置する。ハンドボーリング探査により、配石の一部を確認し、その後掘り下げてⅢd層面において配石全体を確認した。中央で斜めに傾いている2つの石は、もともとは立石であったものが、耕作の際に機械等で動かされたとみられ、ひどく傷ついているようすをみることができる。その他の石は動かされずに残っているが、配石の構成を分類することはできなかった。配石を中心に地山が多量に混じる楕円形のプランが確認され、下部土坑の存在が考えられる。



第7図 第1号配石遺構実測図

周辺から縄文が施文された小破片の土器が出土した。

本遺構の構築時期は、周辺の出土遺物や層位から縄文時代後期と考えられる。

第2号配石遺構（第8図）

調査区西側、一本木後口配石遺構群との隣接地にあたるR-20グリッドに位置する。

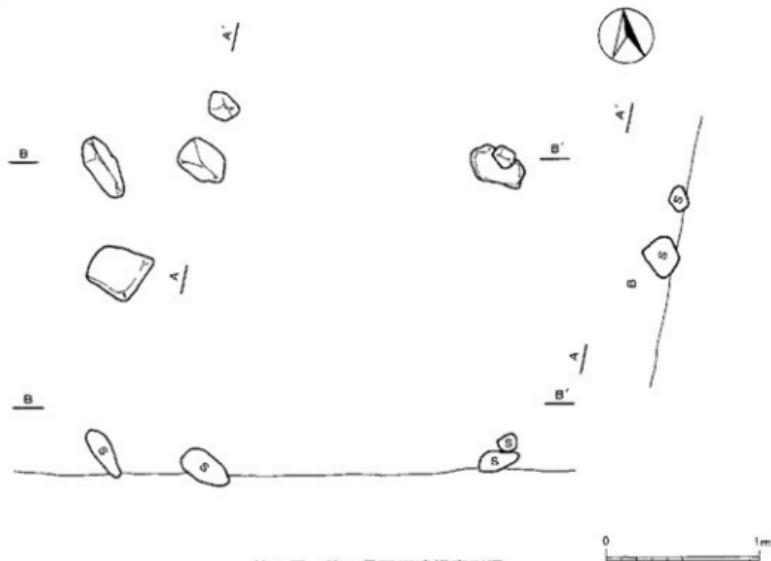
ハンドボーリング探査により一部を確認し、トレンチを拡張することによって全体を確認した。構築層はIII d層面である。南西の2つの石は明らかに動かされており、石の下に十和田a降下火山灰が混入しているようがみてとれる。東側の石は動かされてはないが、配石の構成を確認することはできなかった。抜取痕や下部土坑の痕跡もみることはできなかった。

周辺から縄文が施文された小破片の土器が出土した。

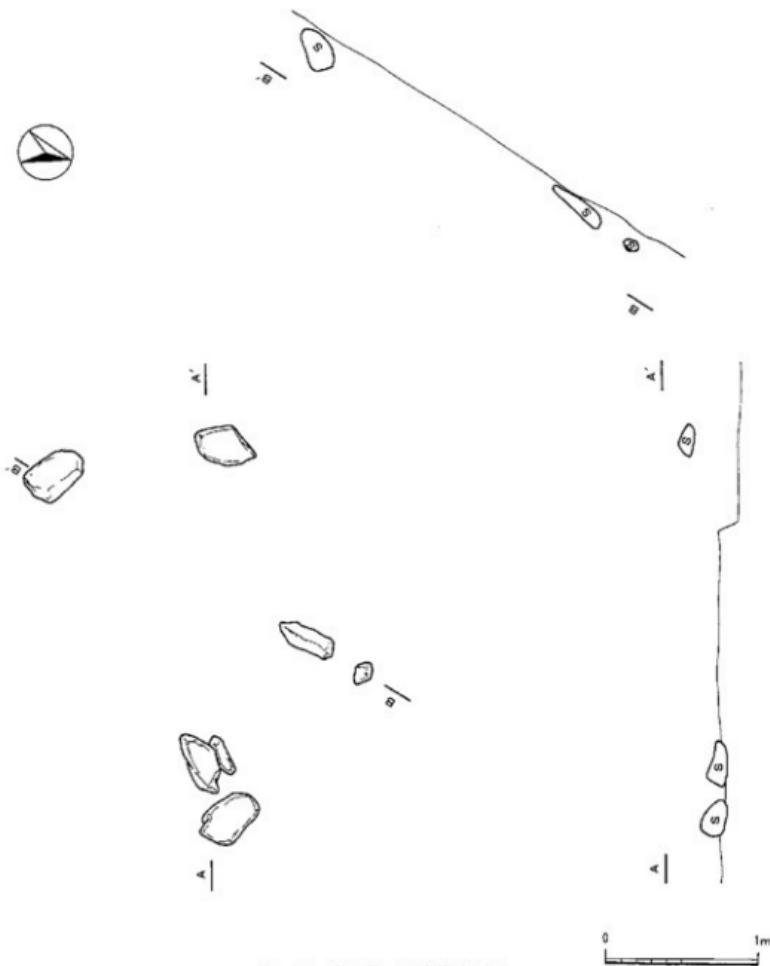
本遺構の構築時期は、周辺の出土遺物や層位から縄文時代後期と考えられる。

第3号配石遺構（第9図）

調査区南西側、昨年度調査区と一本木後口配石遺構群との中間地点にあたるP-141グリッドに位置する。II層面で一部の石を確認し、III d層面で全体を検出した。西側の



第8図 第2号配石遺構実測図



第9図 第3号配石遺構実測図

石は動かされており、石の下に十和田a降下火山灰が混入している。その他の石は動かされていないが、配石の構成を確認することはできなかった。動いていない東側の石の間に、地山を多量に含んだ梢円形のプランを確認した。下部の調査は行わなかつたため不明であるが、下部土坑または倒木痕の可能性がある。

周辺から遺物の出土はみられなかったが、本遺構の構築時期は、層位から縄文時代後

期と考えられる。

(2) 焼土遺構

A₆区、A₇区において、22基の焼土遺構が確認された。

第1号焼土遺構（第10図）

調査区西部、U-19、20グリッドに位置し、III b層面で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は450cm×200cmを測り、焼土は全体に点在し、30cm～44cmを測る。遺物は出土しなかった。

第2号焼土遺構（第10図）

調査区西部、V-22グリッドに位置し、III a層面で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は112cm×78cmを測り、焼土は中央部に位置し、34cm×22cmを測る。遺物は出土しなかった。

第3号焼土遺構（第10図）

調査区西部、R-19グリッドに位置し、III b層上面～中位で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は104cm×82cmを測り、焼土は中央に位置し、82cm×40cmを測る。遺物は出土しなかった。

第4号焼土遺構（第10図）

調査区西部、Q-19グリッドに位置し、III a層上面で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は136cm×118cmを測り、焼土は2ヶ所に点在し、60cm×20cmを測る。遺物は出土しなかった。

第5号焼土遺構（第10図）

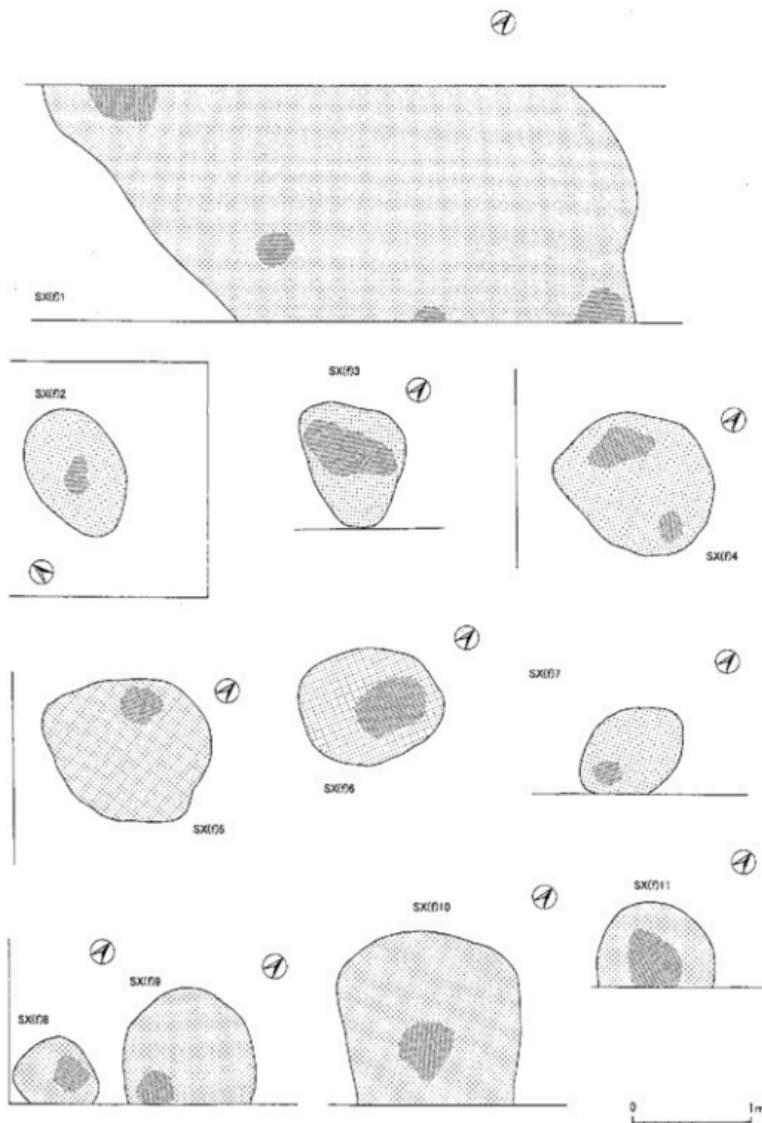
調査区西部、Q-19グリッドに位置し、III a層中位～下面で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は142cm×120cmを測り、焼土は北西側に位置し、118cm×32cmを測る。遺物は出土しなかった。

第6号焼土遺構（第10図）

調査区西部、Q-19グリッドに位置し、III d層上面で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は118cm×100cmを測り、焼土は中央に位置し、62cm×44cmを測る。遺物は出土しなかった。

第7号焼土遺構（第10図）

調査区西部、T-19グリッドに位置し、III b層上面で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は72cm×96cmを測り、焼土は南寄りに位置し、22cm×26cmを測る。遺物は出土しなかった。



第10図 焼土遺構実測図(1)

第8号焼土遺構（第10図）

調査区中央部、Z-24グリッドに位置し、III a層中位で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は74cm×(56)cmを測り、焼土は中央に位置し、30cm×28cmを測る。遺物は出土しなかった。

第9号焼土遺構（第10図）

調査区中央部、Z-24グリッドに位置し、III d層中位で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は128cm×(98)cmを測り、焼土は南寄りに位置し、32cm×(28)cmを測る。遺物は出土しなかった。

第10号焼土遺構（第10図）

調査区中央部、Z-24、25グリッドに位置し、III d層中位で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は144cm×(146)cmを測り、焼土は中央に位置し、50cm×44cmを測る。遺物は出土しなかった。

第11号焼土遺構（第10図）

調査区中央部、Z-25グリッドに位置し、III d層中位で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は100cm×(70)cmを測り、焼土は中央に位置し、44cm×(58)cmを測る。遺物は出土しなかった。

第12号焼土遺構（第11図）

調査区西部、T-27グリッドに位置し、III d層面で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は120cm×(80)cmを測り、焼土は中央に位置し、42cm×(50)cmを測る。遺物は出土しなかった。

第13号焼土遺構（第11図）

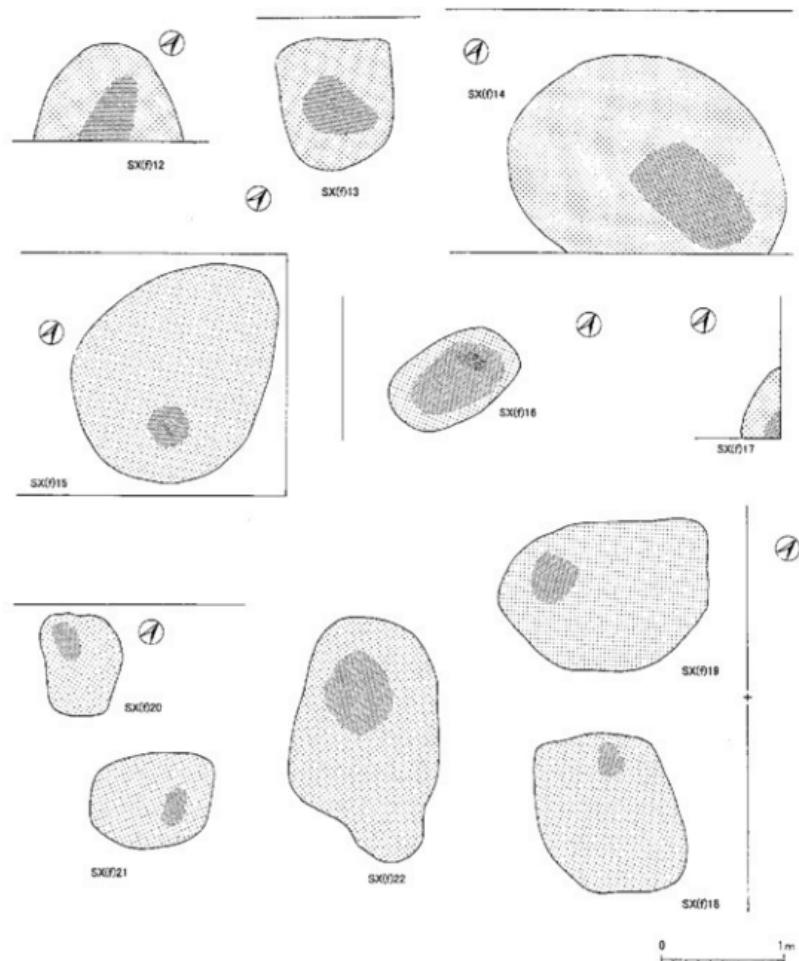
調査区西部、T-25グリッドに位置し、III d層面で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は94cm×108cmを測り、焼土は中央に位置し、66cm×48cmを測る。遺物は出土しなかった。

第14号焼土遺構（第11図）

調査区南部、AB-6グリッドに位置し、III b層上面で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は234cm×(160)cmを測り、焼土は東寄りに位置し、110cm×62cmを測る。遺物は出土しなかった。

第15号焼土遺構（第11図）

調査区南部、AD-20、AE-20グリッドに位置し、III a層中位で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は164cm×176cmを測り、焼土は中央に位置し、34cm×36cmを測る。遺物は出土しなかった。



第11図 焼土遺構実測図(2)

第16号焼土遺構（第11図）

調査区南部、A E - 23グリッドに位置し、III d 層面で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は114cm × 70cmを測り、焼土は中央に位置し、82cm × 50cmを測る。遺物は出土しなかった。

第17号焼土遺構（第11図）

調査区中央部、A F - 24グリッドに位置し、III d 層面で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は(60)cm × (32)cmを測り、焼土は中央に位置し、(24)cm × (14)cmを測る。遺物は出土しなかった。

第18号焼土遺構（第11図）

調査区南西部、T - 1 グリッドに位置し、III d 層面で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は154cm × 112cmを測り、焼土は中央に位置し、24cm × 30cmを測る。遺物は出土しなかった。

第19号焼土遺構（第11図）

調査区南西部、S - 1 グリッドに位置し、III d 層面で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は172cm × 124cmを測り、焼土は西寄りに位置し、40cm × 44cmを測る。遺物は出土しなかった。

第20号焼土遺構（第11図）

調査区南西部、S - 1 グリッドに位置し、III d 層面で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は64cm × 82cmを測り、焼土は西寄りに位置し、22cm × 36cmを測る。遺物は出土しなかった。

第21号焼土遺構（第11図）

調査区南西部、S - 1 グリッドに位置し、III d 層面で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は100cm × 76cmを測り、焼土は北寄りに位置し、20cm × 34cmを測る。遺物は出土しなかった。

第22号焼土遺構（第11図）

調査区南西部、S - 1 、T - 1 グリッドに位置し、III d 層面で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は122cm × 202cmを測り、焼土は西寄りに位置し、60cm × 70cmを測る。遺物は出土しなかった。

(3) 遺構外出土遺物

遺構外より出土した遺物は、縄文土器破片1,099点、石器26点である。

① 土 器（第12図～第19図）

本調査区からは、1,099点の縄文土器破片が出土した。

後期初頭から中葉の土器

1類：隆線文・隆沈文の土器（1～20）

沈線文のみで文様構成されている土器を一括した。調査区西部からの出土が目立つ。深鉢形土器が多くみられる。墜帶をもち、沈線で区画しているものもみられる。焼成は良好で、色調は浅黄橙色を呈するものが多い。

2類：蒂縄文の土器（34～73）

蒂縄文が施文された土器を一括した。破片が小さく、器形や文様構成が明確でないものが多いが、曲線文や入り組み文がみられるものもある。焼成は良好で、色調はにぶい黄橙色、浅黄橙色を呈する。

3類：沈線文の土器（21～33）

地面上や無文化された器面に沈線文を施文するものを一括した。

4類：幾何学文が施文された土器（74・75）

幾何学文的な文様、内部に細縄文を充填したものを一括した。

5類：縄文の土器（76～134）

無筋、単筋縄文を施文した土器を一括した。深鉢形土器が多くみられる。口縁部と胴部の間を縄文圧痕によって区画しているものもみられる。焼成は良好で、にぶい黄橙色や浅黄橙色を呈するものが多い。

6類：撚糸文の土器（135～149）

撚糸文、網目状撚糸文、連鎖状撚糸文が施文された土器を一括した。深鉢形土器が大半を占める。焼成は良好で、浅黄橙色、にぶい黄橙色を呈する。

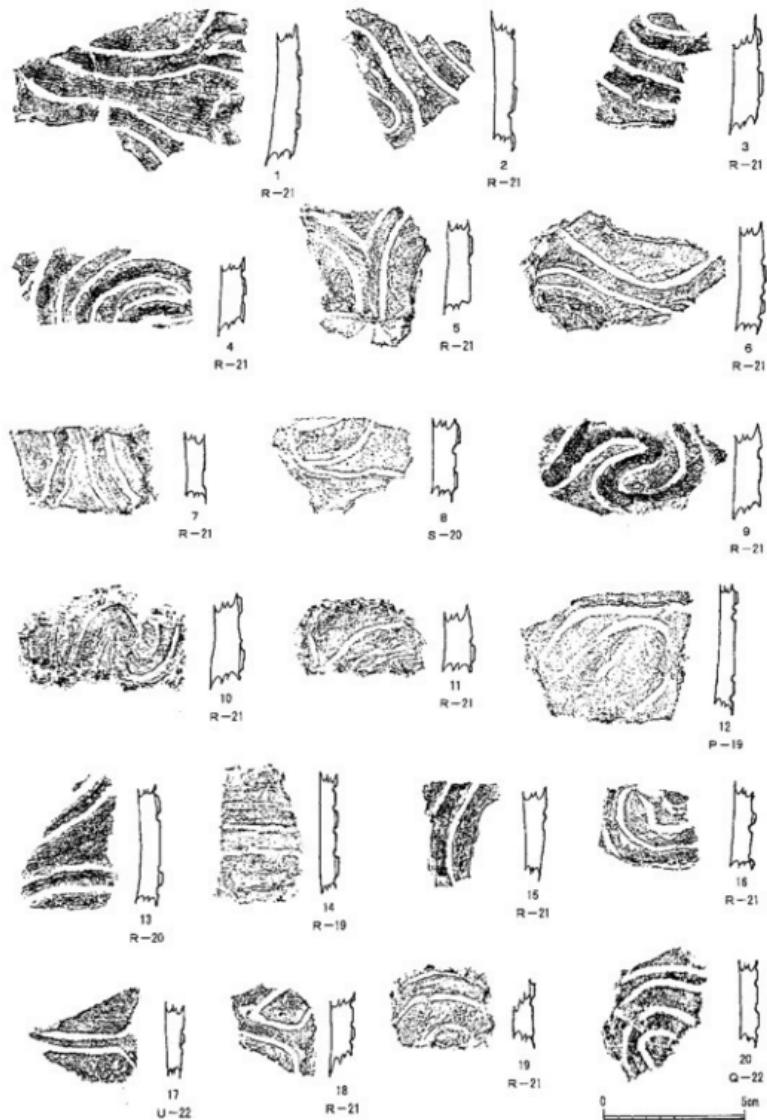
7類：条痕文の土器（151～156）

条痕文を施した土器である。本調査区から出土したものはすべて継位方向の施文である。焼成は良好で、色調は灰褐色や灰黄褐色を呈する。

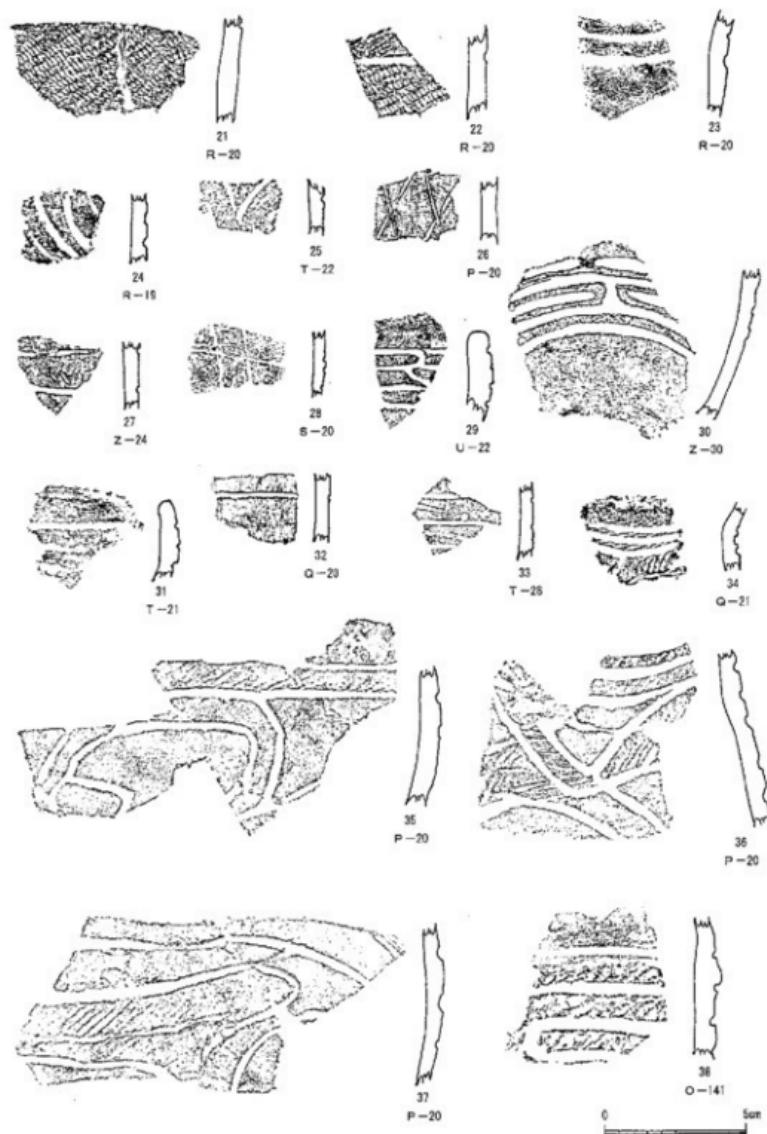
② 石 器（第26図～第27図）

本調査区からは、8点の石器が出土した。いずれも調査区西側からの出土である。1～7は搔器、8は凹石で両面に磨痕がみられる。

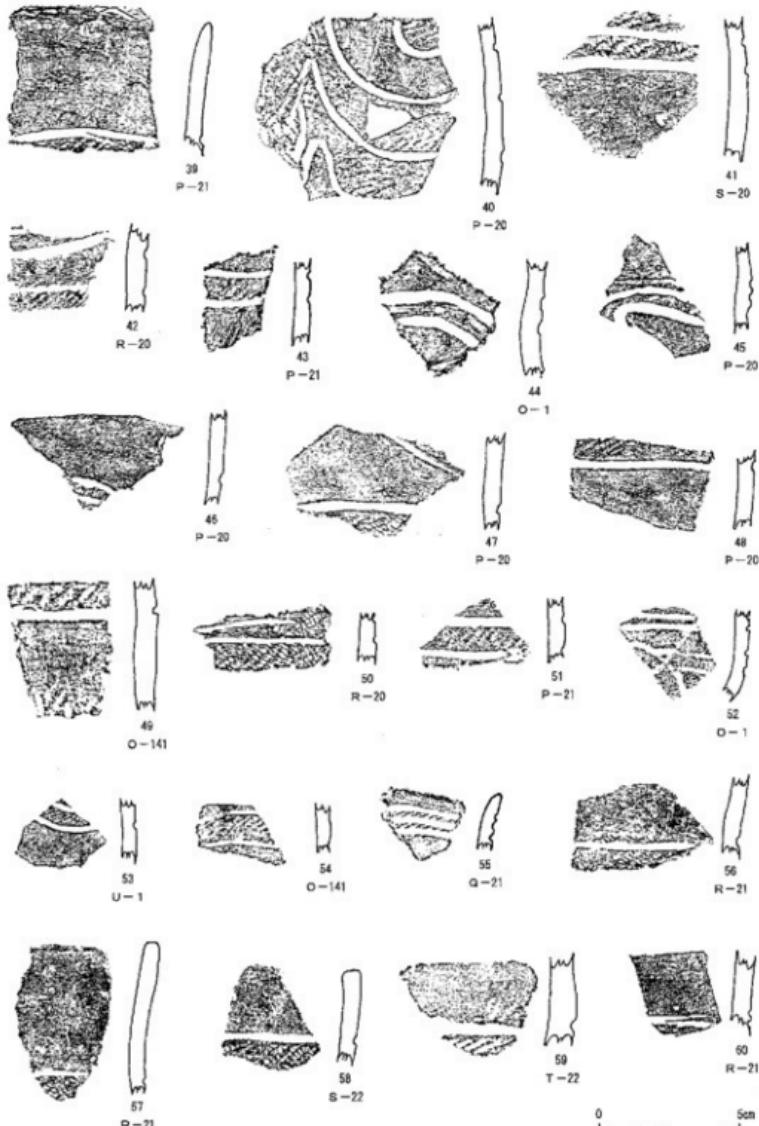
石質は、1～7が硬質頁岩、8が石英安山岩である。



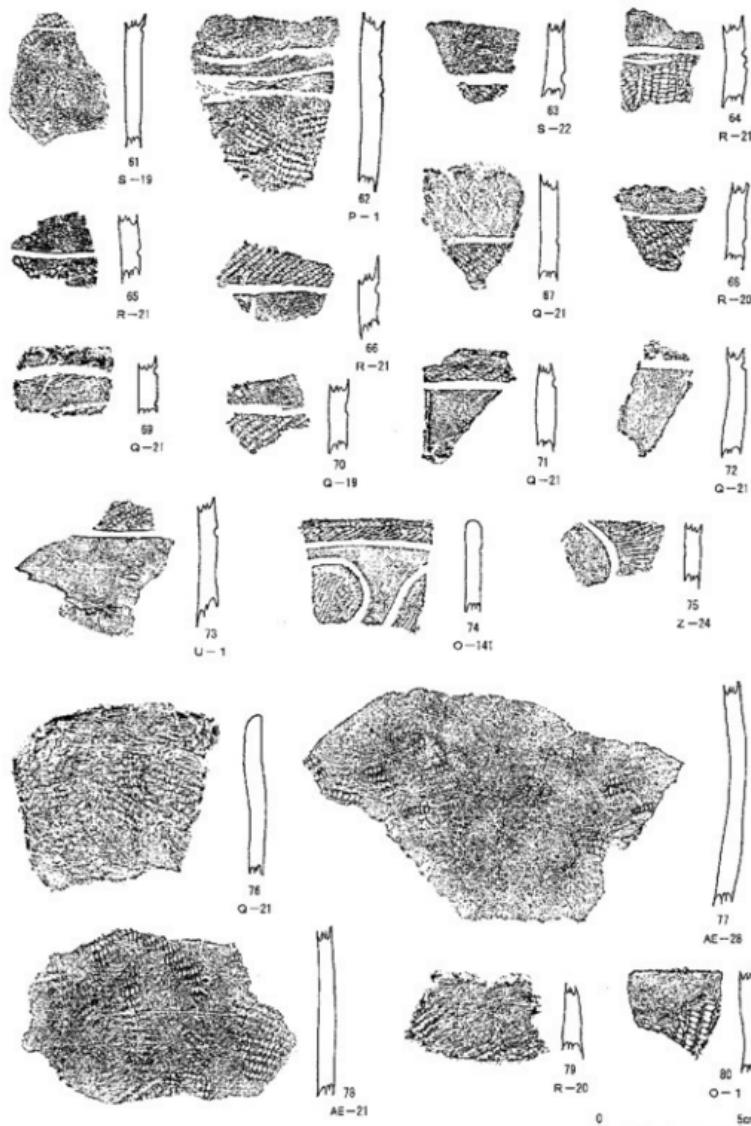
第12図 出土土器(1)



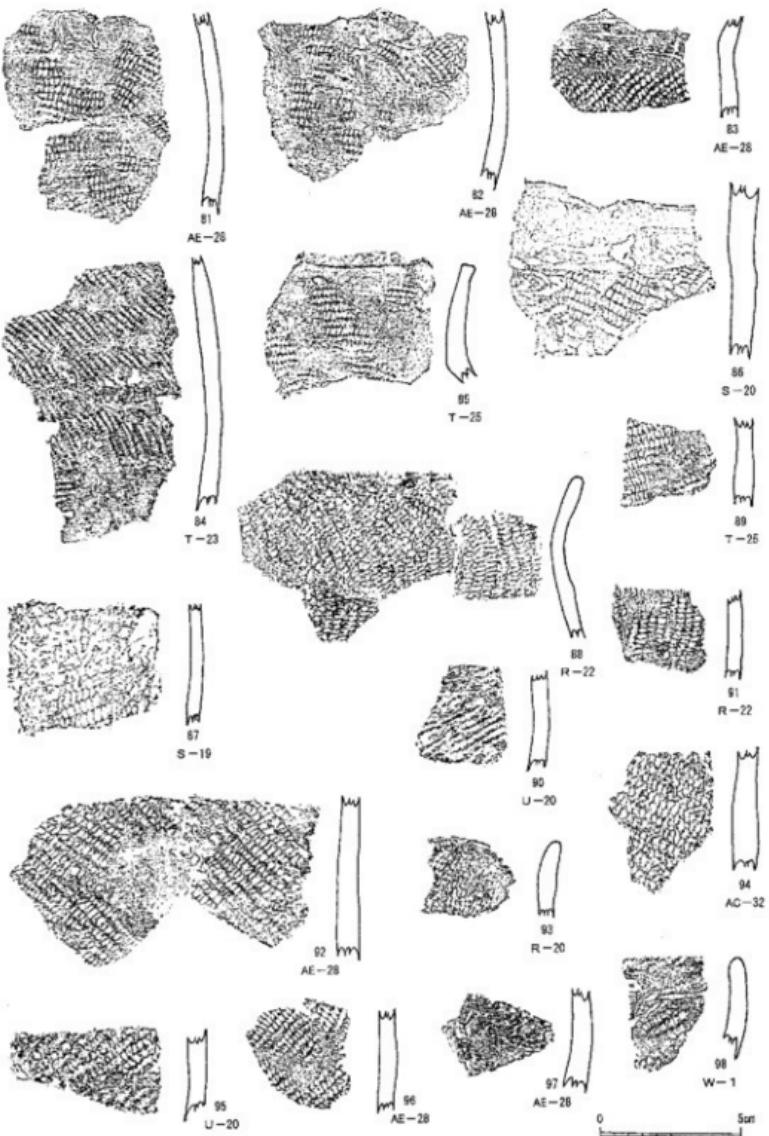
第13図 出土土器(2)



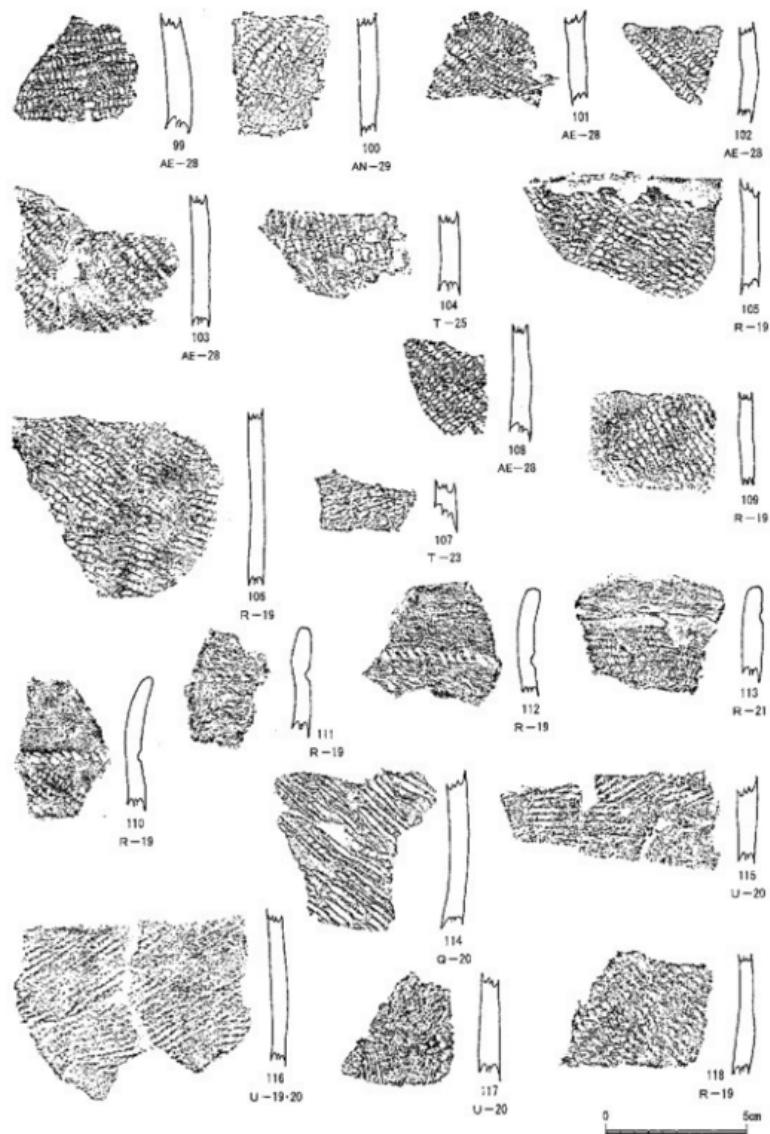
第14図 出土土器(3)



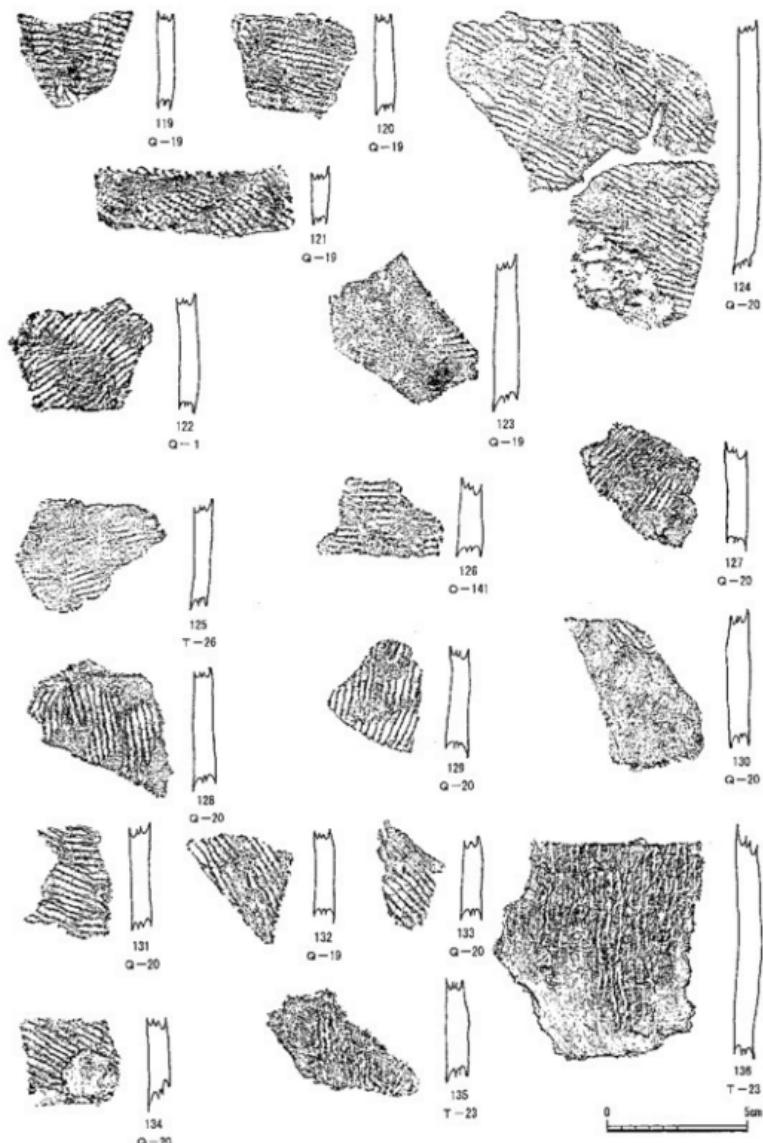
第15図 出土土器(4)



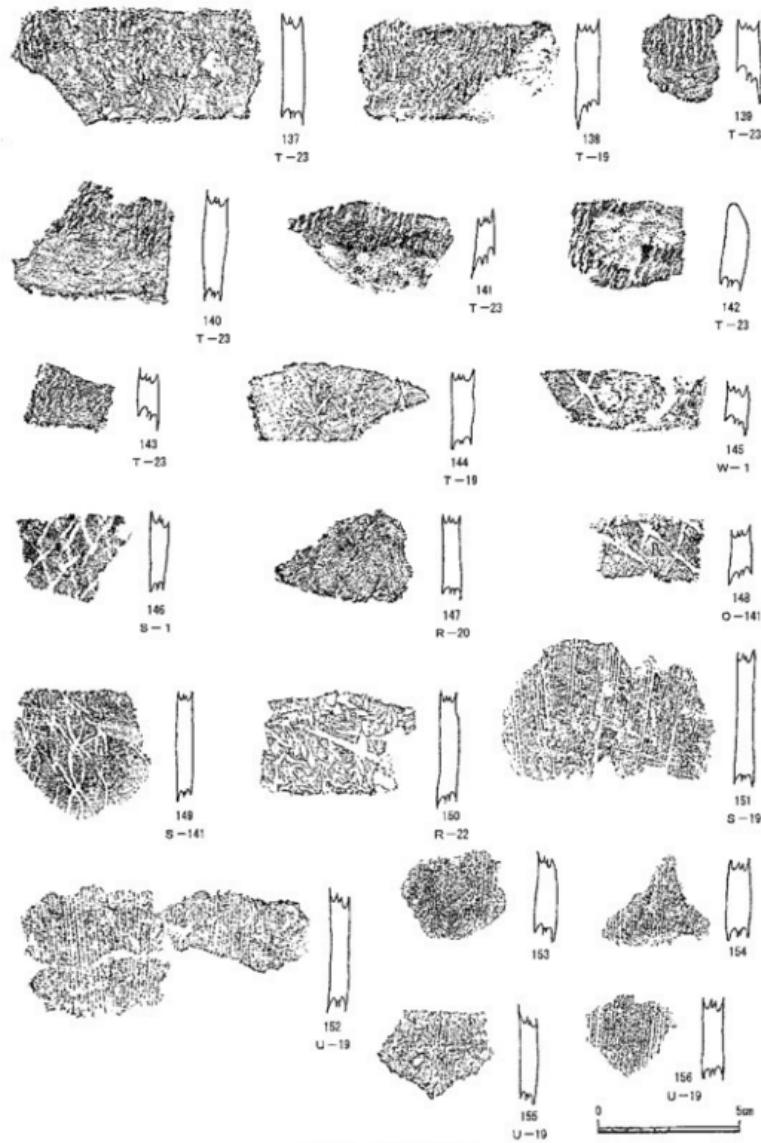
第16図 出土土器(5)



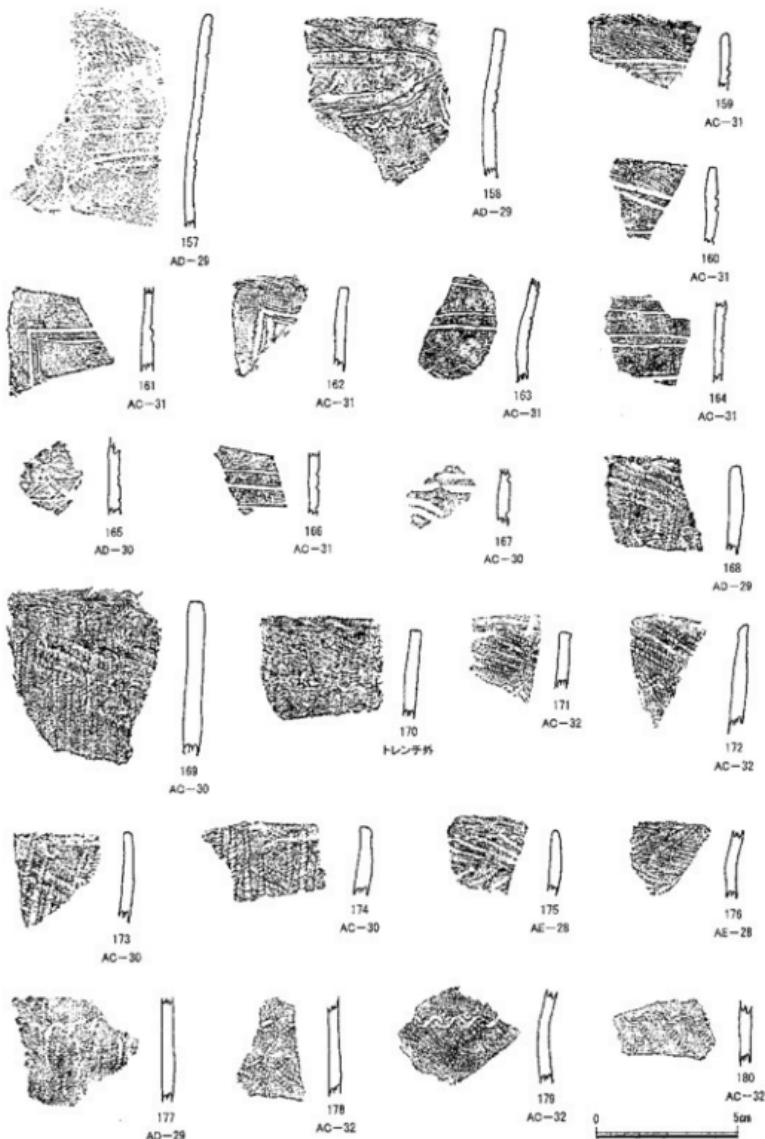
第17図 出土土器(6)



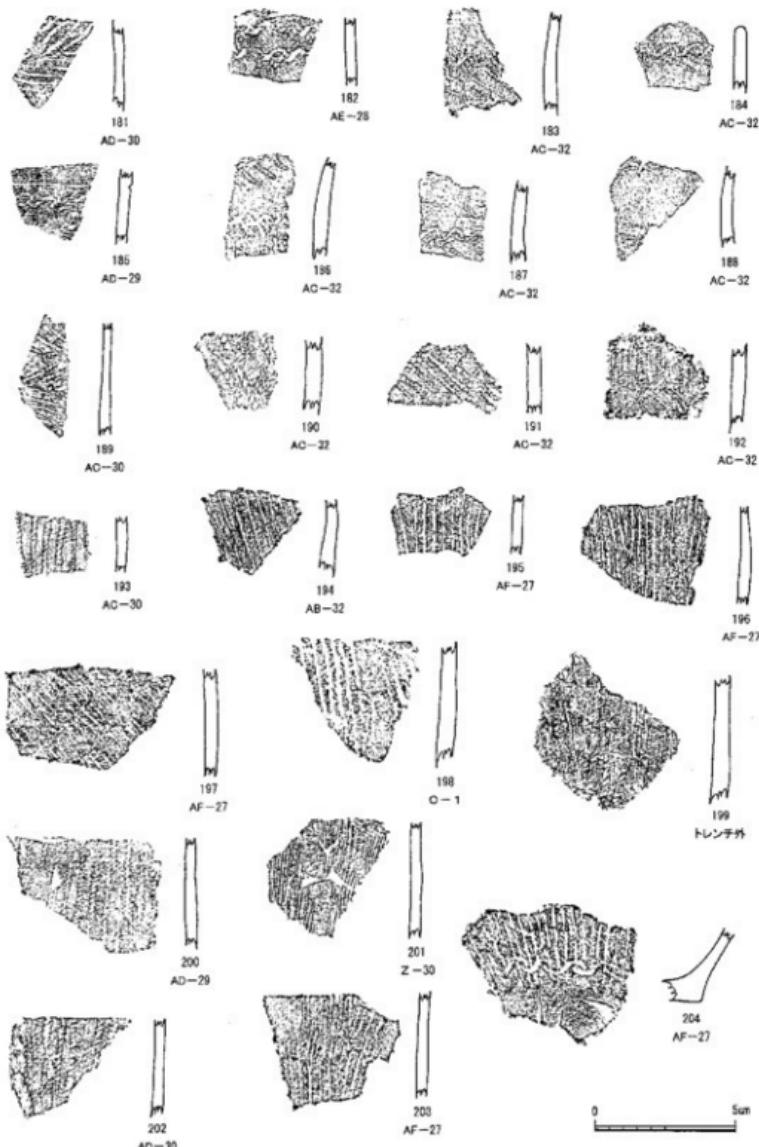
第16図 出土土器(7)



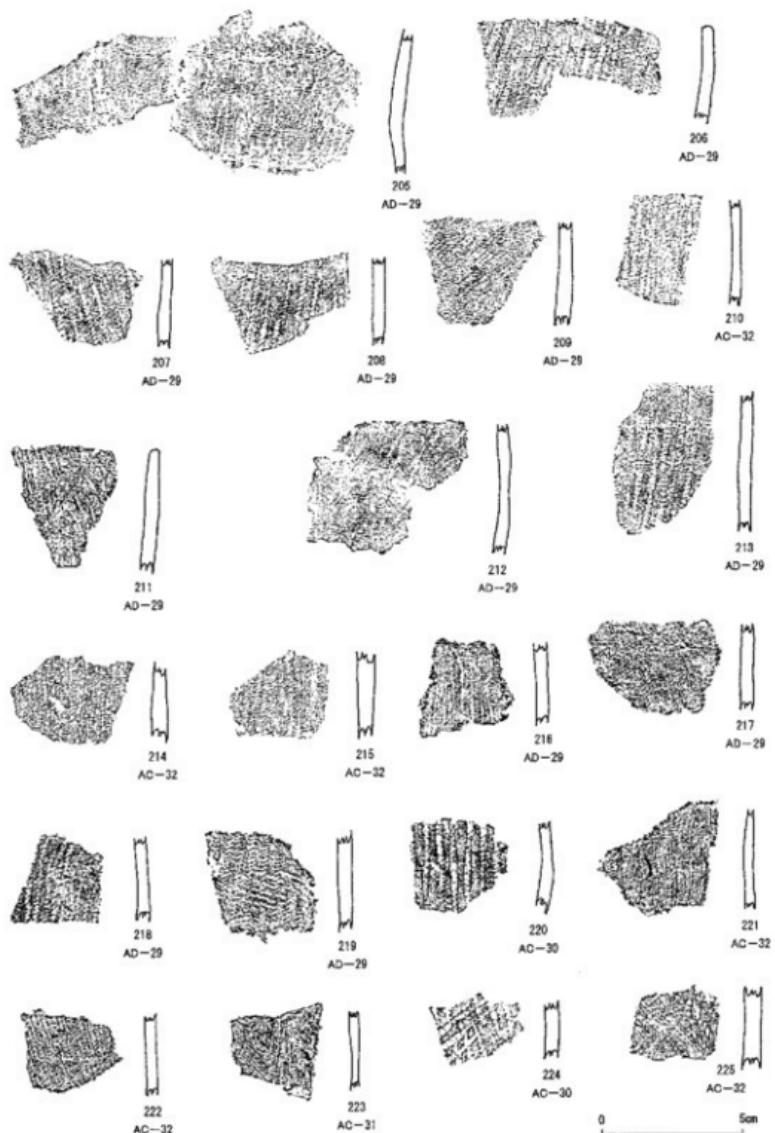
第19図 出土土器(8)



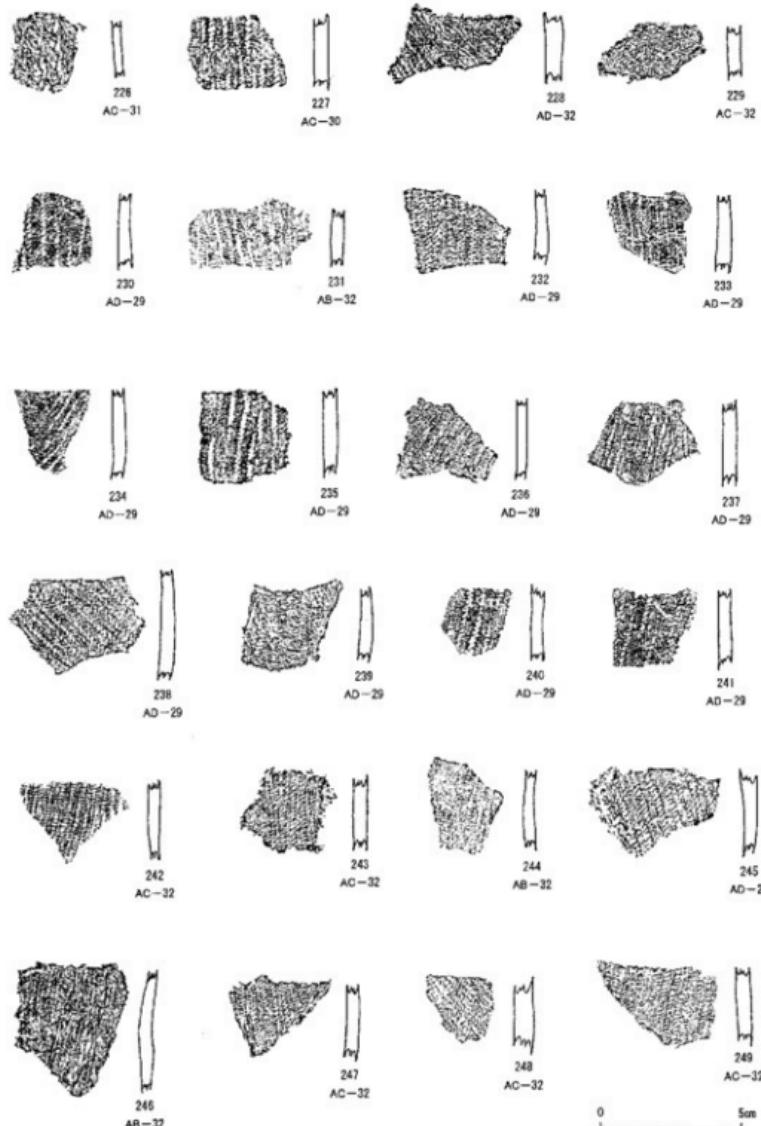
第20図 出土土器(9)



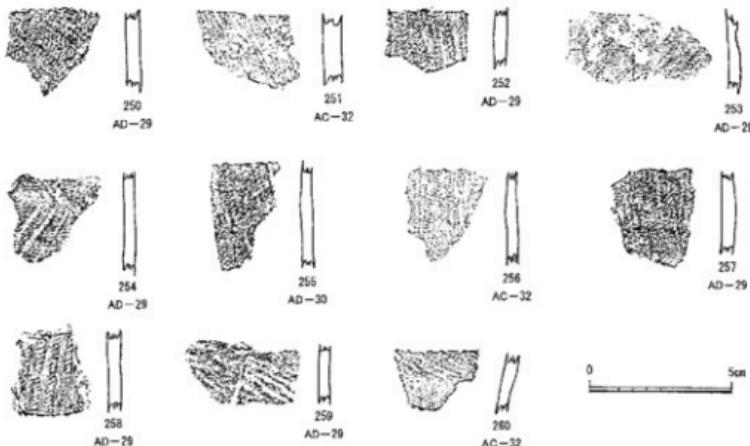
第21図 出土土器(10)



第22図 出土土器(11)



第23図 出土土器(12)



第24図 出土土器(13)

2 弥生時代の遺構と遺物

A₆区、A₇区において、遺構は確認されなかったが、調査区中央部において弥生土器破片が出土した。

(1) 遺構外出土遺物

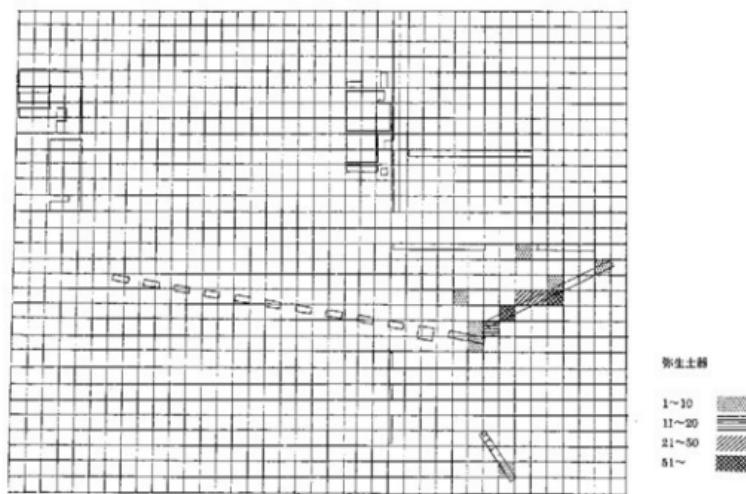
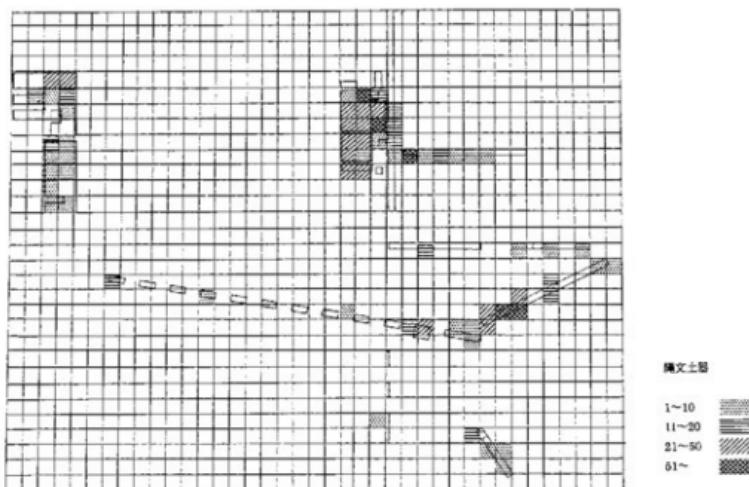
遺構外より出土した遺物は367点である。調査区中央部の台地縁辺部でまとまって出土した。

1類：撚糸文が施された土器（第20図157～第24図260）

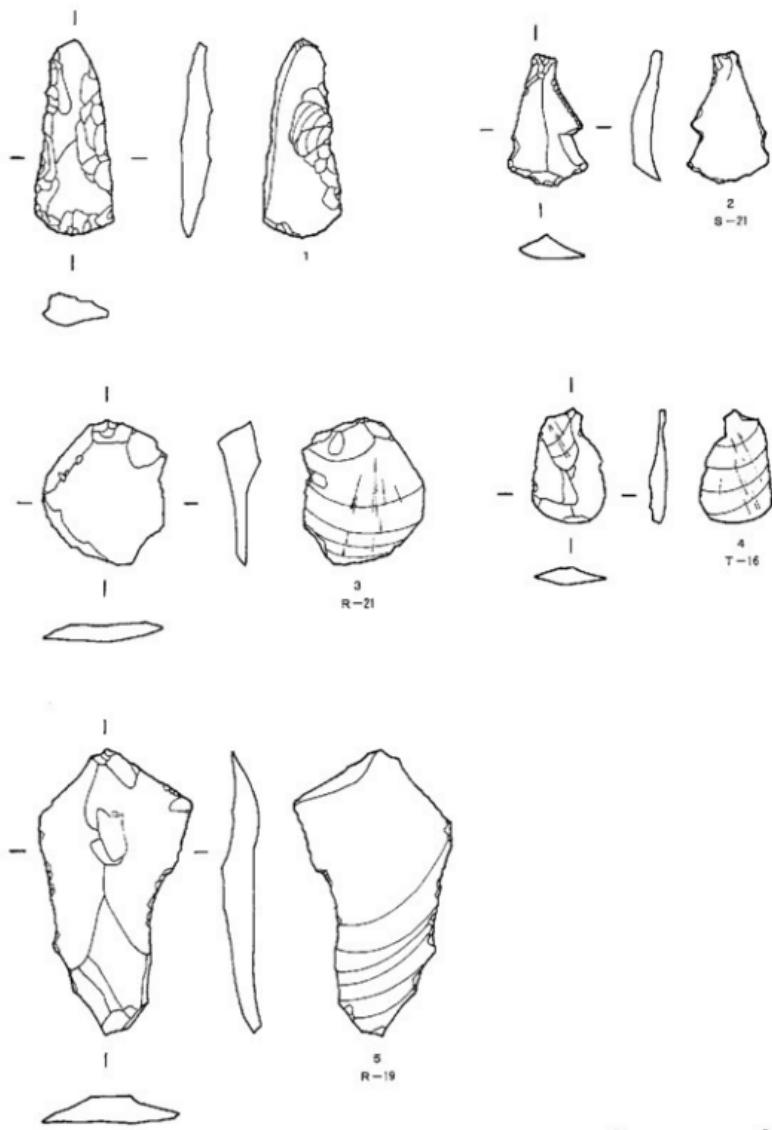
細かい撚糸文が施された土器を一括した。158、177～183、204は、細かい撚糸文とともに綾格文が施されている。全体に器壁は薄く、堅いのが特徴である。口縁部に撚糸文を施し、沈線で区画するものや撚糸の向きを変え、交差させるように文様を施しているものもみられる。

焼成は良好で、色調は浅黄橙色・にぶい黄橙色・灰白色を呈する。

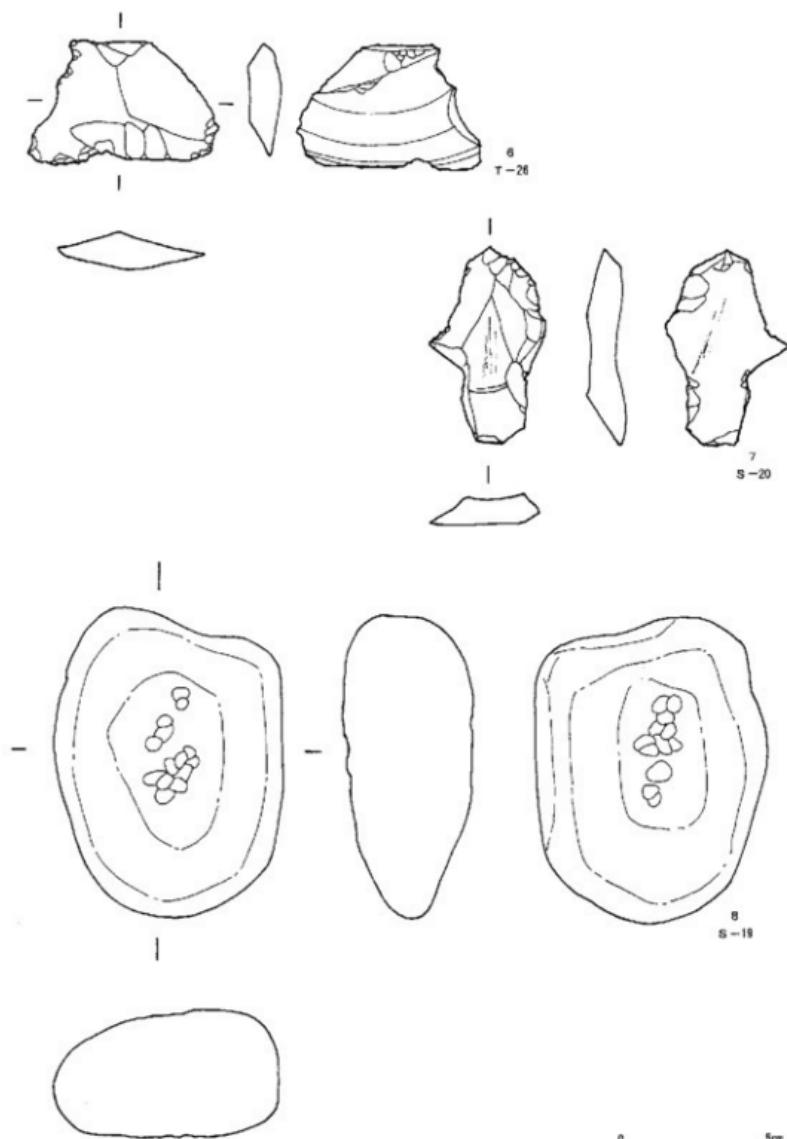
本類は、小坂X式に比定されるものと考えられる。



第25圖 遺構外出土土器分布狀況



第26図 出土石器実測図(1)



第27図 出土石器実測図(2)



3 歴史時代の遺構と遺物

A₆区、A₇区において確認された歴史時代の遺構は、堅穴住居跡3軒である。

(1) 堅穴住居跡

A₆区、A₇区において、3軒の堅穴住居跡が検出された。

第1号堅穴住居跡（第28～29図）

〈遺構の位置と確認〉 調査区北東部のZ-31グリッドに位置する。III a層面で円形に堆積した十和田a降下火山灰を確認した。

〈重複関係〉 他遺構との重複はない。

〈平面形・規模〉 遺構の一部はトレンチ外に延びているが確認された範囲では方形のプランを呈すると考えられる。確認された遺構の規模は北壁（2.2）mを測る。

〈堆積土〉 2ブロックに区分される。1層に地山小ブロックが混入していることから、人为堆積と考えられる。上面には十和田a降下火山灰が堆積している。（II a・II b層）

〈床面・壁〉 V層である地山を掘り込み、床面としている。壁は外反して立ち上がり、壁高は58cmを測る。床面には一面に炭化材が残り、焼失家屋と考えられる。炭化材は、住居の中央から放射状にのびている。

〈柱穴〉 本遺構に伴う柱穴は、遺構内・周辺にも確認されなかった。

〈カマド〉 トレンチ内ではカマドは確認されなかった。遺構がトレンチ外に延びていることから、未調査区域にカマドがあるものと考えられる。

〈出土遺物〉 本遺構内から遺物は出土しなかった。

〈構築時期〉 埋土の上面に十和田a降下火山灰が堆積していることなどから、本遺構は平安時代前半に構築され、十和田a降下火山灰が降下する直前の10世紀初頭に廃棄されたと考えられる。

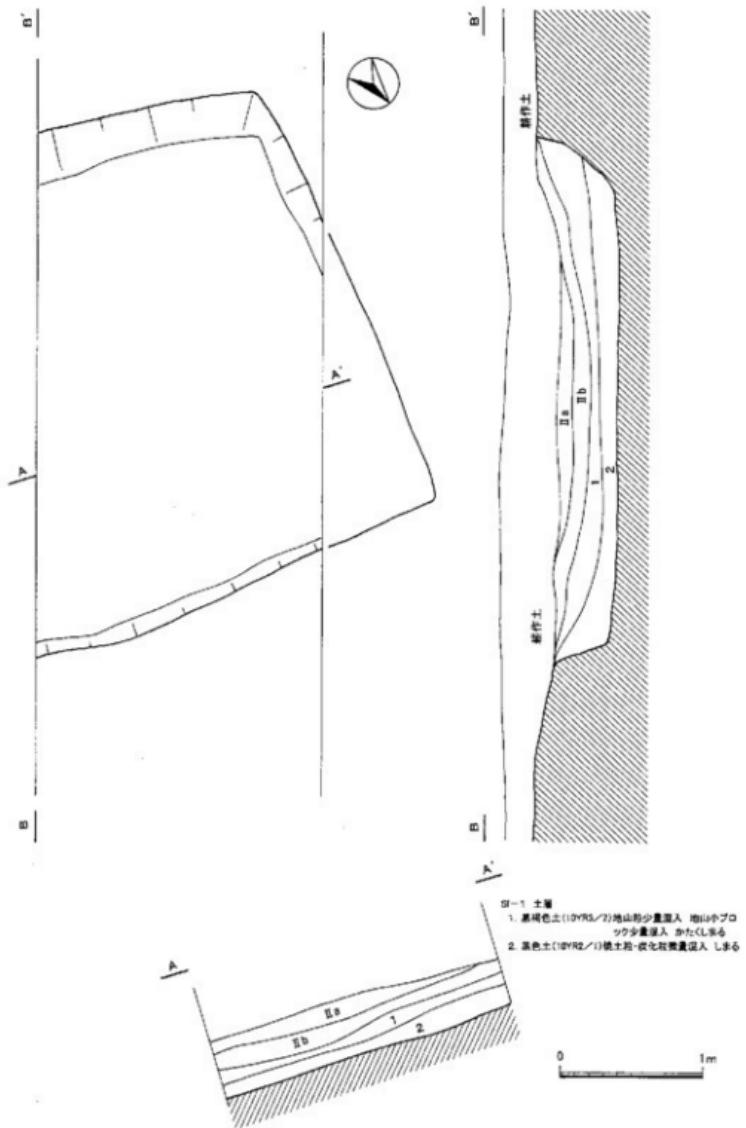
第2号堅穴住居跡（第30図）

〈遺構の位置と確認〉 調査区北東部のAL-27グリッドに位置する。III a層面で十和田a降下火山灰の堆積を確認した。遺構の大半はトレンチ外に延びている。

〈重複関係〉 他遺構との重複はない。

〈平面形・規模〉 方形を呈するとみられる。遺構の大半はトレンチ外に及ぶが、確認された規模は南壁（1.9）mを測る。

〈堆積土〉 1ブロックの堆積である。自然堆積と考えられる。上面には十和田a降下火山灰が堆積している。



第28図 第1号竪穴住居跡実測図



第29図 第1号竪穴住居跡・炭化物出土状況

〈床面・壁〉 V層である地山を掘り込み、床面としている。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は52cmを測る。

〈柱穴〉 本遺構に伴う柱穴は確認されなかった。

〈カマド〉 トレンチ内ではカマドは確認されなかった。

〈出土遺物〉 本遺構内から遺物は出土しなかった。

〈構築時期〉 遺構上面に十和田a降下火山灰の堆積が認められることから、本遺構は平安時代前半に構築され、十和田a降下火山灰の降下直前の10世紀初頭に廃棄されたものと考えられる。

第3号竪穴住居跡（第30図）

（遺構の位置と確認） 調査区北東部のAM-28グリッドに位置する。III a層面で十和田a
降下火山灰の堆積を確認した。遺構の一部はトレンチ外に延びている。

（重複関係） 他遺構との重複は認められなかった。

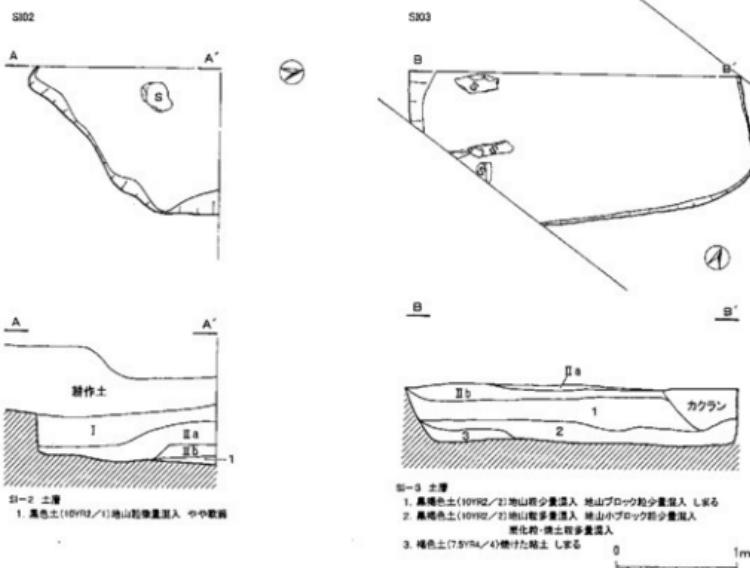
（平面形・規模） 方形を呈するとみられる。遺構の一部はトレンチ外に及ぶが、確認され
た規模は、南壁（1.7）mを測る。

（堆積土） 3ブロックに区分される。1・2層には地山ブロック粒が混入していることか
ら、人為堆積と考えられる。2層には炭化粒の混入もみられる。3層はカマドから
流出した粘土層とみられる。

（床面・壁） V層である地山を掘り込んで、床面としている。壁は外反して立ち上がり、
壁高は43cmを測る。床面には一部炭化材が認められた。

（柱穴） 本遺構に伴う柱穴は確認されなかった。

（カマド） トレンチ内ではカマドは確認されなかったが、南西側に焼けた石があり、粘土
の混入もみられることから、南壁のトレンチ外に延びている南西端にカマドが構築
されている可能性が高い。



第30図 第2号・第3号竪穴住居跡実測図

〈出土遺物〉 遺構内南西側から土師器壺の破片、ロクロ成形土師器壺の破片などが出土した。

〈構築時期〉 遺構上面に十和田 a 降下火山灰が堆積していることや、出土遺物などから平安時代前半に構築され、十和田 a 降下火山灰が降下する直前の10世紀初頭に廃棄されたものと考えられる。

(三浦貴子)

第IV章 分析と考察

鹿角市内の奈良・平安時代の竪穴住居

1. はじめに

(1) 歴史時代の遺構の発見と紹介

鹿角市内に所在する奈良・平安時代の遺跡が始めて紹介されたのは枯草坂古墳である。枯草坂古墳は明治34年12月、佐藤定吉氏によって発見され、大正元年には県史編纂主任の長井行氏、大正8年には毛馬内出身で東洋学の権威である内藤湖南氏が現地踏査を行っている。この古墳の構造については大正2年、高橋建自氏が『考古学雑誌3巻8号』において発表し、「川原石積石の円墳であること、伴出遺物から奈良時代末から平安時代初頭のもの」と報告している。枯草坂古墳から出土した勾玉・ガラス玉などの遺物について国立東京上野博物館が保管しているほか、その後同地より出土したものについては秋田県立博物館、鹿角市教育委員会がそれぞれ保管し、県・市指定文化財となっている。

市内において初めて奈良・平安時代の竪穴住居跡が発掘調査されたのは菩提野遺跡である。この遺跡は、昭和26年・27年の两年にわたり文化財保護委員会（現 文化庁）が行った「大湯町環状列石」の発掘調査（いわゆる国営調査）の一環として実施したもので、その目的は「環状列石の構築時期解明」であった。大湯環状列石については文化財保護委員会刊行の『大湯町環状列石』や鹿角市教育委員会が昭和59年度（第1次調査）から平成15年度（第20次調査）にかけて行った発掘調査をまとめた『特別史跡 大湯環状列石（I）』に詳しいが、菩提野遺跡の調査は「大湯町環状列石」の影に隠れ、あまり注目を浴びることはなかった。

同報告書によると、昭和21年、後藤守一氏・江坂輝弥氏が大湯町環状列石の調査をしている際に「竪穴跡群がある、土師器を出土する。その年代が奈良時代前後のものであるらしい」とを見学者から聞き、国営調査時に実現させたものである。

この遺跡は木村善吉氏にすでに紹介されていたらしく、それによると12個の竪穴が群をなしていたということである。しかし、昭和21年時点で確認できたのは6個で、そのうちの第九号竪穴跡とした住居を国営調査時に精査している。当時、竪穴は現地形においても大きな窪みとして確認され、これを覆うように大湯浮石の堆積層が認められたと報告している。竪穴の形態は方形を呈し、南壁にカマドがつくられたものであることが判明、ここで初めて鹿角市内での奈良・平安時代の竪穴住居跡の構造が明らかにされた。

その後、鹿角市内の発掘で奈良・平安時代の住居跡の発見は昭年の「鳥野遺跡」や「源田平遺跡」の調査を待たなくてはならず、昭和54年以降の東北縦貫自動車道路建設に伴う発掘調査やその他の開発事業・学校建設などによって爆発的に検出例を増していく。

これまでの調査によって当該時期の住居跡が確認された遺跡は46遺跡にも及び、その検出棟数は443棟となった。

(2) 時代背景

奈良時代後半になると鹿角は、律令国家の発展と共にその支配下に置かれはじめ、その影響を受けた文化が伝播される。

その代表的なものが鹿角市八幡平字小豆沢地区に鎮座する「大日靈貴神社（大日堂）」に伝わる「大日堂舞楽」である。この大日堂は養老2年（714）に再建されたものといわれ、このとき都から出向いた樂人によって神樂が伝えられたといわれている。周辺地域4集落によって保存・伝承され昭和51年5月に「国指定重要無形民俗文化財」となっている。

また、時期が下り平安時代に及ぶと歴史書に鹿角（上津野と書き記される）の名が見え始める。

『日本後記』によると、811（弘仁2）年3月20日に、陸奥出羽安察使 文室綿麻呂は「爾薩體・幣伊」の討伐を計画し、爾薩體の餘蔚60余人を殺害したとされている。この爾薩體は現在の岩手県二戸市仁左平付近と考えられ、餘蔚とは殘党という意味合いからすると餘蔚殺害の地は米代川上流・安比川上流の範囲である鹿角を示すものと考えられる。

『日本三代実録』によると、878（元慶2）年3月15日、帰順した蠻夷が秋田城やその周辺で民家を襲撃したことに端を発した「元慶の乱」では、政府は秋田城平定を目的に小野春風を陸奥鎮守將軍として出兵させた。その途中「上津野村」に入り夷俘を説得し、その後秋田宮に入り鎮静した。このときに利用された街道は「陸奥路」といわれており、その街道筋が安比川・米代川上流域にあたる。これが近世においては「鹿角街道」として、さらに現代に至っては「国道282号線」として整備されていったものと考えられる。

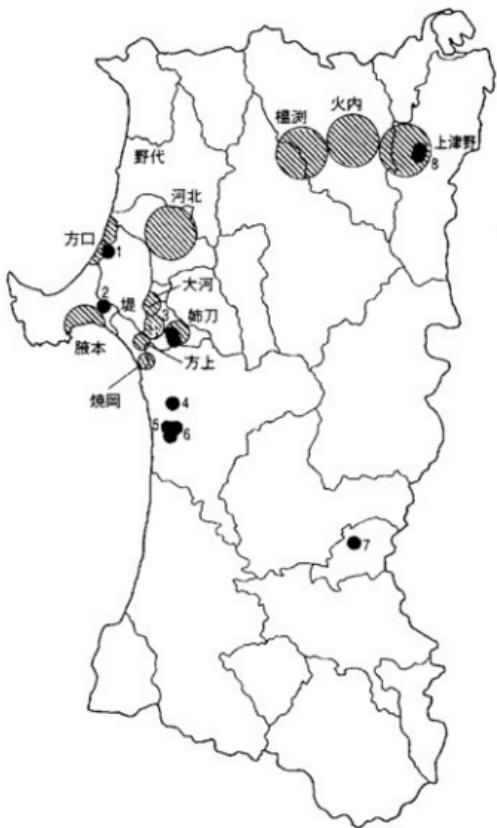
また、同年7月10日の条に「秋田城下賦地」の記載がある。火内・野代・河北（第31図）とともに「上津野」の地名も12カ村のうちの一村として書き記されている。さらに大湯環状列石がのる台地先端にある枯草坂古墳に隣接して「泉森」という地名が残されている。市史によると明治9年に「蠻夷森を泉森と改名」したという記載がある。

このように歴史書や地元に残された地名から奈良時代後半、鹿角は蝦夷の地でありながらも、律令文化の伝播や歎手刀・石帶等の出土から律令体制に徐々に組み込まれていく過渡期とみることができる。

2. 鹿角の自然環境

(1) 地 形

鹿角市は北東北のほぼ中央、日本海に注ぐ米代川上流域に位置し、北に国立公園十和田湖、南に八幡平を配し、自然に恵まれた地域である。



地名対照

上津野	=鹿角市
火 内	=大館市・比内町
櫛 渕	=鷹巣町
河 北	=雄物川町・山本町
大 河	=八郎潟町
姫 刀	=五城目町
堤	=井川町
方 口	=若狭町
脇 本	=男鹿市
方 上	=昭和町・天王町
焼 岡	=秋田市金足
※	合併前の地名を使用

歴手刀出土遺跡

- | | | |
|-----|------------|-----|
| 1 : | えぞが台古墳 | …1本 |
| 2 : | 脇本飯町 | …1本 |
| 3 : | 岩野山古墳群 | …2本 |
| 4 : | 久保台古墳 | …2本 |
| 5 : | 湯の沢 F-25 墓 | …1本 |
| 6 : | 小阿地古墳群 | …1本 |
| 7 : | 石森(上中村) | …1本 |
| 8 : | 物見坂 I 遺跡 | …2本 |

※新野直吉「古代史上的秋田」に加筆

第31図 元慶の乱当時の蝦夷の村

鹿角盆地を貫流する米代川は奥羽山脈の一峰である四角岳に水源を発し、岩手県安代町田山地区を抜け、鹿角市八幡平地区に出る。ここで熊沢川を合流し、流れを北に向かって、毛馬内地区で大湯川・小坂川を合流し、その流れをさらに西に向かって、大館盆地へと向う。

盆地を一望するとこれら米代川、大湯川等の大きな河川とこれらの支流が「鹿の角」のように入り組みながら流れしており、その様子が地名になったという説もある。これらの河川の浸食によりつくり出され、舌状台地は盆地東側の奥羽山脈の西麓に発達し、標高150m～180mを測る。大湯川左岸に形成された中通台地（通称 風張台地）には特別史跡大湯糞状列石や四角岳

の西側裾野には市内でも大規模な歌内遺跡が所在する。

また、盆地西側は、森吉山を主嶺とする高森山地が縱横している。しかし大きな河川が存在しないためか舌状台地はほとんど存在せず、裾野先端に猫の額ほどの段丘地形が残されている程度である。標高は200m～150mを測り、段丘には縄文晩期の遺跡である「東在家遺跡」が所在する。

なお、鹿角市内の地形と地質については、本報告書第Ⅰ章2にその概要を記載している。

(2) 気候

『秋田県史』によると秋田県全体は、「ケッペン」の気候区分では亜寒帯に近い温帶多雨気候に属するといわれているが、ここ鹿角は亜寒帯の傾向が強いとされている。

資料的には古いが『秋田県気象65年報』によると最高平均気温は24度、最低平均気温は-3.1度である。雪は沿岸部より多く最深降雪量は150cmである。

しかし、平成18年から19年にかけての冬期は降雪も少なく、その量は平年の約7割程度で、しかも冬日となる日も少なく暖冬であった。

また、風向は『鹿角市史』の資料をみると冬季には南西寄り、春～秋期には西寄りの風が多く、年間を通して西風が多いことがわかる。平成15年・16年の観察資料（第2表）がこれを物語っている。年間を通じしかも夏場に東風（やませ）が多いときは農作物が不作（けがち）となるといわれている。

(3) 遺跡を覆う堆積土

各遺跡を覆う堆積土は表土（第Ⅰ層）から地山までほぼ同じような堆積となっている。概ね第Ⅰ層：黒褐色土、第Ⅱ層：黄褐色火山灰層、第Ⅲ層：黒色土、第Ⅳ層：暗褐色土（地山までの漸位層）、第Ⅴ層：黄褐色土（基盤層）である。

黒色土中にサンドイッチ状に堆積する第Ⅱ層黄褐色火山灰層を『大湯町凧状列石』では「大湯浮石層」と命名した。地質学的には「十和田a降下火山灰」と呼ばれるもので、その降下範囲は東北北部一円に及ぶが、特に八戸周辺に厚い堆積層を認めることができる。鹿角地域では、噴出源に近いほどこの堆積は厚く、離れるに従ってその堆積は薄くなる傾向にある。

なお、噴火年代はこれまでの発掘調査例から平安時代中頃・10世紀前半とされていたが、滋賀県比叡山延暦寺の僧侶が残した『扶桑略記』の記事から、延喜15年7月（西暦915年）とも言われている。また、太田谷内館跡では、朝鮮半島・白頭山を噴火起源とする白頭山・苦小牧火山灰の堆積が十和田a降下火山灰の上にわずかに黒土を挟んで確認されている。

各報告書の文章・表中で平安時代前半・後半と示しているものが見られ、これは大湯浮石降下年を区分としたものと考えられる。

第3表 鹿角市の風向

◆平成 15 年

月 風向	1 月	2 月	3 月	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	合 計	割 合 %
東	2	1	3	3	2	5	10	6	4	3	1	1	41	11.2
南東	0	3	2	0	0	2	0	2	1	0	0	0	10	2.7
南	2	1	1	5	6	1	1	2	1	1	0	1	22	6.1
南西	3	4	2	4	4	5	1	4	2	1	4	3	37	10.1
西	14	8	11	6	9	4	3	6	9	13	13	14	110	30.1
北西	2	2	6	3	2	3	2	2	0	6	4	1	33	9.1
北	5	3	3	2	2	5	5	2	3	1	4	4	39	10.7
北東	0	1	3	3	2	4	6	0	3	0	0	3	25	6.8
無風	3	5	0	4	4	1	3	7	7	6	4	4	48	13.2
	31	28	31	30	31	30	31	31	30	31	30	31	365	100.0

※観測者及び観測地点：鹿角広域消防組合毛馬内分署

※観察時間：午前 9 時、午後 1 時観察。午前 9 時の風向きその日の代表的風向きとした。

◆平成 16 年

月 風向	1 月	2 月	3 月	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	合 計	割 合 %
東	2	0	1	2	2	2	0	4	5	1	2	0	21	5.7
南東	1	1	0	1	1	2	0	3	2	1	0	1	13	3.6
南	0	1	1	2	1	2	3	1	2	0	2	0	15	4.1
南西	3	5	4	4	4	4	3	8	2	1	3	2	43	11.8
西	16	13	15	16	11	9	9	8	7	8	14	15	140	38.3
北西	0	2	4	2	3	4	3	2	1	4	4	3	32	8.7
北	2	1	3	0	1	3	3	2	4	2	0	3	24	6.6
北東	0	1	1	2	3	1	3	0	3	4	1	1	20	5.5
無風	7	5	2	1	5	3	7	3	4	10	4	6	57	15.7
	31	29	31	30	31	30	31	31	30	30	30	31	365	100.0

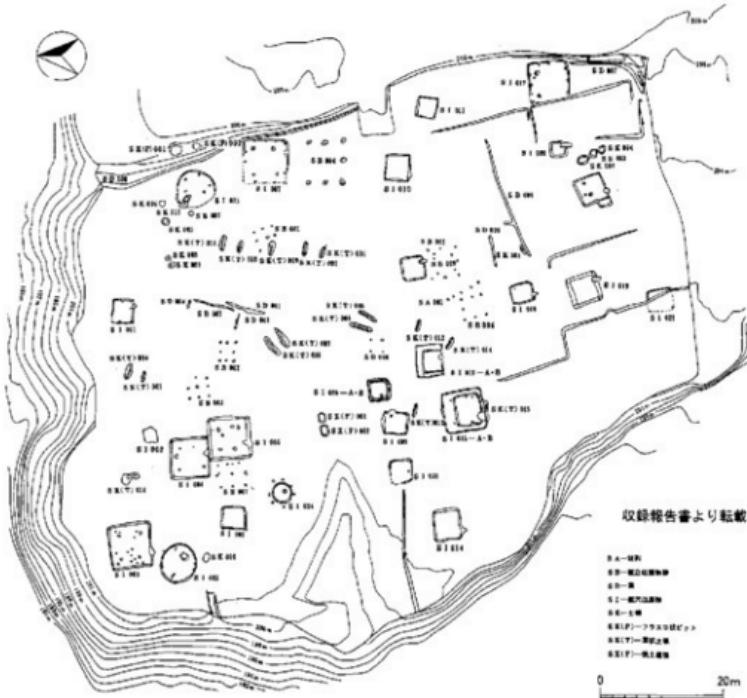
※観測者及び観測地点：鹿角広域消防組合毛馬内分署

※観察時間：午前 9 時、午後 1 時観察。午前 9 時の風向きその日の代表的風向きとした。

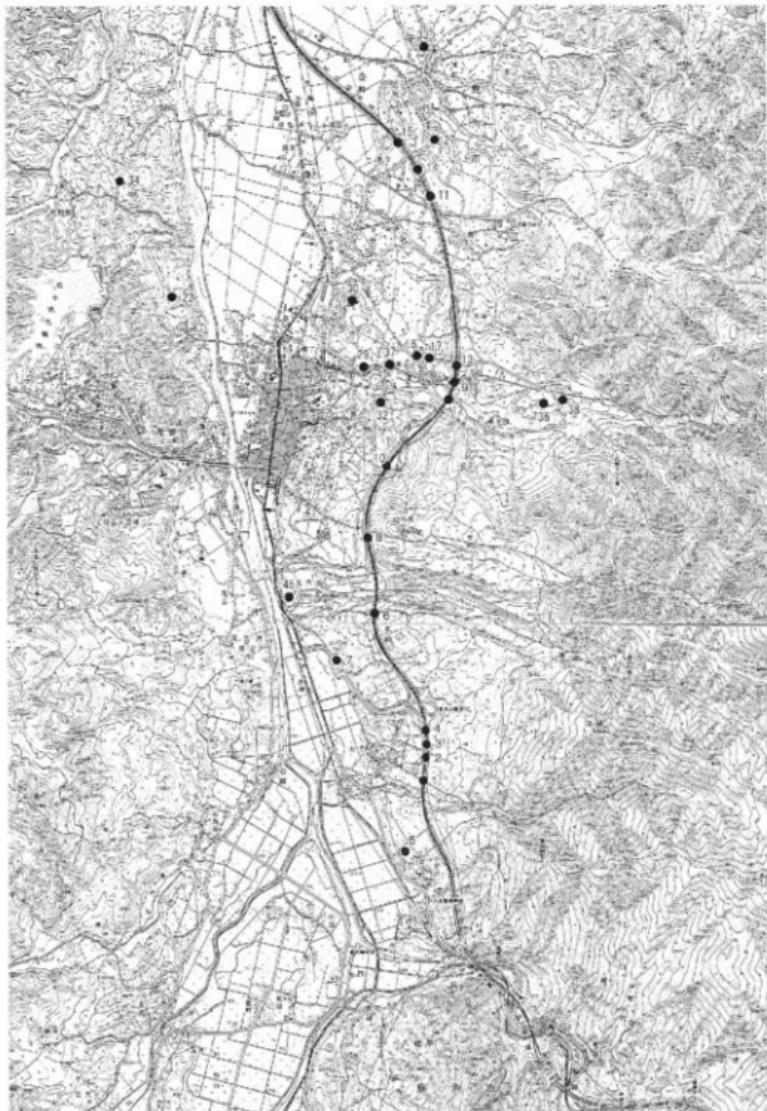
3. 遺跡の立地と概要（第32～34図）

鹿角市内のいたるところには大小の河川の浸食を受けて形成された舌状台地・段丘が発達している。盆地東側、奥羽山脈の裾野には大きな舌状台地が、盆地西側には「猫の額」ほどの段丘が広がっている。遺跡はその台地・段丘の上に営まれている。

代表的な遺跡である「北ノ林Ⅰ遺跡」では、次のような立地と住居配置（第32図）となっている。遺跡の立地する台地は、奥羽山脈の一峰である四角岳の西側裾野に位置する。台地の南側には米代川の支流である歌内沢川、北側には無名の沢が「鹿の角」のように入り込んでいる。標高は200m～205mである。台地は台形状を呈し、南北100m×東西60m～80m、面積7,500m²を測る。台地先端部から山際80m程のところに台地を区切る南北から入り込んだ沢（報告書では大溝と呼んでいる）が入り込んでいる。竪穴住居は台地中央から先端に、据立柱建物跡は台地中央から大溝の間に多く分布している。



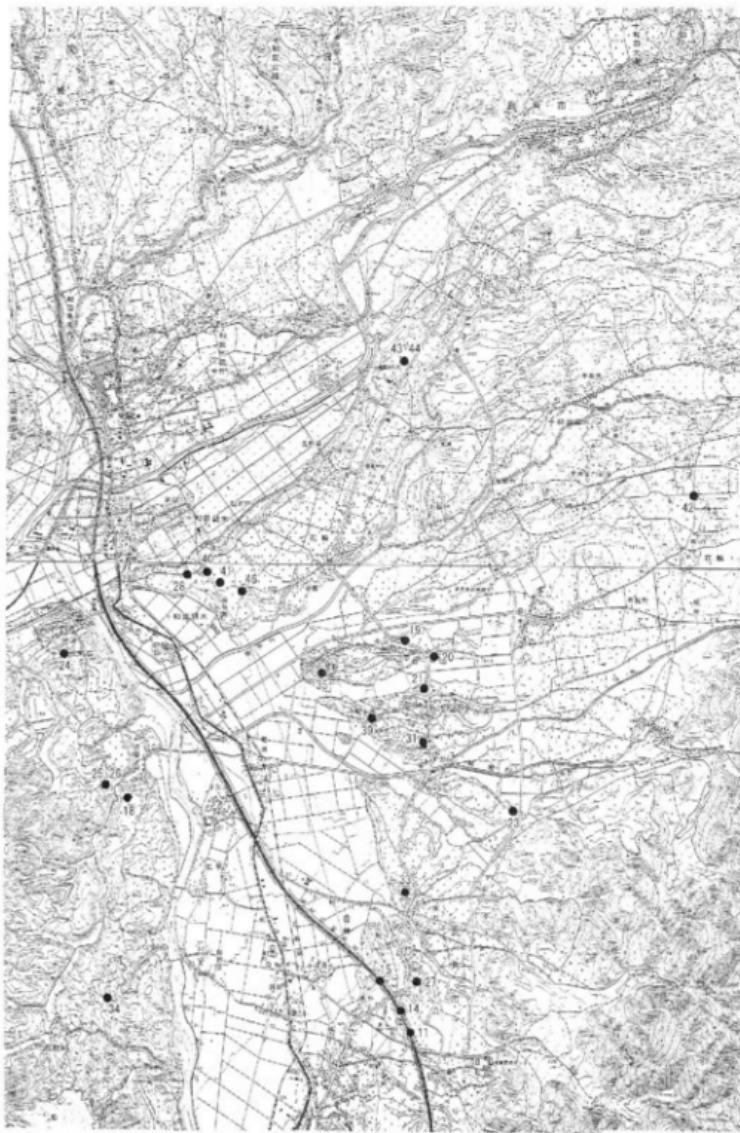
第32図 北ノ林Ⅰ遺跡



遺跡番号は第4表～9表に対応する。

第33図 遺跡位置図(2)

0 1km



遺跡番号は第4表～9表に対応する。

0 1km

第34図 遺跡位置図(3)

第4表 鹿角市内の奈良・平安時代の墓葬（1）

No.	墓跡名	検出遺構 (単位: 棚・基・条)	測量の方法と墓跡の占地	報告書名	
1	野内	49	4 穴 窓 縫 遺 構 棚 基 物 跡 条	標高210m～225mの台地上に位置し、やや傾斜に2列ずつ西北する。 並列の2列の中央に窓があるが、並列間に窓があるのが2つ いることが特徴である。	秋田県考古委員会 1982年 東北地方自動車道新潟松代道路用地調査報告書II
2	飛鳥平	8		標高200m前後の段丘に位置し、傾斜は北東～北西へ漸傾角付す る。 生垣は行歩器地に配置する。	秋田県考古委員会 1982年 東北地方自動車道新潟松代道路用地調査報告書I
3	北の林 I	22		標高200m～205mの段丘に位置する。南北に北の林 I 墓跡が存在する。 生垣は北側の段丘に配置し、その北西側は段丘に入り込 んだ斜面によって後壁台地となる。	秋田県考古委員会 1982年 東北地方自動車道新潟松代道路用地調査報告書II
4	北の林 II	11		標高200m～205m の段丘に位置する。南北に北の林 II 墓跡が存在 する。南北に窓があるが、北側は上部に1箇所のみである。 生垣は段丘全体に広がり、斜坡地帯に分離できる。	秋田県考古委員会 1982年 東北地方自動車道新潟松代道路用地調査報告書II
5	小豆沢	3		標高200m 前後の段丘に位置する。南北に窓があるが、北側は 「船形」状である。	秋田県考古委員会 1982年 東北地方自動車道新潟松代道路用地調査報告書II
6	上越間IV	12	17	標高210m 前後の台地上に位置する。南北に窓があるが、北側は 数列に分離される仕戸跡が広範囲に分布する可動性が特 徴である。	秋田県考古委員会 1982年 東北地方自動車道新潟松代道路用地調査報告書V
7	駒林	3		標高180m 位の段丘に位置する。 小規模な窓がある。	秋田県考古委員会 1982年 東北地方自動車道新潟松代道路用地調査報告書V
8	一本杉	20		奥丸山の南側に位置する段丘の段丘間に位置するが標高は 約210mを越す。生垣は南北に分布するが標高は小さな谷 に沿われる可能性がある。墳丘土器が出土している。	秋田県考古委員会 1983年 東北地方自動車道新潟松代道路用地調査報告書VI

第7表 鹿角市内の奈良・平安時代の集落（4）

No.	遺跡名	壁穴住跡	窓	穴	構造	柱	梁	立柱	炕	掘立柱	壁	礎	遺物	遺構	その他	測定の方法と測量の占地	報告書名
28	物見坂III	2								1						米川・大原川・小原川の合流域に亘る河谷地に位置する。本遺跡の周囲に大原川流域が存在した。(佐藤坂古墳) が位置する。性別不明の複数の墓石が出土する。	長野県考古調査委員会 2003年 『物見坂III』 国道282号・中高野川支流河谷に亘る埋蔵文化財発掘調査報告書
29	御木堂	3														福七の左側に形成された台地丘陵に位置する。(住吉の荒轍) 収合・水堀。	長野市文化財調査報告書 19
30	天戸森	3														福七の右側に形成された台地丘陵に位置する。(住吉の荒轍) 台地丘陵に形成された耕地地帯。花輪第一中学校地。	長野市文化財調査報告書 26
31	高市向駄 跡	27		2以上		3										脚高川右岸に形成された高地で、集落は台地丘陵に集中する傾向にある。大原川右岸から31m離れた地点に、集落がある。	長野市文化財調査報告書 1984年 『高市向駄跡の発掘調査報告書』
32	下沢田	10	1	9		1										福士川の左岸に形成された高地 177m 隅の台地地盤。台地地盤は排水傾向によって切れ込み、これによって区別された複数の集落が存在する。(人田谷盆地の集落占拠) 集落は台地に位置する。	長野市文化財調査報告書 1984年 『下沢田跡の発掘調査報告書』
33	地蔵野	2		3		3										不動川の左岸に形成された標高 154m 隅の台地地盤。集落は標高50m後方に広がる平坦地に位置する可能性がある。	長野市文化財調査報告書 1989年 『地蔵野跡の発掘調査報告書』
34	用野目川 向III	5		8		8										米引川の左岸に形成された標高 300m 隅の段丘が他の斜坡などなった扇形に位置する。(黒坂新田跡) 塔頭新田跡と併せていたが、もう少し住居数が増えるものと考えられる。	長野市文化財調査報告書 1989年 『用野目川向III』 西山地区農免課 黒坂新田跡に係る埋蔵文化財発掘調査報告書
35	小枝指館 跡	4														長内川の左岸に形成された台地の南側斜面に位置する。盆地特有の集落地に形成されたものがあると考えられるが、その跡が少ないものと考えられる。	長野市文化財調査報告書 1982年 『小枝指館跡の発掘調査報告書』
36	赤坂B	15		10		3										福士川の右岸に形成された標高 340m 隅の段丘半山地に位置する。住居は北側に偏在し、東西方向に広がる可能性がある。	長野市文化財調査報告書 1983年 『赤坂B遺跡』 総合資源開発公團調査走査 発掘調査報告書

第8表 麋角市内の奈良・平安時代の集落(5)

No.	遺跡名	検出遺構(単位: 棟・基・条)						遺跡の立地と構造の占他	報告書名		
		壁穴	住居	空	穴	土	柱	組立柱	建物跡	遺構	その他
37	花輪古館	2									鹿角市文化財調査資料 51 『花輪古館の調査報告書』1994年
38	赤坂△ (1次) (2次)	12 4	17 4	2	17 4	2					鹿角市文化財調査資料 60・63 『赤坂△遺跡【赤坂△遺跡】』第52回群馬考古セミナー『県立博物館事務に伴う先史遺跡調査報告書』1994年・96年
39	新斗米館 跡第II次	1									鹿角市文化財調査資料 16 『新斗米館跡第II次調査報告書』
40	物見坂III	1									鹿角市文化財調査資料 79 『物見坂III遺跡【物見坂III】』中山町地場会「物見坂III遺跡調査報告書」2005年
41	物見坂II	1									鹿角市文化財調査資料 79 『物見坂II遺跡【物見坂II】』中山町地場会「物見坂II遺跡調査報告書」2005年
42	青是野	12									文政12年度調査委員会 『大樹町青是野石』1983年
43	大瀬戸状 列石周辺 遺跡	2									鹿角市文化財調査資料 7 『大瀬戸状列石周辺遺跡調査報告書』1977年

第9表 鹿角市内の奈良・平安時代の集落 (6)

4. 遺跡占地の共通性

堅穴住居跡が確認された台地及び占地状況の共通点は次のとおりである。

- ① 現在の町並みが所在する沖積層より一段高い舌状台地・段丘上に分布する。台地先端や段丘縁に占地する。台地先端を区切るように堀や沢を入れ、集落を後方台地と分離するものもある。所謂「防護性集落」といわれるものが平安時代後半に姿を現す。
- ② 台地・段丘下に、飲料水の確保場所となる河川または斜面に湧水がある。
- ③ 地形的な要因から景観が良い。

5. 堅穴住居跡の観察

(1) 平面形

確認された443棟のうち、方形を呈するものが374棟である。このほかに隅丸方形（2棟）、長方形（20棟）、略方形（2棟）、隅丸方形（1棟）と報告されている。重複・削平などによって形態が不明なものが44棟で、基本的には方形を基調とする。

また、赤坂A遺跡第01号住居のように住居外に張り出した「出入り口」的な施設を持つものもある。

(2) 長軸規模と面積

第9表は、長軸の規模を示したもので長軸301cm～500cmに210棟（48%）が分布する。長軸801cmを超えるものは稀で6棟（1.3%）である。最も小さいものは柴内館跡・第623号住居跡の225cm、最も大きいものは柴内館跡・第450a・b号住居跡の933cmである。

このうち奈良時代のものは、菩提野遺跡の第九号住居跡が長軸720cmと最も大きく、それ以外は中型のもので長軸600cmを超えるものは確認されていない。

第10表 堅穴住居跡長軸分布

(単位: m)

長軸 規模	201～ 300	301～ 400	401～ 500	501～ 600	601～ 700	701～ 800	801～ 900	901 以上	不明 計測値なし
棟数	41	108 (1)	102 (1)	64 (1)	34	15 (1)	3	3	67 (13)
比率	9.38	24.71	23.34	14.64	7.78	3.43	0.68	0.68	15.33

カッコ内は奈良時代の堅穴住居跡

第10表は住居床面積を示したものである。このうち262棟が記載されている。面積11m²～20m²に104棟（23.8%）を中心にその前後に集中する。最も小さいものは妻の神I遺跡・第132号住居跡の5.05m²、最大は高市向館跡・第14号住居跡の77.1m²である。面積記載がないが柴内館跡・第450a・b号住居跡を単純計算すると推定で81m²、24.5坪強となる。

県内遺跡・太田谷内館跡・高市向館跡など多くの遺跡では40m²以下に収まるが、北の林I遺跡のように41m²を超えるものが高い割合を示す遺跡も存在する。このことからすると40m²を境に、それ以下を小型・中型に、それ以上を大型、柴内館跡のように壁長9m・面積80m²超は特大ということができる。

第11表 壁穴住居跡床面積分布

(単位: m²)

面積規格	10 以下	11~ 20	21~ 30	31~ 40	41~ 50	51~ 60	61~ 70	71~ 80	81 以上	不明・計	備考
棟数	66	104 (2)	46	29	10	3	2	2 (1)	0	175 (14)	括弧内は奈良時代の壁穴住居数
比率	15.11	23.79	10.53	6.65	2.29	0.69	0.46	0.46	0	40.02	

(3) 柱配置

柱配置に関しては、基本的に次の7つの配置（第35図）がみられる。

配置1：住居四隅に柱穴が穿たれるもの。

長軸規模3m～8m範囲のものに見られるが、4m～6mのものに集中する。中規模なものから小規模の住居跡に使用される柱配置といえる。中ノ崎遺跡S I 117、下沢田遺跡S I 08が最大級で、中ノ崎遺跡S I 106が最小である。

2：住居四隅とその柱穴間に一個の柱穴が穿たれるもの

柴内館跡S I 450a・450bが最も大きく長軸9.33mを測る。長軸が4m～6m規模のものに集中する。小規模なものから大規模なものに使用される柱配置であるが中規模なものに多用される傾向にある。

3：住居四隅とその柱穴間に複数個の柱穴が穿たれるもの

用野目川向III遺跡S I 06が最も大きく長軸8.00mを測る。長軸規模6m～8mに集中し、中規模のものから大規模のものに多用される傾向にある。

4：住居四隅とその対角線上に柱穴が穿たれるもの

高市向館跡S I 14が最も大きく長軸9.36mを測る。5m以下のものはなく9m以上を測るものまで切れ目なく存在する。7m規模のものに集中し、大規模のものに多用される傾向にある。

5：対角線上に配置されるもの

地羅野館跡S I 03が最も大きく長軸6.80mを測る。4m～7mの中規模でもやや大型のものに使用される傾向にある。

6：配置3と配置5の要素を持つもの

赤坂B遺跡S I 07が最も大きく長軸7.20mを測る。長軸6m以下のものは存在しな

い。中規模から大規模のものに使用される傾向にある。柱配置から最も上屋を乗せる構造として強固な造りと判断される。

7：柱穴が確認されないもの。または柱穴（柱穴状ピット）は確認されるが、配置が定かでないもの

数量的に圧倒的に多い。上屋を持つためには柱穴は不可欠なものである。

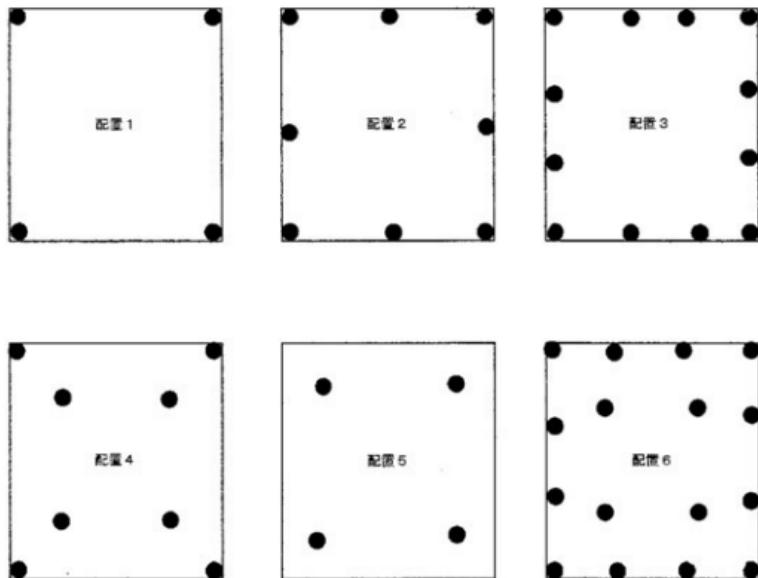
床面や壁際で数個の柱穴が確認されるが配置が特定できないものがあり、精査の際、見落としたものもあったものと考えられる。

8：その他

壁外に柱を持つものがある。

第12表 柱配置ごとの数量

柱配置	配置1	配置2	配置3	配置4	配置5	配置6	配置7	配置8
棟数	86	53	37	22	9	7	224	5



第35図 柱配置模式図

第13表 住居跡の規模と柱配置

	3m以下	4m以下	5m以下	6m以下	7m以下	8m以下	9m以下	9m以上	規模不明
配置1	11	22	29	18	2	2			2
配置2	2	10	16	11	6	1		2	5
配置3	1	3	4	10	9	4			6
配置4			2	4	10	3	2	1	
配置5		3	1	3	2				
配置6				1	4	2			

(4) カマドの位置（主軸方向）

一棟に複数のカマドが付設されているものもある。最も多くカマドが造られた住居は下乳牛遺跡02号住居で4基（期）である。カマド一つ一つを一棟としてその数値を拾い上げていくと総数456棟となる。このうちカマドが併設されるもの317棟、地床炉8棟、不明・確認できなかつたもの131棟である。

カマドは壁際に位置する。柱状の川原石を袖部・天井部の心材とし、これに粘土を貼り付けたものが大半を占める。煙道部は短く屋外に立ち上がる所謂「関東型」と呼ばれるものが多い。煙道部が長く半地下式のものやトンネル式の「東北型」と呼ばれるものもあり、半地下式のものとしては高市向館跡第31号住居跡、トンネル式のものは下乳牛遺跡第02号住居跡で、煙出部には底部が欠損した甕形土器が設置されていた。

本来、壁際に付設されるものであるが、下沢田遺跡第04号竪穴住居のように煙道を持たず、カマド本体のみが壁際に離れて付設されるものもある。

カマドの付設される位置を確認すると、南壁に付設されるものが207棟と圧倒的に多く、これに見せかけの南壁（南東壁）を加えると222棟となる。これに続くのは東壁で、西壁・北壁は極端に数値が小さくなる。

集落を構成する住居跡で、最も南壁にカマドが付設される割合が高いのは、北の林I遺跡・北の林II遺跡・赤坂A遺跡であり、まとまりを見せないのが高市向館跡・中の崎遺跡である。これら集落の當まれた台地を観察するといずれも奥羽山脈の裾野に広がり、河川によって形成された西側に延びた舌状を呈する台地で、特異な地形的な変化は認められない。

以前、カマドが作られる位置を風向き・規制の有無によるものか検討した。風向きについては平成15年・16年（第2表）と当時（奈良・平安時代）の風向きについては比較しようがないが、風向きは西・南西側が数値的に多い。単純に考えていくとカマド燃焼部で火が焚かれ、発生した熱や煙は煙道（煙突）を通り屋外と排気される。南壁にカマドが付設された場合、南風が吹くと煙道にその風が入り込む可能性は高く、熱や煙は室内へと流れ込む結果となる。平成

15年度・16年度の観察によると南風が吹く回数は少なく、このようなことからカマド構築場所は風向きと関連している可能性が高い。

第14表 カマドの位置

上段：棟数 下段：割合%

東壁	南東壁	南壁	南西壁	西壁	北西壁	北壁	北東壁	床面	不明
60	15	207	11	13	0	7	4	8	131
13.15	3.29	45.40	2.42	2.85	0	1.53	0.86	1.72	28.78

(5) 出土遺物

出土遺物としては、土師器、須恵器、木製品、鉄製品、石製品が出土している。

土師器には壺、甕、鍋の器形が見られる。壺は非ロクロ成形とロクロ成形の二通りが見られ、いずれにも黒色処理が施されたものもみられる。また、小平遺跡からは「寺・日頤」と墨書きされた壺が出土しており、平安時代前半にはすでに鹿角の地に仏教が伝播していたことをうかがい知る事ができる。甕は長胴のものとすんぐりしたものがあるほか、把手付土器がみられる。丸底の壺には長胴のもので、頸部に段を有した甕が伴っている。また、底部に特色を持ったもので「砂底」と呼ばれるものも存在する。

現在、市内で最も古い時期に当たるものは物見坂Ⅲ遺跡（鹿角市教委調査分）、小枝指館跡出土のものである。

須恵器には壺、甕、壺、皿の器形が見られ、出土量としては甕が多いものと考えられる。甕内遺跡からは須恵器甕胴部破片を利用した硯1点が出土している。地羅野館跡や赤坂A遺跡からは「五所川原産」の特徴をもったものも出土している。

木製品の出土量は極めて少なく、中の崎遺跡・下乳牛遺跡から櫛各1点、下乳牛遺跡から皿が出土している程度である。

鉄・銅製品には薪手刀、筋鎌車・刀子や帶金具がある。薪手刀は物見坂Ⅰ遺跡で検出された古墳周辺より出土したもので、石井分類のⅡ類にあたる。

石製品には砥石・石帯・がある。

(6) 構築（廃棄）時期

歴史時代の遺構の構築・廃棄時期を知る上で大湯浮石層の存在がある。

大湯浮石の降下年は『扶桑略記』の記事から、延喜15年7月（西暦915年）と言われております。少しずつであるが実年代が明らかにされている。

遺構確認の際、浮石層上面で遺構確認を行うと浮石層を切って構築されるもの、浮石層を除去すると窪地に浮石が堆積しているものが観察される。原則的に前者は浮石降下以後、後者は降下前に構築されたものと判断し、前者を平安時代後半、後者を前半と表記しているものが多く

い。

遺構の構築・廃棄時期については、大湯浮石を鍵層としながら、出土遺物や重複関係、さらに他遺跡の調査事例を参考に時期を決定する必要がある。

6. 鹿角市内の奈良・平安時代の堅穴住居跡の特徴

鹿角市内で発見された奈良・平安時代の堅穴住居の特徴を列記し、まとめとする。

(1) 占地の共通性

舌状台地・段丘上に所在し、しかも台地・段丘縁に占地する。現在、市街地が所在する沖積地からは当該時期の集落は確認されていない。平安時代後半になると台地を区切るように堀を入れ、その中で生活を営む所謂「防護性集落」が出現する。

(2) 平面形

方形を基本とする。出入り口状の施設を有するものもある。

(3) 柱配置

柱配置には8つのパターンがみられる。配置1が最も多いが、四隅に配置された柱で上屋を支える構造となっている。小規模な住居であれば上屋を支える強度を持つものと考えられるが壁長が7m以上を測るものがある。桁を支えるには柱間隔が余りにも広く、四隅の柱間に存在していた柱若しくは痕跡を見逃していた可能性を指摘できる。

(4) カマドの位置（主軸方向）

南壁もしくは見せかけの南壁（南東壁・南西壁）に付設されるものが多い。カマド袖の芯材として一般的には川原石を用いている。土器破片を心材とするものや地山を掘り残し袖部とするものは極めて少ない。

煙道は短く壁外に短く立ち上がるものと、煙道が長くトンネル式又は半地下式のものがある。後者には川原石や白色粘土を用いるものや煙出部に土師器壺を設置するものも見られる。数量的には前者が圧倒的に多い。

(5) 出土遺物

遺構内・遺構外からの出土量は他地域と比較し、少ないものと考えられるが、土師器、須恵器、鉄・銅製品、木製品、石製品と各種である。

(6) 構築（廃棄）時期

大湯浮石層（十和田a降下火山灰）を鍵層としている。この鍵層があるためか時代決定は大まかになっているところがある。土師器・須恵器の編年、他遺跡の調査事例と照らし合わせ、時代・時期を決定していく必要がある。

（藤井安正）

第15表 積穴住居跡観察表(1)

No.	遺跡名	遺跡名	平面形	底標(cm)	カマド	柱(cm)	柱(cm)	柱(cm)	柱(cm)	長軸×短軸・面積	位置	構造材	柱間	柱間(延×深さ)	長軸方向	地盤状況	出土物・特徴・歴期・削除関係	検査結果
1	竪穴	SI001	方形	680×616 (80.0)	内側の柱寄り 崩壊	内側でさず	内側でさず	内側でさず	内側でさず	N-0-W	土壌層・礫層・泥灰・砂層・トガの夾 等が複数存在する	平成2年半						
2	竪穴	SI002	方形	410×508 (72.9)	南側壁に柱1.	内側でさず	内側でさず	内側でさず	内側でさず	N-16.5-W	自然崩壊	大山原生林	±100cm-地下	SI007-SI002			平成2年半	
3	掘穴	SI003	方形	394×390 (65.5)	南側壁に柱1.	内側でさず	内側でさず	内側でさず	内側でさず	N-6-W	土壌層	±100cm-地下	SI004-SI006-SI003			平成2年半		
4	竪穴	SI004	方形	394×390 (65.5)	内側の柱寄り	内側でさず	内側でさず	内側でさず	内側でさず	N-9-W	土壌層	±100cm-地下	SI004-SI005-SI003			平成2年半		
5	掘穴	SI005	方形	375×365 (64.5)	内側の柱寄り	内側でさず	内側でさず	内側でさず	内側でさず	N-3-W	土壌層	±100cm-地下	SI004-SI005-SI003			平成2年半		
6	掘穴	SI006	方形	360×360 (64.1)	内側の柱寄り	内側でさず	内側でさず	内側でさず	内側でさず	上全体	土壌層	±100cm-地下	SI004-SI005-SI003			平成2年半		
7	掘穴	SI007	方形	380×370 (65.0)	内側の柱寄り	内側でさず	内側でさず	内側でさず	内側でさず	N-20.5-E	土壌層	±100cm-地下	SI004-SI005-SI003			平成2年半		
8	竪穴	SI008	方形	290×270 (52.1)	内側の柱寄り	内側でさず	内側でさず	内側でさず	内側でさず	N-38.5-E	土壌層	±100cm-地下	SI004-SI005-SI003			平成2年半		
9	竪穴	SI009A	方形	696×570 (82.1)	内側の柱寄り	内側と対角線	内側と対角線	内側と対角線	内側と対角線	N-10-W	土壌層・地盤	±100cm-地下	SI009A-SI009B-SI009C			平成2年半		
10	掘穴	SI009B	方形	682×564 (80.7)	内側の柱寄り	内側と対角線	内側と対角線	内側と対角線	内側と対角線	N-10-W	土壌層	±100cm-地下	SI009A-SI009B-SI009C			平成2年半		

第16表 墓穴住跡観察表(2)

No.	遺物名	遺物名	平面形	規模(cm)	カマツ:	柱穴(cm)	埋蔵状況	出土遺物・特記事項・新田町原	構造説明
11	石刀	SI010A	方形	430×346 (14.9)	角部の削り 角部に残る 穴	粘土 川砂岩 木質骨	井戸口7面 底面7面	N-13-E	南・北・東側の一帯が剥 かれた下にS1010Bでも使用される S1010A-S1010B-S1010C
12	石刀	SI010B	方形	520×434 (21.4)	角部の削り 角部に残る 穴	S1010A のも のを復用	西側 西側ビット	N-175-E	ガマドはS1010Aのものと見出 S1010A-S1010B-S1010C
13	陶片	SI010C	方形	600×675 (34.9)	角部の削り 角部	西側 西側	西側ビット ×19~33	N-125-E	十面8面・側面8面・側面 S1010A-S1010B-S1010C
14	石刀	SI011	方形	330×320 (10.9)	北側の削り 角部に残る 穴	粘土 川砂岩 木質骨	カマツの芯出しを出 んぐアーチビット	N-05-W	壁際はカマツを残す一面 J998
15	石刀	SI012	方形	425×380 (16.6)	南側の削り 角部に残る 穴	粘土 川砂岩 木質骨 支撑あり	井戸口5面 底面5面	N-23-E	S1012-S10022
16	石刀	SI013	方形	280×298 (7.7)	東側の削り 角部	粘土 西側とその中 間	西側ビット ×12~32	N-47-W	上層部 側面に一歩の段取り出し C14 泥地斑 500±75cm 壁際はカマツを残す一面 J998
17	石刀	SI014	方形	470×408 (17.5)	南側の削り 角部	粘土 川砂岩 木質骨	井戸口	N-21-E	井戸口合計 十面8面・側面8面 底面8面の上に灰土3面あり
18	石刀	SI015	方形	675×580 (38.6)	南側の削り 角部	粘土 川砂岩 木質骨	西側と対角線 木の棒木 井戸口	N-20-E	井戸口合計 土質斑・系留跡・井戸口 底面8面 S1015-S1015
19	石刀	SI016	方形	360×346 (19.1)	南側の削り 角部	粘土 川砂岩	なし	N-28-E	「倒れ」・裏面 カマツの芯出しを残す一面 S1016-S1018-S1016-S1015

第17表 穴住居跡観察表(3)

No.	遺跡名	遺跡名	平面形	規模(cm)	長軸×短軸・面積	位置	カマド	柱穴(cm)	長軸方向	堆積物	出土遺物・特記事項・測定記録	備考
20	8C9	SD017	方形	490×360 (15.0)	東側の内壁に 開口部あり	粘土 川原石	雨漏れビット	雨漏れ幅×深さ	N~S-0.5-	上層部・底層部・粘土		平安時代
21	8C9	SD018	方形	377×362 (9.0)	南側の内壁に 開口部あり	粘土 川原石	雨漏れ	雨漏れ幅	N~S-0.5-	上層部・底層部	C14測定値 1300±80y BP SD016・SD009・SD018	平安時代
22	8C9	SD019	方形	360×315 (10.0)	開口部が有り	粘土 土灰層 片	雨漏れより雨漏 雨漏幅	雨漏幅	N~S-27.5-	下層部	C14測定値 1000±60y BP 8C9はカマドの部分を含む所がこの一箇所	平安時代
23	室内	SD020	方形	360×360 (13.0)	開口部が有り	粘土 川原石	雨漏幅3割 底層部	雨漏幅3割	N~S-15-E	下層部	上層部	平安時代
24	室内	SD021	方形	565× ()	直角に上り壁 残され?	粘土 雨漏幅	雨漏とその内 雨漏	雨漏幅	N~S-17-E	上層部	SD020・SD007	平安時代
25	8C9	SD022	方形	435×364 (16.0)	雨漏幅が有り	粘土 川原石	雨漏より少し離 れたところに雨漏上	雨漏幅上	N~S-19-E	カマド付近に 存石入	SD021・SD006	平安時代
26	8C9	SD023A	方形	372×354 (13.0)	開口部が有り	粘土 川原石	雨漏	雨漏幅	N~S-18-B	カマド付近に 存石入	SD020B・SD002-SD006	平安時代
27	8C9	SD023B	方形	484×460 (22.0)	雨漏幅が有り	粘土 川原石	雨漏	雨漏幅	N~S-19-E	カマド付近に 存石入	SD020B・SD023A(複数)	平安時代
28	8C9	SD024	方形	565×480 (33.0)	雨漏幅が有り	粘土 川原石	雨漏幅が有り 上	雨漏幅	N~S-26-E	上層部	SK020B-SD024-SD007-012	平安時代
29	8C9	SD025	方形	315×310 (10.0)	雨漏幅が有り	粘土 川原石	雨漏幅が有り つた	雨漏幅	N~S-75-	上層部・底層部	SD025・SD008	平安時代

第18表 堅穴住居跡観察表(4)

%	遺跡名	遺跡名	平面形	規 模 (cm)	カマヤ'	柱 穴 (cm)	支撑力 (kg)	地盤状況	出土遺物・特記事項	断面測定
30	壁内	SIG026	方形	476×432 (6.7)	周囲の塗付・生土壁	柱置付	直径35 厚さ25	柱底(柱×深さ) 内側にビット ×23~63 外側にビット ×39~40		平安後半 川原石
31	壁内	SIG027	方形	400×375 (6.6)	周囲の塗付	柱置付	直径35 厚さ25	柱底(柱×深さ) 上	N-65-W	平安後半 川原石
32	壁内	SIG028	方形	235×300 (6.9)	周囲の塗付	柱置付	直径35 厚さ25	柱底(柱×深さ) 上	N-15-E	平安後半 川原石
33	壁内	SIG029	不規形		周囲の塗付	柱置付	直径35 厚さ25	柱底(柱×深さ) 上		平安後半 川原石
34	壁内	SIG030A	方形	275×270 (6.9)	周囲の塗付	柱置付	直径35 厚さ25	柱底(柱×深さ) 上	N-75-W	平安後半 川原石
35	壁内	SIG030B	方形	435×430 (6.9)	周囲の塗付	柱置付	直径35 厚さ25	柱底(柱×深さ) 上	N-85-W	平安後半 川原石
36	壁内	SIG031A	方形	460×448 ()	周囲の塗付	柱置付	直径35 厚さ25	柱底(柱×深さ) 上	N-1-W	平安後半 川原石
37	壁内	SIG031B	方形	564×532 ()	周囲の塗付	柱置付	直径35 厚さ25	柱底(柱×深さ) 上	N-20~30	平安後半 川原石
38	壁内	SIG032	方形	370×310 (11.9)	周囲の塗付	柱置付	直径35 厚さ25	柱底(柱×深さ) 上	N-19-E	平安後半 川原石
39	壁内	SIG033	方形	370×360 (13.3)	周囲の塗付	柱置付	直径35 厚さ25	柱底(柱×深さ) 上	N-13.5-E	平安後半 川原石

第19表 墓穴住居跡観察表(5)

No.	測量名	測量名	平面形	景様(cm)	支柱×通柱	支柱	柱穴(cm)	支柱方向	埋蔵状況	出土物・特記事項・測量系	備考用
40	第5号	SH034	方形	480×445 (21.8)	内側の東寄り	柱間に2箇所の ビット	柱間に2箇所の ビット	N-22-E	土壌泥・鉄器 カマド跡の外縁を 走る	平仮面半	
41	第5号	SH035	方形	480×400 (19.6)	内側の東寄り	粘土 川砂岩 べた	柱間に2箇所の ビット	N-19.5-E E	土壌泥・鉄器 土壌泥・砂利あり	平仮面半	
42	第5号	SH036	方形	320×306 (10.7)	内側の東寄り	粘土 川砂岩 べた	柱間に2箇所の ビット	上部層	上部層に砂利あり	平仮面半	
43	第5号	SH037	方形	275×260 (8.3)	内側の東寄り	粘土 川砂岩 べた	柱間に2箇所の ビット	N-10-W	土壌泥	平仮面半	
44	第5号	SH038	方形	340× ()	内側の東寄り	粘土 ビット	柱間に1箇所の ビット	N-10-E	土壌泥 鐵器・粘土塊により地表面を形成	平仮面半	
45	第5号	SH039	方形	325×300 (10.6)	内側の東寄り	粘土 川砂岩 べた	柱間に2箇所の ビット	N-26-E	土壌泥	平仮面半	
46	第5号	SH040	方形	300×256 (8.9)	内側の東寄り	粘土 川砂岩 べた	柱間に2箇所の ビット	N-25.5-E E	土壌泥・細石	平仮面半	
47	第5号	SH041	方形	530×450 (23.0)	内側の東寄り	柱間にその中の 間	柱間に2箇所の ビット	N-29-E ×23~31	地盤上-1.1m 1.1m厚石 鐵火窯 カマド底の外縁を 走る	平仮面半	
48	第5号	SH042	方形	316× ()	内側の東寄り	柱間に2箇所の ビット	柱間に2箇所の ビット	—	地面上より地表面を形成	平仮面半	
49	第5号	SH045	方形	260×243 (12.7)	内側の東寄り	柱間に4箇所の ビット	柱間に4箇所の ビット	—	SH045-SH030-SH034	平仮面半	
50	第5号	SH046	方形	260×243 (12.7)	内側の東寄り	柱間に2箇所の ビット	柱間に2箇所の ビット	—	上部層	平仮面半	

第20表 堅穴住居跡観察表(6)

No.	測点名	遺構名	平面形	風 横 (cm) 貯物×玄関)	位置	カマド	柱穴 (cm) 床板底×底板)	構造材	配管	柱穴 (cm) 床板底×底板)	景観方向	埋蔵状況	出土遺物・特記事項・新旧關係	構造判明
1	SB047	方形	305×265 (6.4)	開口部の裏打ち	柱土 川原石 つぶ	構造できなか った。	N-31-E	柱	土壌器・陶器 瓦類はカマド下に 陥れられた。	N-31-E	柱	柱	柱	柱
2	SB048	方形	335×345 (12.0)	開口部の裏打ち	柱土 川原石 つぶ	構造できなか った。	N-285-E	柱	柱	N-285-E	柱	柱	柱	柱
3	SB049	方形	280× ()	開口部の裏打ち中 央	柱土 川原石 つぶ	構造できなか った。	N-28-E	柱	柱	N-28-E	柱	柱	柱	柱
4	SB050	方形	454× ()	開口部	柱土 川原石 つぶ	柱	N-22-E	柱	柱	N-22-E	柱	柱	柱	柱
5	SB051	方形	560×548 (32.0)	開口部の裏打ち	柱土 川原石 つぶ	柱	N-60~64	柱	柱	N-60~64	柱	柱	柱	柱
6	飛鳥平	方形	560×548 (32.0)	開口部の裏打ち	柱土 川原石 つぶ	柱	N-7-E	柱	柱	N-7-E	柱	柱	柱	柱
7	飛鳥平	方形	487× ()	開口部の裏打ち	柱土 川原石 つぶ	柱	N-3-E	柱	柱	N-3-E	柱	柱	柱	柱
8	飛鳥平	方形	443×439 (20.0)	開口部の裏打ち	柱土 川原石 つぶ	柱	N-11-E	柱	柱	N-11-E	柱	柱	柱	柱
9	飛鳥平	方形	497×495 (21.5)	開口部の裏打ち	柱土 川原石 つぶ	柱	N-15-W	柱	柱	N-15-W	柱	柱	柱	柱
10	飛鳥平	方形	376×323 (12.5)	開口部の裏打ち	柱土 川原石 つぶ	柱	N-5-W	柱	柱	N-5-W	柱	柱	柱	柱

第21表 積穴住居層繋表(7)

No.	測量名	測量名	平面形	規模(m ²) 長軸×短軸・面積	カマド 位置	壁厚 構造材	柱穴 (cm) 規則性×深さ	基礎方向	堆積況	出土遺物・特記事項・新旧関係	施設判明
61	飛地平	SH013	方形	6075 (42.15)	角部の柱寄り	粘土 川原石	四隅と対角線 上	N-11-W	浮石含む	鰐歯土カマド1部分を残す一部	平安廃中
62	飛地平	SH005	方形	375×202 (71.0)	角部の柱寄り	粘土 川原石		N-21-E	浮石含む		平安廃中
63	飛地平	SH041	方形	412× ()	角部の柱寄り	粘土 川原石			浮石含む		平安廃中
64	北24-I	SH001	方形	387×361 (12.6)	角部の柱寄り	粘土 川原石	四隅とその内 側	N-0-S		土台版、瓦合ひ、 鰐歯土カマド1部分を残す一部	平安廃中
65	北24-I	SH002	X ()	角型							平安廃中
66	北24-I	SH003	方形	697×665 (47.0)	角部の柱寄り	粘土 川原石	四隅と対角線 上	N-3-W	浮石含む	土台版、東24-I、窓下、焼けた 鰐歯土カマド1部分を残す一部	平安
67	北24-I	SH004	方形	626×625 (39.9)	南壁のやや中央 寄り	粘土 川原石	四隅と対角線 上	N-2-W	カマド内に 浮石含む、 対角線ビット ×60~72	カマド内に 浮石含む、 対角線ビット ×67~81	平安
68	北24-I	SH005	方形	673×650 (44.0)	南壁の柱寄り	粘土 川原石	四隅と対角線 上	N-3-W	対角線ビット ×30~37	土台版、瓦合ひ、 鰐歯土カマド1部分を残す一部	平安
69	北24-I	SH006	方形	373×363 (12.6)	南壁の柱寄り	粘土 川原石	四隅と 川原石	N-1-W	対角線ビット ×38~65	土台版、瓦合ひ、 鰐歯土カマド1部分を残す一部	平安

第22表 堅穴住居跡観察表(8)

No.	遺跡名	遺跡外	平面形	規模(cm)	位置	カマド	柱穴(cm)	貯蔵状況	出土遺物・特記事項・新旧関係	構築時期
70	北24号1	SI007	方形	790×790 (69.4)	西側の東寄り	粘土 川砂岩	直径 埋藏とその間 に3~4個のビ ット、柱軸線上 約60cmビット ×61~72	N-1-E	蓋板・底盤の下部が有る SI007-SI008	平安
71	北24号1	SI008A	方形	285×281 (8.4)	南側の東寄り	粘土	直径 埋藏	N-6-W	等高はシヤツト部分を除き一層 SI008A-SI008B	平安
72	北24号1	SI008B	方形	382×387 (12.1)	南側の東寄り	粘土	直径 埋藏	N-6-W	浮石多量見 入り 等高はカマド部分を除き一層 SI008B-SI008A	平安
73	北24号1	SI009	方形	382×387 (12.4)	東側の北寄り	粘土 川砂岩	直径 埋藏ビット ×25~31	N-01.5-E	浮石多量見 入り 等高はカマド部分を除き一層 土坦場、瓦敷地	平安
74	北24号1	SI010	方形	417×396 (10.7)	内側の西寄り	粘土	直径 埋藏ビット ×20~33	N-6-E	土坦場 等高はカマド部分を除き一層 瓦敷地が見え 瓦敷地が見え	平安
75	北24号1	SI011	方形	364×360 (10.0)	西側の東寄り	粘土 川砂岩	直径 埋藏ビット ×20~30	N-7.5-W	浮石多量見 入り 等高はカマド部分を除き一層 土坦場	平安
76	北24号1	SI012A	方形	361×348 (10.0)	南側の東寄り	粘土 川砂岩	直径 埋藏ビット ×10~90	N-1-W	瓦敷地 等高はカマド部分を除き一層 SI012A-SI012B	平安
77	40号4号1	SI012B	方形	621×516 (22.4)	南側の東寄り	粘土	直径 埋藏ビット ×20~40	N-1-W	瓦敷地 等高はシヤツト部分を除き一層 SI012A-SI012B ガマドは焼成用	平安
78	37号4号1	SI013	方形	348×322 (10.9)	南側の東寄り	粘土	直径 埋藏ビット ×37~32	N-13-E	瓦敷地 等高はシヤツト部分を除き一層 土坦場、瓦敷地	平安
79	37号4号1	SI014	方形	462×446 (11.0)	南側の西寄り	粘土	直径 埋藏ビット ×36~46	N-13-E	土坦場、瓦敷地 等高はシヤツト部分を除き一層	平安

第23表 墓穴跡観察表(9)

No.	測定名	測定名	平面形	規模(Cm) 長軸×短軸	カマツ 位置	柱穴 柱底材質	柱穴 柱底径×高さ	長軸方向 柱底シート	柱底方向 柱底シート	出土遺物・特記事項・新旧記号	機関記号
80	北沢井1	SH013A	方形	600×460 (1.08)	横断面通り	粘土	四隅 柱底シート ×30~42	N-7~W		土師器、角墻器	
81	北沢井1	SH023B	方形	650×62 (1.6)	横断面通り	粘土と柱脚 上	三隅シート 柱底シート ×26~44	N-13~W	芦竹遺入	堅織土カマ 下層分を除き一透	SK07003-SH015A SH015B
82	北沢井1	SH016	方形	381×350 (0.9)	横断面通り	粘土 川原石	四隅 柱底シート ×36~57	N-13~W	芦竹遺入	「骨器、鉄かき」(刀) 堅織土カマ 下層分を除き一透	地先写真
83	北沢井1	SH017	方形	605×645 (1.8)	横断面通り	四隅とその間 にさかのび 上、刻痕線上	四隅 柱底シート ×21~56	N-2~E	芦竹遺入	土師器	
84	北沢井1	SH018	方形	451×437 (2.1)	横断面の外観 寄り	粘土	四隅 柱底シート ×60~65	N-21.5~		土師器、鉄かき、 堅織土カマ 下層分を除き一透	
85	北沢井1	SH019	方形	470×468 (2.0)	横断面の外観 寄り	粘土 川原石	四隅シート 柱底シート ×31~57	N-13~W	芦竹遺入	土師器、須恵器、鉄かき、 堅織土カマ 下層分を除き一透	
86	北沢井1	SH020	方形	235×227 (6.0)	横断面の外観 寄り	粘土	四隅シート 柱底シート ×31~57	N-9~W	芦竹遺入	土師器、須恵器	
87	北沢井1	SH021	方形	364×362 (1.9)	横断面の外観 に逸上	粘土	四隅シート 柱底シート ×14~43			土師器、須恵器	
88	北沢井1	SH022	方形	423×366 (15.0)	横断面の外観 寄り	粘土 土手端	四隅シート 柱底シート ×3~36			土師器、鉄かき、 堅織土カマ 下層分を除き一透	
89	北沢井II	SH001A	方形	452×447 (1.84)	横断面の外観 寄り	粘土 土手端		S-1~W	芦竹遺入	土師器(砂利入り) 堅織土カマ 下層分を除き一透	
90	北沢井II	SH001B	方形	452×447 (1.84)	横断面の外観 寄り	粘土		S-1~W		「骨器」(刀)堅織土を除き一透 堅織土カマ 下層分を除き一透	SH001A-SH001B

第24表 墓穴住居跡観察表(10)

No.	遺跡名	遺跡名	平面形 長軸×短軸(直径)	規格(cm) 長軸×短軸(直径)	カマド	柱穴(cm) 規格×深さ	柱穴	掘削方向	掘削状況	出土遺物・特記事項・新旧關係	構造関係
91	北の跡①	SH0002	方形	441×452 (19.44)	雨落の痕跡	四隅		S-1-W	上部は小窓	瓦片はカマド部分を残す一部	
92	北の跡②	SH0003	方形	453×466 (17.26)	雨落の痕跡	粘土、 川原石	四隅	S-6-W	上部は小窓	瓦片はカマド部分を残す一部	壁火床延
93	北の跡③	SH004	方形	628×634 (40.48)	雨落の痕跡	粘土、 川原石	雨落と北 壁間にシット	S-6-E	カマド窓土、 上部は小窓	瓦片はカマド部分を残す一部	土炉窓
94	北の跡④	SH005	方形	342×326 (10.0)	雨落の痕跡	粘土、 川原石	雨落と各4間	S-5-W	子窓が多く 壁に付く	瓦片はカマド部分を残す一部	土炉器
95	北の跡⑤	SH006	方形	457×460 (22.66)	雨落の痕跡	粘土、 川原石	雨落と各4間	S-11-E	子窓多く 壁に付く	瓦片はカマド部分を残す一部	土炉窓
96	北の跡⑥	SH007	方形	457×450 (22.66)	雨落の痕跡	粘土、 川原石	雨落と各4間	S-7-E	子窓多く 壁に付く	瓦片はカマド部分を残す一部	土炉窓
97	北の跡⑦	SH008	方形	336×309 (11.16)	雨落の痕跡	粘土、 川原石	雨落と各4間	S-2-W	子窓多く 壁に付く	瓦片はカマド部分を残す一部	土炉窓
98	北の跡⑧	SH009	方形	468×422 (19.2)	雨落の痕跡	粘土、 川原石	雨落と各4間	S-4-E	子窓多く 壁に付く	瓦片はカマド部分を残す一部	土炉窓
99	北の跡⑨	SH010	方形	571×550 (14.26)	雨落の痕跡	粘土、 川原石	雨落	S-3-E	子窓多く 壁に付く	瓦片はカマド部分を残す一部	土炉窓
100	北の跡⑩	SH013	方形	351×342 (10.0)	雨落の痕跡	粘土		S-10-E	子窓多く 壁に付く	瓦片はカマド部分を残す一部	土炉窓
101	小立戸跡	SH002	方形	232×226 (6.74)	付落れ土 ^a			N-56-W	瓦片は一部ある可能性あり	瓦片	平安
102	小立戸跡	SH004	方形	542×443 (20.54)	付落れ土 ^a		付落れ土 ^a	N-62.3-		瓦片	平安

第25表 穴住居跡観察表(1)

No.	遺跡名	遺跡名	平面形	規 態 (cm)	カ マ ド	柱穴 (cm)	柱穴 (cm)	堆積状況	出土物・特記事項・参考資料	構造説明
108	小屋跡	S1006	方形	418×400 (18.34)	柱穴 付込まれず	柱頭とその下	柱頭とその下	N-46.3-E	堆積土-底に 骨格あり	平房
104	上部IV	S1001	方形	511×486 (24.64)	周囲が七面り	柱頭とその下	柱頭とその下	N-96.5-W	堆積土-カ マド柱なし 骨格あり	土台階、床板層、灰土塗装 堆積土カマド部分を除き、活 用空間
105	上部IV	S1002	方形	446×440 (18.72)	周囲が七面り	柱頭	柱頭	N-2-W	堆積土-カ マド6.1-Tに 骨格あり	土台階、土壁三 面、床板層 堆積土カマド部分を除き、活 用空間
106	上部IV	S1003	方形	488×496 (20.84)	周囲が七面り	柱頭	柱頭	N-108.5-E	堆積土-底 に骨格あり	土台階、床板層
107	上部IV	S1004	方形	448× ()	周囲が七面り	柱頭	柱頭	N-83-W	堆積土-底 に骨格あり	土台階、床板層
108	上部IV	S1005	方形	346×292 (16.06)	周囲が七面り	柱頭	柱頭	N-94-W	柱頭	土台階
109	上部IV	S1006	方形	370×380 (17.90)	周囲が中央 柱頭	柱頭	柱頭	N-107-W	柱頭	土台階
110	上部IV	S1007A	方形	458×449 (20.34)	周囲が七面り	柱頭	柱頭	N-85-W	柱頭	土台階
111	上部IV	S1007B	方形	702×684 (36.0)	周囲が七面り	柱頭	柱頭	N-63.6-W	柱頭	土台階
112	上部IV	S1008	長方形	533×435 (20.0)	周囲が七面 りと2.6%	柱頭	柱頭	N-7-W	柱頭	土台階
113	上部IV	S1009	長方形	565×464 (24.0)	周囲が七面り	柱頭	柱頭	N-2-E	浮石多量 塊入	土台階、床板層 S1010-S1009

第26表 堅穴住居跡観察表(12)

No.	遺跡名	遺構名	平面形	底面形 長軸×短軸・(高さ)	底面(cm)	カマド	生穴(cm)	最深点	細胞状況	出土遺物・陶瓦等・新旧混在	構造判明
114	上堅田IV	SH010	方形	653×828 (64.16)	SH010 に上り N横	壁裏と對角線 上	周囲壁下落さ 20~40×8~19 対角壁上ピット 21~50×23~45	N-2.5-W	SH010-SH09 1.0m厚、瓦類 壁裏土カマド部分を除き一般地。		
115	上堅田V	SH011	方形	564×630 (36.64)	隔壁の外寄り 川削石	隔壁	周囲壁下落さ 19~25×12	N-4-E	周囲壁下落入 土壌層		
116	上堅田V	SH012	方形	599×694 (29.2)	隔壁の外寄り 川削石	隔壁	周囲壁下落 24~33×14×25	N 6 R	周囲壁下落入 土壌層		
117	堅井	SH001	方形	370×268 (12.0)	隔壁の東寄り 川削石	隔壁		N-16 W	周囲壁下落入 土壌層、瓦類、瓦片、ソーラー瓦		
118	堅井	SH002	方形	470×438 (18.54)	隔壁の外寄り 川削石	隔壁の外 川削石	34~40×36×43	N-0.5-E	周囲壁下落入 土壌層、ソーラー瓦		
119	堅井	SH003	方形	398×332 (11.96)	隔壁の西寄り 川削石	隔壁でさす 粘土	隔壁でさす	N-19.5-W	周囲壁下落入 土壌層		
120	一木柱	SH003	方形	4205×2725 (16.66)	从通中央に施 瓦床	隔壁とその中 隙・2箇所		S-24-E	周囲壁下落入 土壌層ばかり		
121	一木柱	SH004	方形	3186×3480 (7.98)	隔壁の東寄り 川削石	隔壁でさす 粘土	隔壁でさす	S-8-W	周囲壁下落 土壌層、瓦類等あり、骨頭部	甲子塗半 北壁裏瓦類等有り、骨頭部	
122	一木柱	SH005	方形	3256×3125 (9.92)	隔壁の東寄り 隔壁の外寄り 川削石	隔壁とその中 隙		S-3.3 E	周囲壁下落 瓦入、	ソーラー瓦 カマド作り跡あり	半塗半 壁裏瓦類等有り
123	木柱	SH006	方形	587.5×565.5 (30.66)	隔壁の東寄り 川削石	隔壁		S-1-W	周囲壁下落 瓦入、	土壌層	半塗半
124	一木柱	SH007	方形	562.5× ()	隔壁されてい た	隔壁とその中 隙に敷設がつ				土壌層	

第27表 積穴住居跡観察表(13)

No.	測量名	測量名	平面形	規模(cm)	ガマ:	柱穴(cm)	配置	柱穴(cm)×幅さ)	長軸方向	堆積況	出土遺物・特記事項・前回調査系	前回調査
125	～A点	S0009	7形	341.0×303.5 (111.60)	付近	内側	内側とその中 間				上部	
126	～A点	S0010	7形	732.0×450.00 ()	床面北側面に 2段階高さ	内側とその中 間～2段階					上部	調査回り柱は柱脚から柱頭の位置が 仕立をえていた。
127	～B点	S0011	7形	479.6×407.5 (119.60)	付近でれい	内側とその中 間～数箇所			8-1-W	7付近出入、 土作場、井戸跡	S0012-S0011	
128	～B点	S0012	7形	371.0×363.5 (131.60)	付近～中央部 溝により崩落	付近でれい			S-2.3— W	土作場跡(?)	S0012-S0011	
129	～B点	S0013	方形	378.0×364.6 (144.02)	傾斜の東寄り	粘土 川砂岩	内側とその中 間		S-2.3 W	浮石面多く 見入、 土作場跡・底付あり、 井戸跡		
130	水形	S0014	方形	×	傾斜の西寄り	粘土	内側とその中 間		9-2-E	土作場跡の一部 傾斜上カマド部分を除き 底付あり		
131	～C点	S0015	方形	315.0×254.5 (91.00)	付近	粘土とその中 間～数箇所			E-2-E	土作場		
132	水形	S0016	方形	453.5× ()	不明	不明				土作場、 井戸跡		
133	～C点	S0017	方形	305.0×294.0 (81.70)	付近	付近でれい				土作場、 井戸跡		
134	～C点	S0018	方形	×	不明	付近でれい				浮石面多く 見入、 土作場		
135	～C点	S0019	7形	×	不明	付近でれい				浮石面多く 見入、 井戸跡		
136	～C点	S0020	方形	×	不明	付近とその中 間				浮石面多く 見入、 井戸跡		
137	～C点	S0021	7形	343.5× ()	不明	付近とその中 間				浮石面多く 見入、 井戸跡		

第28表 積水の跡と窓枠の調査表(14)

No.	通称名	遺構名	平面形	規模(cm) 長軸×短軸	位置	カマド 底深	機能付 底深	柱穴(cm) 底深(底×壁)	貯藏方向	堆積状況	出土物類・特徴事項・断面形状	構造用
138	一本杉	SH000	方形	206.5×276.5 (8.70)	南側の面取り 奥側の面取り	特定できず	特定できず	S-36.30- R	S-9-W	浮石多量入 底深より約10cm	土壌層(底から) 底深より約10cm	
139	一本杉	SH001	方形	345.5×334.6 (10.44)	南側の面取り	特定できず	特定できず	S-9-W	S-9-W	浮石多量入 底深より約10cm	土壌層(底から) 底深より約10cm	
140	筋付窓	SH001	方形	525×606 (27.96)	南側の面取り	瓦張とその上 川原石	瓦張とその上 川原石	15-36-38-53 中間ヒット	S-9-W	浮石多量入 底深より約10cm	土壌層・陶器 底深より約10cm	
141	筋付窓	SH002	方形	313×277 (9.36)	所蔵の面取り	瓦張外小	瓦張外小	17-31×38-53 中間ヒット	N-16-E	浮石多量入 底深より約10cm	土壌層・陶器 底深より約10cm	手平窓
142	筋付窓	SH006	方形	313×316 (10.86)	所蔵の面取り	粘土	粘土	N-10-E	N-10-E	浮石多量入 底深より約10cm	土壌層	
143	筋付窓	SH009	方形	452×377 (15.46)	所蔵の面取り	粘土	粘土	S-94-W	S-94-W	浮石多量入 底深より約10cm	土壌層・瓦器層・フジ口	手平窓
144	筋付窓	SH010	方形	575×676 (31.64)	所蔵の面取り	粘土	粘土	N-10.5 -E	N-10.5 -E	浮石多量入 底深より約10cm	土壌層・瓦器層・金物類・鉄骨等 底深より約10cm	
145	筋付窓	SH011	方形	403× ()	所蔵の面取り	粘土	粘土	N-8.5 -E	N-8.5 -E	浮石多量入 底深より約10cm	土壌層(底から) 底深より約10cm	
146	筋付窓	SH012	方形	203×237 (5.86)	所蔵の面取り	粘土	粘土	N-10.5 -E	N-10.5 -E	浮石多量入 底深より約10cm	カマド窓面(手平窓) 底深より約10cm	
147	筋付窓	SH014	方形	502×451 (21.00)	所蔵の面取り	粘土	不規	N-6.5 -E	N-6.5 -E	上層に7石 が多量入	土壌層(底から) 底深より約10cm	

第29表 積穴住居跡縦緊表(15)

No.	測量名	測量名	平面形	足標(cm)	カマド	柱穴(cm)	柱穴(cm)	埋蔵状況	出土物・特記事項・新旧関係	構造判明
148	東平場	SD015	五角形	長軸×短軸・四隅切	371×329 (9.06)	傾斜の柱寄り 柱土 川原石	柱土 川原石	柱頭とその中 内側シット 内側シット	N-33-E 井戸多面鏡 入	土作跡が底あり
149	東平場	SD016	方形	斜線の柱寄り	368×305 (11.17)	柱頭とその中 内側シット 内側シット	柱土 川原石	柱頭とその中 内側シット 内側シット	N-33-E 井戸多面鏡 入	甲安壁半
150	東平場	SD017	方形	斜線の柱寄り	365×363 (13.64)	柱頭とその中 内側シット 内側シット	柱土 川原石	柱頭とその中 内側シット 内側シット	N-25-W 井戸多面鏡 入	カマド煙突はトンネル式、 井戸多面鏡
151	東平場	SD018	方形	斜線の柱寄り	375×348 (12.79)	柱頭とその中 内側シット 内側シット	柱土 川原石	柱頭とその中 内側シット 内側シット	N-8-W 井戸多面鏡 入	井戸多面鏡 1階部の底あり
162	東平場	SD019	方形	斜線の柱寄り	383×364 (12.41)	柱頭とその中 内側シット 内側シット	柱土 川原石	柱頭とその中 内側シット 内側シット	N-5-E 井戸多面鏡 入	上部腰壁は丸太、側北側壁に沿られる 柱頭は東・西・北側壁に沿られる
153	中央場	SD001	方形	斜線の柱寄り	658×631 (41.1)	柱頭とその中 内側シット 内側シット	柱土 川原石	柱頭とその中 内側シット 内側シット	N-21-E 井戸多面鏡 入	土作壁、側壁、羽口
154	中央場	SD002	方形	斜線の柱寄り	631×600 (37.2)	柱頭とその中 内側シット 内側シット	柱土 川原石	柱頭とその中 内側シット 内側シット	N-34-E 井戸多面鏡 入	柱頭はカマド煙突を除き、柱 頭はカマド煙突を除き、柱
155	中央場	SD003	方形	斜線の柱寄り	325×305 (12.4)	柱頭とその中 内側シット 内側シット	柱土 川原石	柱頭とその中 内側シット 内側シット	N-6-E 井戸多面鏡 入	柱頭はカマド煙突を除き、柱
156	中央場	SD008	方形	斜線の柱寄り	282×254 (7.6)	柱頭とその中 内側シット 内側シット	柱土 川原石	柱頭とその中 内側シット 内側シット	N-45-W 井戸多面鏡 入	柱頭はカマド煙突を除き、柱
157	中央場	SD009	方形	斜線の柱寄り	493×441 (19.7)	柱頭とその中 内側シット 内側シット	柱土 川原石	柱頭とその中 内側シット 内側シット	N-28-E 井戸多面鏡 入	上部に押下 壁は柱・梁脚に沿らず、北側腰壁から延 びる
158	中央場	SD013	方形	斜線の柱寄り	528×516 (28.6)	柱頭とその中 内側シット 内側シット	柱土 川原石	柱頭とその中 内側シット 内側シット	N-31-E 井戸多面鏡 入	土作壁、側壁、底板 柱頭はカマド煙突を除き、柱

第30表 積六住居跡観察表(16)

No.	遺跡名	遺跡名	平面形	規模(cm) 長軸×短軸	カマツ'	柱穴(cm) 直径×深さ	柱穴 構造	長軸方向 傾斜(左+右)	短軸方向 傾斜(左+右)	出土遺物・特記事項・新旧關係	検定割別
160	中の堀	SH018	方形	280×230 (5.9)	内側の北壁	柱穴でさり	無	N-40-E	井戸底入、 柱穴底入、 井戸底入、 柱穴底入	上層に浮遊 土	
161	中の堀	SH034	方形	244×295 (7.1)	不明	内側	内側	上層に浮遊 土	柱穴底入、 柱穴底入	上層に浮遊 土	
162	中の堀	SH101	方形	448×452 (10.1)	不明	内側	内側	N-14-E	内側	地中窓空	
163	中の堀	SH102	方形	527×490 (9.6)	内側の北壁	粘土 川原石	内側	N-27-E	カマツ'間に 内側	粘土はカマツ'間に 内側	
164	中の堀	SH103	方形	409×380 (14.9)	内側の東壁	粘土 川原石	内側	N-32-E	内側	内側はカマツ'間に 内側	
165	中の堀	SH104	方形	377×318 (13.2)	内側の東壁	粘土 川原石	内側とその中 間	N-21-E	十齿锯、石器 洗浄器	粘土はカマツ'間に 内側	
166	中の堀	SH106	方形	225×195 (4.5)	内側の中央	粘土 川原石	内側	N-29-E	井戸底入、 土	土	
167	中の堀	SH107	方形	600×540 (36.2)	内側の中央	粘土 川原石	内側とその中 間	N-28-E	土	土	
168	中の堀	SH108	方形	371×302 (15.2)	内側の南壁	内側	内側	N-32-E	井戸多面石 土	井戸多面石	
169	中の堀	SH112	方形	632×606 (43.9)	内側の南壁	粘土 川原石	内側と対角線 上	N-38-E	井戸底入、 柱穴底入、 柱穴底入、 柱穴底入	柱穴底入、 柱穴底入、 柱穴底入、 柱穴底入	
170	中の堀	SH113	方形	300×295 (10.0)	内側の北壁	内側でさり	内側	N-40-E	井戸底入、 柱穴底入、 柱穴底入、 柱穴底入	柱穴底入、 柱穴底入、 柱穴底入、 柱穴底入	
171	中の堀	SH117	方形	730× ()	不明	内側	内側	N-32-E	土	土	

第31表 壁穴住居跡観察表(17)

No.	遺跡名	遺跡名	平面形	規 標(cm)	カ マ ド	柱 穴(cm)	所轄状況	出土遺物・特記事項・参考地図	考察期
171	407号	SH117'	方形	407×407 長軸×短軸(直角)	不規	否	N-31-E	土師器	土師器
172	407号	SH001	方形	455×420 (19.5)	雨戸型の西面 り	直角 川崎石	N-29-E	土師器	土師器、須貝器
173	407号1 (119)	SH101	方形	×	雨戸型でさく	不規	SH101' - SH110 - SH104	土師器、須貝器	土師器、須貝器
174	407号1 (119)	SH101	方形	×	雨戸型でさく	今明	SH102	土師器	土師器
175	407号1 (119)	SH102	方形	450×427 (18.6)	雨戸型でさく	不規	SH101' - SH110 - SH104	土師器、須貝器	土師器、須貝器
176	407号1 (119)	SH103	方形	531× (11.9)	なし	不規	SH103 - SH105	土師器・引口 等級が複数ある	土師器・引口 等級が複数ある
177	407号1 (119)	SH105	方形	397× (11.9)	なし	不規	SH103 - SH105	土師器	土師器は複数ある
178	407号1 (119)	SH106	方形	408×370 (16.0)	雨戸型でさく 上-左-右-左-右	川崎石	N-24-E	土師器	土師器は複数ある
179	407号1 (119)	SH107	方形	658×545 (34.0)	なし	不規	SH103 - SH105	土師器	土師器は複数ある
180	407号1 (119)	SH108	方形	×	雨戸型でさく	直角 川崎石	N-38-W	土師器、須貝器	C14測定 1210±80 BP
181	407号1 (119)	SH109	方形	×	なし	不規	SH109	もつ・須貝器	もつ・須貝器
182	407号1 (119)	SH110	方形	410× (11.9)	なし	不規	SH109	土師器	土師器

第32表 墓穴調査表(18)

No.	測点名	測点名	平面形	規模(cm)	カーブ 位置	構造物	柱穴(cm)	長軸方向	埋蔵状況	出土遺物・軽量体積・新旧關係	構造周期
183	墓の中央	SU121	方形	受地入(650)×(650)	0.575×0.511	奥側のやや西 寄り	丸土 周囲石 圓	西西北 西 不明	円筒形 柱穴 入り	土器類、花崗岩片 北側に埋蔵する土器片(175)、 土器類	平安後半
184	東の中央	SU122	方形	389×345	(15.7)	なし			柱穴入り		
185	西の中央	SU124	方形	344×250	(6.0)	なし		不明		土器類	
186	東の中央	SU125	方形	355×	(1.5)	横穴できり	なし				
187	西の中央	SU126	方形	455×	(1.9)				井手金環	1井166	平安後半
188	東の中央	SU127	方形	346×	(1.9)	七段	不明		人	SRCL34-SD013-4SU126	同上
189	西の中央	SU129	方形	266×	(1.9)	横穴できり	横穴できり		井手金環と全く、直立の土器片あり		
190	東の中央	SU131	方形	618×	(1.9)	井手の裏苦寺	西西北		土器類		
191	西の中央	SU132	方形	250×222	(5.6)	なし	不明		土器類		
192	東の中央	SU133	方形	×	(1.9)	横穴できり	不明		土器類		
193	西の中央	SU137	方形	（）	(1.9)				繩文一層の陶器片(175)のみ		
194	東の中央	SU138	方形	（）	(1.9)				繩文一層の陶器片(175)のみ		

第33表 堅穴住居跡観察表(19)

No.	遺跡名	遺跡名	平面形	床 高 (cm)	長軸×短軸・面積	位置	柱 穴 (cm)	柱 穴 (cm)	具置方向	地盤状況	出土遺物・特記事項・新旧関係	検査時間
195	裏の井1 (II)9	SII002	方形	×	柱跡でさす	西北部寄り	土壌	未測定	未測定	未測定	未測定	午後
196	裏の井1 (II)9	SII003	方形	()	480×630 (40.0)	日燃とその中 間	未測定	未測定	未測定	未測定、柱跡でさす、 木板、陶片	SII05 - 006 - SII03 - SII08 C14測定 970±70y BP	午後、未測定
197	裏の井1 (II)9	SII005	方形	()	317× (40.0)	柱跡でさす	未測定	未測定	未測定	未測定	SII06 - 006 - SII03 - SII08	午後
198	裏の井1 (II)9	SII006	方形	()	320× (40.0)	柱跡でさす	未測定	未測定	未測定	未測定	SII05 - 006 - SII03 - SII08	午後
199	裏の井1 (II)9	SII007	方形	()	440× (40.0)	東側の北寄り	土壌	未測定	未測定	未測定、柱跡でさす	SII07 - SII08	午後、未測定
200	裏の井1 (II)9	SII008	方形	()	660×565 (48.0)	北側の中央	粘土 川原石	日燃とその中 間、対角線上	未測定	いがれも盛り込みが N-47-B	未測定、柱跡でさす	SII07 - SII08
201	裏の井1 (II)9	SII009	方形	()	440× (40.0)	東側の北寄り	粘土 川原石	柱跡でさす	未測定	未測定	未測定はカマ 部分を除き一般	未測定
202	裏の井1 (II)9	SII009'	方形	()	440× (40.0)	柱跡でさす	粘土 川原石	柱跡でさす	N-51-W	N-51-W	SII09 - SII09	未測定
203	裏の井1 (II)9	SII010	方形	()	467× (40.0)	柱跡でさす	粘土 川原石	柱跡でさす	N-59-W	N-59-W	SII09 - SII09	未測定
204	糸吉×308	SII001	方形	()	313×296 (8.97)	東側の北寄り	粘土 川原石	柱跡でさす	N-19-W	未測定	未測定	午後
205	糸吉1	SII007	方形	()	472×461 (22.74)	柱跡の寄り	粘土 川原石	柱跡でさす	N-4-E	未測定	柱跡でさす	午後
206	糸吉1	SII001	方形	()	458×414 (15.781)	南側壁の寄り	粘土 川原石	柱跡	N-21-W	未測定	柱跡でさす	午後

第34表 墓穴住居跡観察表(20)

No.	遺跡名	遺跡名	平面形	戸構(cm) 長軸×短軸(実測)	柱 構(cm) 柱径×柱高(実測)	柱 穴(cm) 柱穴の大きさ ×深さ(実測)	柱穴の状況	柱穴の方向	柱穴の状況	出土遺物・特記事項・新旧関係	補足説明
207	墓穴II	SII02	方形	615×612 (36.5x31)	周囲の内壁 に土塗り	柱穴と柱内壁 の中间 川砾石	柱上 不明	N 21 W	平石を含む 人	「前路」 「後路」 壁面が丸く、 壁面はコマド部分が斜め一辺	
208	墓穴II	SII03	方形	385×380 (22.5x20)	周囲の外壁 に土塗り	柱穴と柱内壁 の中间 川砾石	柱上 不明	N-21-W	平石を含む 人	「前路」 「後路」 「中央」 壁面は丸く、 壁面はコマド部分が斜め一辺	半勾配半 水平勾配
209	7号	SII01	方形	860×780 ()	周囲の外壁 に土塗り	柱穴と柱内壁 の中间 川砾石	柱上 不明	S-N	土削壁 石畳あり	土削壁 水道口直角・鶴・石井	平石を含む
210	7号	SII02	方形	420×400 ()	柱穴の中央 東側の中央 西側の西側 に2基	柱上 川砾石 1枚板	柱上 不明			土削壁 石畳あり	土削壁 水道口直角 カーブAを意識し、 床面をきつめ状態とする ため外側はコマド式
211	墓穴V	SIV01	方形	430×350 (11.4)	柱穴のほぼ中 央	柱上 川砾石	柱上 不明	N-13-E		土削壁	土削壁の内側もあり
212	墓穴V	SIV03	方形	480×560 (32.6)	周囲の内壁 に土塗り	柱上 川砾石	柱上 不明	N-15-E W	平石を含む 人	土削壁 壁面はコマド部分を斜め一辺	
213	墓穴V	SIV06	方形	380× ()	周囲でさす 柱穴	柱上 川砾石	柱上 不明		土削壁に溝 石畳あり	土削壁	
214	墓穴V	SIV09	方形	430×400 (17.3)	周囲の外壁 に土塗り	柱上 川砾石	柱上 不明	N-56-E W	平石を含む 人	土削壁 柱上	
215	墓穴V	SIV02	方形	325×321 (12.60)	周囲の外壁 に土塗り	柱上 川砾石	柱上 不明	N-88-W	平石を含む 人	土削壁 柱上	
216	墓穴V	SIV03	方形	286×303 (10.79)	周囲の外壁 に土塗り	柱上 川砾石	柱上 不明	N-90-W	土削壁 壁面はカーブ部分を斜め するところ も見る	土削壁 水道口直角	

第35表 壁穴住居跡解説表(21)

No.	通称名	遺構名	平面形	底標高 長軸×短軸・底標高	底標高(cm)	カマド	柱穴(cm)	位置	柱間隔	柱穴(cm)	縦横延長×深さ)	長軸方向	地盤状況	出土遺物・発見場所・査定源	特徴説明
217	船穴V	S106	方形	260× ()	船底の北寄り	粘土、 川原石	不明	船底の北寄り	N-87	N	浮石多量見 人	南偏西	土壌層・砂質層	無	
218	船穴Ⅲ	S108	方形	420×353	舟底の北寄 り	粘土、 川原石	直角	船底の北寄り 19~30×17~41	N-1135~ E	E	浮石多量見 人	南偏東・砂質層	無	平安時代	
219	馬蹄形跡	第1号	方形	360× ()	北底の北寄り中 火	粘土、 川原石	直角	馬蹄形跡と深 面に各2個	N-35~E	—	浮石多量見 人	北偏東・砂質層	無	平安時代	
220	船形平窓跡	第1号	方形	445×405 ()	対底の南寄り	粘土、 川原石	直角	馬蹄形跡と深 面に各2個	N-40~E	—	浮石多量見 人	北偏東・砂質層	無	平安時代	
221	船形平窓跡	第2号	方形	650×580 ()	対底の南寄り	粘土、 川原石	直角	馬蹄形跡と深 面に各2個	N-50~W	—	浮石多量見 人	北偏西・砂質層	無	平安時代	
222	小正方形	第4号	方形	410×400 ()	対底の南寄り	粘土、 川原石	直角	埋藏されなか った	N-55~ E	—	浮石多量見 人	北偏東・砂質層	元・日置・久留 一語	平安時代	
223	馬蹄形跡	S101	方形	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	平安時代
224	馬蹄形跡	S102	方形	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	平安時代
225	馬蹄形跡	S103	方形	350×370 ()	馬蹄形跡	粘土、 川原石	直角	被覆されなか った	N-55~ E	—	浮石多量見 人	北偏東・砂質層	無	平安時代	
226	東洋室窓跡	S104	方形	700× ()	東洋室の北寄り	粘土、 川原石	直角	東洋室の北 中	N-60~ E	—	浮石多量見 人	北偏東・砂質層	無	平安時代	

第36表 墓穴住居跡観察表(22)

No.	遺跡名	遺跡名	平面形	原高(cm)	カマド	柱穴(cm)	長軸方向	埋積状況	出土遺物・特記事項・新旧關係	構造資料
225	東方斜面	S105	方形	270×(500)	位置 傾斜の割合	柱穴 位置	傾斜の度数(度)	溝	土坑	平安後半
226	東方斜面	S106	方形	470×()	柱穴	柱穴	柱穴	溝	土坑	平安後半
227	朝日斜面	()	()	()	南東窓の支妻	柱穴	柱穴	溝	土坑	平安後半
228	朝日斜面	()	()	()	り	柱穴	柱穴	溝	土坑	平安後半
229	太田谷内輪	S101	方形	270×260	南東窓	柱穴や柱管	柱穴	溝	土坑	平安後半
230	太田谷内輪	S107	長方形	315×265	(100)	柱穴	柱穴とその中 間	溝	土坑(底面約10cm)、漆地銀 漆地・表面漆の残存	平安後半
231	太田谷内輪	S102	長方形	280×260	(5.2)	柱穴	柱穴	溝	S102・07・S101、焼入水槽	平安後半
232	太田谷内輪	S117	長方形	275×240	(6.0)	柱穴	柱穴	溝	S102・07・S101、S117とS124	平安後半
233	太田谷内輪	S112	方形	430×365	(15.7)	柱穴の割合	柱穴	溝	S103と重複	平安後半
234	太田谷内輪	S111	長方形	260×200	(5.2)	柱穴	柱穴	溝	土坑	平安後半
235	太田谷内輪	S113	長方形	260×200	(5.2)	柱穴	柱穴	溝	S113・15・S112	平安後半
236	太田谷内輪	S115	長方形	260×200	(5.2)	柱穴	柱穴	溝	土坑	平安後半
237	太田谷内輪	S116	長方形	260×200	(5.2)	柱穴	柱穴	溝	土坑	平安後半
	床								S110-S111	

第37表 壁穴住居跡観察表(23)

No.	遺跡名	遺跡名	平面形	規模(cm)	位置	柱マダ (柱地のり)	構造	柱穴(cm)	埋蔵状況	出土物・絶品・特徴・新旧地質	地質
238	大田谷内館	S1023	方形	600×625 (40.0)	東寄 (北寄の方)	粘土 川砂岩	内構、外構と その山間に 構造	×70~90	sondage入 渤海の砂も新いものと予想	S1025~42~S1024~S1023	平安地層
239	大田谷内館	S1024					内構とその中 構造		土骨壁、瓦屋根、ツイモ引は、焼成品	↑骨壁	平安地層
240	大田谷内館	S1025							S1025~42~S1024~S1023	平安地層	
241	大田谷内館	S1026	方形	295×270 (6.0)			四隅		1.0m厚 渤海に中でひび割れのものと想定	S1026~42~S1024~S1023	平安地層
242	大田谷内館	S1021					内構		S1020~52~S1021	平安地層	
243	筋	S1020					内構		渤海屋、瓦屋根 粘土壁、S1020~52~S1021~52~44	平安地層	
244	大田谷内館	S1022	方形	300×250 (6.0)			内構		平安地層	S1022~52~44	
245	大田谷内館	S1044	長方形	440×320 (14.1)	東北寄	粘土 川砂岩	内構と軒、西面 の柱間		十角形、瓦屋根土壁、新地長、瓦器 S1020~52~S1021~52~44~S1022	平安地層	
246	大田谷内館	S1022					内構		新地層	S1020~52~52~44~S1022	
247	大田谷内館	S1027	隅丸長	530×450 (25.0)			内構	×50~60	骨器類	平安地層	
248	大田谷内館	S1054					内構とその半 圓	×30~40	灰化水痕	平安地層	
249	大田谷内館	S1032					内構とその半 圓			平安地層	
250	大田谷内館	S1029	長方形	350×295 (10.0)	床面中央寄	粘土 川砂岩	柱十 二つ		1.0m厚、ツイモ引は、焼成品 S1006~52~S1029	平安地層	

第38表 墓穴住居跡観察表(24)

No.	遺物名	測量名	平面形	規 標(cm) 身幅×足幅(高さ)	カマド 位置	柱 穴(cm) 底面 底面寸法(高さ)	棟梁材 板上	棟地方向 底面寸法×深さ	出土遺物・特征部位・新山川系 構築物明
251	太田谷小船	SH70	方形	420×490 (18.0)	津山中火舟 り	底床とその中 川原石 間	底床 ×60	土壇壁、 出入り口埴輪、 SH78・SH70	平安末期
252	太田谷小船	SH78	方形	470×460 (21.6)		底床	底床 ×60	土壇壁、 底床 SH78・SH70	平安末期
253	太田谷小船	SH86				不明		SH70・71と底床、 底床と窓	平安末期
254	太田谷小船	SH71				不明		SH71・SH13・70・76・78・86	平安末期
255	太田谷小船	SH83	方形	285×270 (13.0)		底床とその中 川		土壇壁、朽木付土器 SH71・SH13・SH76	平安末期
256	太田谷小船	SH75	長方形	6.00×6.95 (32.0)	底床の北側部	底床 川原石		土壇壁 津山中火舟の東側部 SH71・33・106・142・SH75	平安末期
257	太田谷小船	SH106				不明		SH105・SH75・29・70	平安末期
258	太田谷小船	SH107				底床とその中 底に底床		SH142・75と底床、 底床と窓	平安末期
259	太田谷小船	SH142			底床	底床とその中 底に底床	×20~30		平安末期
260	太田谷小船	SH144				底床とその中 底に底床			平安末期
261	太田谷小船	SH74	長方形	490×430 (21.0)		底床とその中 底に底床 不明	×40~60	土壇壁、底床 SH74・SH107・142・144	平安末期
262	太田谷小船	SH143							平安末期
263	太田谷小船	SH47	長方形	630×440 (27.7)	西側のやや北 南	底床とその中 川原石	×40~70	土壇壁、トイゴ特11、 敷器 窓は底床タイプ	平安末期
	船								

第39表 壁穴住居跡観察表(25)

No.	遺跡名	遺跡名	平面形	渠槽(cm)	カマド	位置	構造材	柱穴(cm)	堆積状況	出土遺物・断面測定・新旧目録	考察説明
264	大田谷内橋	SL40	長方形	360×450 (10.6)	所縫のやや北寄り	柱七 井干	内縫とその中 川端石	直径近×深さ ×30~50	西側	1角窓、底石 SI145-SI40、横筋はトンネルタイプ	平安末期
265	大田谷内橋	SL145	長方形	280×250 (6.0)			内縫			SI145-SI40,	平安末期
266	大田谷内橋	SL91	長方形	600×610 (30.0)	東側の北寄り		内縫とその中 川端	直径 ×30~55		1角窓、柱七土足、縦筋 池戸水道、陶器が出土した	平安末期
267	大田谷内橋	SL108	長方形	650×560 (37.7)			内縫とその中 川端	直径 ×30~60		土足窓、柱七土足、縦筋 SI91-SI108	平安末期
268	大田谷内橋	SL121	方窓	550×540 (28.7)	南		内縫とその中 川端	直径 ×20~60		SI121-SI91-SI108	平安末期
269	大田谷内橋	SL79	長方形							SI108-SI121-108	平安末期
270	大田谷内橋	SL60	長方形	550×450 (25.9)			内縫とその中 川端			SI126-SI60-SI61	平安末期
271	大田谷内橋	SL136	長方形	630×560 (31.5)			内縫とその中 川端	直径 ×25~40		東・西側壁に土足窓 SI126-SI60-SI61	平安末期
272	大田谷内橋	SL66	方窓	400×360 (15.6)	東側の北寄り	柱土	内縫とその中 川端	直径 ×15~30		土足窓、縦筋 SI90-SI56-SI97	平安末期
273	大田谷内橋	SL60					内縫とその中 川端			西側の通路へつながる手作窓 SI126-SI60-SI61	平安末期
274	大田谷内橋	SL57					内縫			土足窓 SI90-SI60-SI61	平安末期
275	大田谷内橋	SL97					内縫とその中 川端			土足窓、柱七土足、縦筋 SI90-SI60-SI61	平安末期
276	大田谷内橋	SL61	長方形	650×540 (36.1)	東側の北寄り	柱土	内縫とその中 川端	直径 ×20		土足窓、柱七土足、縦筋 SI90-SI60-SI61	平安末期
								直径 ×30~60			

第40表 墓穴住居跡観察表(26)

No.	遺跡名	遺跡名	平面形	屋根高 (cm)	裏山×北側 (cm)	カマヤ	柱穴 (cm)	長地方向	短地方向	埋蔵状況	出土遺物・特記事項・前山関係	構造説明
277	人間谷内横	SL105	馬場形	410×310 (127)		西風とその下 向	複数個(?)複数					平安後半
278	人間谷内横	SL137								SH137-SD100		平安後半
279	人間谷内横	SL141								SH141-SD100		平安後半
280	太田谷内横	SL150	方形	460×385 (190)	南側の角内傾	粘土	西風と對外傾 上	N-20-W	N-20-E	浮石柱を多 無孔入	土師器、須恵器、鉢等	平安後半
281	太田谷内横	SL151	方形	465×485 (200)	南側の角内傾	粘土	西風側にあら 川原石	N-5-W	N-5-E	浮石柱を多 無孔入	土師器、フイヨーリー、鉢等 須恵器コトハ部分を含む	平安後半
282	太田谷内横	SL152	馬場形	365×385 ()	東側の北東傾	粘土	東西南北に2ヶ 川原石	N-80-E	N-80-E	浮石柱を多 無孔入	土師器、須恵器	平安後半
283	太田谷内横	SL157	方形	370×340 (14.0)	南側の西傾	粘土	西風と東・北傾 川原石	S-15-E	S-15-E	浮石柱を多 無孔入	1.60m、須恵器 須恵器コトハ部分を含む	平安後半
284	人間谷内横	SL158	方形	210× ()	南側の南東傾	粘土	西風と東傾 川原石	N-7-W	N-7-W	浮石柱を多 無孔入	須恵器コトハ部分を含む— 台原山・古小林火山の噴出物	平安後半
285	奈良町跡	SL159a	方形	480×482 ()	南側の南側	粘土	西風 川原石	X-12~16	X-12~16	浮石柱を多 無孔入	土師器、須恵器、鉢等 須恵器コトハ部分を含む	平安後半
286	奈良町跡	SL159b	方形	380× ()	東側でさく	粘土	西風 川原石	X-12~17	X-12~17	浮石柱を多 無孔入	須恵器コトハ部分を含む— SL159b-SL159a	平安後半
287	奈良町跡	SL157	方形	600×628 ()	南側の南側	粘土	西風 川原石	X	X	浮石柱を多 無孔入	土師器、土器 須恵器コトハ部分を含む—	平安後半
288	奈良町跡	SL158	方形	532×506 ()	南側の南側	粘土	西風とその中 間	X-6~57	X-6~57	浮石柱を多 無孔入	須恵器コトハ部分を含む—	平安後半

第41表 墓穴住居跡観察表(27)

No.	測定名	測定名	平面形	規 横(cm) 長軸×短軸・(底印)	カマド 位置	標準柱 位置	柱 穴 (cm) 周長×深さ×底さ)	柱頭方向	周囲形状	出土遺物・発見事項・新旧感想	構造説明
289	祭壇跡	SL450a	方形	900×900 ()	内側の壁脚	内側とその中 間	X6~72		浮石塊を多 数投入	土壇場、瓦瓦砾、骨灰	平成復元
290	祭壇跡	SL450b	方形	900×900 ()	内側の壁脚	内側とその中 間	X6~72		浮石塊を多 数投入	骨灰はカマド周辺を除き一層 SL450b-SL450a-SL450b(底印)	平成復元
291	祭壇跡	SL807	方形	682× ()	内側の壁脚	内側	X84		浮石塊を多 数投入	土壇場、瓦瓦砾、骨灰	平成復元
292	祭壇跡	SL851	方形	680× ()	内側でさす				浮石塊を多 数投入	土壇場、瓦瓦砾	平成復元
293	祭壇跡	SL1020a	方形	X ()					浮石塊を多 数投入	土壇場、瓦	平成復元
294	祭壇跡	SL1020b	方形	278× ()					浮石塊を多 数投入	SL1020b-SL1020a	平成復元
295	祭壇跡	SL1200	方形	740×704 ()	内側の壁脚	内側とその中 間	X30~68		浮石塊を多 数投入	土壇場、瓦瓦砾を除き一層 骨灰	平成復元
296	祭壇跡	SL1204	菱形	438×340 ()	内側でさす			X2~25	浮石塊を多 数投入	土壇場、瓦瓦砾、骨灰	平成復元
297	祭壇跡	SL1385	方形	483× ()					浮石塊を多 数投入	SL1205-SL1204	平成復元
298	祭壇跡	SL1386b	方形	440×405 ()	内側の壁脚	内側でさす	X9~41		浮石塊を多 数投入	上部底、瓦瓦砾片、骨灰	平成復元
299	祭壇跡	SL1623	方形	2285×215 ()	内側裏の凹部 周縁				浮石塊を多 数投入	1付添、陶器底	平成復元

第42表 堅穴住居縫察表(28)

No.	遺跡名	遺構名	平面形	屋 横 (cm)	柱 穴 (cm)	柱 穴 (cm)	柱 穴 (cm)	長軸方向	短軸方向	出土遺物・特記事項・新山開発系	構築形
				横幅×延幅	(柱穴)	位置	配置	規格(延×深さ)			
300	輪形塗山	SB003	方形	(60) × 560	南壁の南裏 寄り	粘土 川原石	特徴できず			新山開発系 輪郭はカット部分を除き一括	平安後半
301	輪形塗山	SB010	方形	270 ×						内7-1252A入	平安後半
302	輪形塗山	SB01	方形	365 × 360	南壁の東寄り	粘土 川原石	特徴できず	144 × 8 ~ 16	N-6-W	カマド型窓が既存タイプ	平安後半
303	輪形塗山	SB003	方形	(12.4) × 369	南壁の北寄り	粘土	特徴できず		N-97-E	新山開発系 十角形、傾斜地	平安後半
304	輪形塗山	SB04	方形	(14.62) × 701	南壁のやや西寄り	粘土 川原石	特徴できず		N-24-E	浮石A出入口	平安後半
305	天井塗	ST01	方形	265 × 320	南壁のやや西寄り	粘土 川原石	特徴できなから つた		N-0-E	浮石A出入口	平安後半
306	天井塗	ST02	方形	(8.30) × 390	南壁の北寄り	粘土 川原石	西端	0-5 × 13 ~ 20	Q-59	横下げる	平安後半
307	天井塗	ST03	方形	420 × 416 (16.5)	南壁の南寄り	粘土 川原石	西端とその中 間		N-13-E	新山開発系多 面記入	平安後半
308	窓付輪形	SB01	方形	607 × 624 (22.9)	東壁の中央	粘土 川原石	西端	× 14 ~ 25	N-07-E	カマドが複数ある傾斜を含む窓が1枚 られる	平安後半
309	窓付輪形	SB02	方形	502 × 590 (19.6)	東壁の北寄り	粘土 川原石	西端とその中 間	× 21 ~ 35	N-4-E	カマドが複数ある傾斜を含む窓が1枚	平安後半
310	窓付輪形	SB03	方形	265 × 250	東壁の北寄り	粘土 川原石	西端とその中 間に1~3個	× 25 ~ 35	N-5-W	浮石A出入口	平安後半
311	窓付輪形	SB04	方形	573 × 604 (28.9)	北壁側の北寄 り	粘土 川原石	西端とその中 間に2~3個	× 44 ~ 50	N-61-E	カマドの窓を除き窓が4枚	平安後半
312	窓付輪形	SB05	方形	602 × 544 (26.7)	東壁の北寄り	粘土 川原石	西端とその中 間に2~3個	× 23 ~ 45	N-24-E	浮石A出入口	平安後半
									SD06 ~ SD04	SD06 ~ SD04	

第43表 穴住居跡観察表(29)

No.	標示名	遺物名	平面形	足 横 (cm)	カマド	柱 穴 (cm)	施設状況	出土遺物・特記事項・歴史的意義	参考文献
313	高円錐形埴輪	S106	方形	478×466 (22.3)	東側の北寄り	楕円形 直径とその半径 間に3~4個	楕円形(径×深さ) 直径 ×27~43	N-4-E N-2-W	平安後半 平安後半
314	高円錐形埴輪	S106	方形	478×464 (23.6)	西側の北寄り	楕円形と東西壁 の半径	楕円形 ×29~59	S106-ST01-1907号 「御馬糞」付近 S103 S110-S111-S117	カマド跡を含む遺構がほぼ活 用中 平安後半
315	高円錐形埴輪	S110	方形	603×568 (34.1)	東側の北寄り	楕円形とその半径 間に3~4個	楕円形 ×39~54	N-87-W	平安後半
316	高円錐形埴輪	S112	方形	593×513 (36.7)	南東部の西寄 り	楕円形と対角線 上に	楕円形 ×25~33	N-60-W S102	カマド跡を含む遺構が一巡 南東部の西寄り 「御馬糞」付近 平安後半
317	高円錐形埴輪	S113	方形	370×350 (13.0)	南端の北寄り	粘土 火 月面石	楕円形と対角線 上	N-5-W	平安後半
318	高円錐形埴輪	S114	方形	983×834 (77.1)	北東部の北寄 り	楕円形と対角線 上	楕円形 ×27~71	N-20-W S170-ST14-S116	カマド跡を含む遺構がほぼ活 用中 平安後半
319	高円錐形埴輪	S115	方形	788×760 (69.6)	北東部の北寄 り	楕円形と対角線 上	楕円形 ×28~72	N-40-W S129	楕円形、火薬 焼失状況 カマド跡を含む遺構がほぼ活 用中 平安後半
320	高円錐形埴輪	S116	方形	527×506 (36.7)	南東部の西寄 り	楕円形と対角線 上	楕円形 ×29~45	N-22-W S117	平安後半
321	高円錐形埴輪	S117	方形	600×781 (67.2)	東側の北寄り	粘土 月面石	楕円形と対角線 上	N-11-W S129	土壇場、砾石、小石 カマド跡を含む遺構がほぼ活 用中 平安後半
322	高円錐形埴輪	S118	方形	568×567 (32.0)	南東部の東寄 り	粘土 月面石	楕円形とその半 径 ×53~65	N-88-W N-70-E	平安後半 平安後半
323	高円錐形埴輪	S119	方形	458×380 (16.0)	南東部の西寄 り	粘土 月面石	楕円形 ×6~31	「御馬糞」 茶山園 茶山園	平安後半 平安後半

第44表 堅穴住居観察表(30)

No.	測定名	測定名	平面形	規模(cm)	柱穴(cm)	カマド	柱穴(cm)	長地方向	地盤状況	出土物・特徴・新旧關係	調査時期
324	床下敷地	S211	方形	423×360 (15.2)	東北の北寄り	柱穴	柱穴(6×深さ)	N-83-E	土壌、瓦礫、砾石、粘土、小石	S21-S71-12-S301	平成10年
325	床下敷地	S222	方形	516×501 (25.0)	南北の西寄り	柱穴とその中 間	柱穴(3個) ×32~46	N-23-E		S22-S803	平安後半
326	床下敷地	S223	方形	503×673 (34.0)	東南の北寄り	柱穴とその中 間	柱穴(3個) ×42~63	N-77-E	土壌、瓦礫	S28-S223	平安後半
327	床下敷地	S24	方形	418×418 (17.5)	南東の西寄り	柱穴とその中 間	柱穴(3個) ×23~73	N-21-W		S1008	平安後半
328	床下敷地	S25	方形	503×496 (24.0)	西北の北寄り	柱穴	柱穴(6個) ×30~50	N-16-W	柱穴(6個) ×30~50	S1006	平安後半
329	床下敷地	S26	方形	500×486 (24.0)	東南の北寄り	柱穴	柱穴(6個) ×30~50	N-701-W	柱穴(6個) ×30~50	S1005	平安後半
330	床下敷地	S27	方形	506×504 (25.1)	南東の北寄り	柱穴	柱穴(6個) ×30~50	N-45-W	柱穴(6個) ×30~50	S1004	平安後半
331	床下敷地	S28	方形	573×565 (31.2)	西北の北寄り	柱穴とその中 間	柱穴(6個) ×39~58	N-26-W	浮石多孔質 入	S1003	平安後半
332	床下敷地	S29	方形	268×266 (7.0)	東南の北寄り	柱穴	柱穴(6個) ×39~58	N-78-E	浮石混入	S28-S223	平安後半
333	床下敷地	S30	方形	430×392 (16.9)	西北の北寄り	柱穴とその中 間	柱穴(6個) ×68~73	N-4-E		S1002	平安後半
334	床下敷地	S31	方形	300×290 (7.9)	南東の北寄り	柱穴	柱穴(6個) ×68~73	N-46-W	浮石の凝集 層あり		平安後半
335	下戸田	S801	純方形	438×270 (11.78)	柱穴	柱穴(6個) ×68~73	柱穴(6個) ×68~73	N-12-W	土壌、瓦礫	S1001	平安後半
336	下戸田	S802	方形	414×312 (13.9)	東南の北寄り	柱穴	柱穴(6個) ×68~73	N-77-W	浮石混入	S1002	平安後半

第45表 堅穴住居跡緊表(31)

No.	遺跡名	遺跡名	平面形	規 準 (cm)	長軸×短軸 (面積)	位置	カマド	柱穴 (cm)	埋蔵状況	出土遺物・特記事項・削除原因	検査結果
337 下前田	SH03	A-C	方形	720×600 (41.8)	南東側外壁面	柱1: 川原石 所に1-2箇	四隅とその中の 間	×28~54	N-16-W	浮石塊、 土壌層、瓦片、 骨灰、鐵鋸子行ぐ、 S103C-S103E-S103A	平安後半
338 下前田	SH04	方形	380×325 (9.95)	住居裏より 東側の北寄り	川原石 月原石	南を地盤の中 45-1側	対角線	×10~29	N-17-W	浮石塊、 カマド土は褐色、 骨灰	平安後半
339 下前田	SH05	方形	340×320 (9.14)	西端の北寄り	粘土 月原石	北側の柱 月原石	西隅	×65~86	N-120-E	浮石塊、 土壌層に子貝殻、 粘土層上カマド土は 2時間の留置がある	平安後半
340 下前田	SH07	方形	720×740 (96.0)	南端の北寄り	粘土 月原石	南を地盤の中 45-1側	対角線	×33~46	N-28-E	浮石塊、 土壌層に子貝殻、 粘土層上カマド土は 2時間の留置がある	平安後半
341 下前田	SH08	方形	350×314 (11.66)	南端の北寄り	粘土 月原石	西隅	西隅	×10~18	N-16-E	浮石塊、 土壌層に子貝殻、 粘土層上カマド土は 2時間の留置がある	平安後半
342 下前田	SH09	方形	420×362 (13.7)	所の東寄り	粘土 月原石	所の東寄りと つて相対する 8箇	対角線	×65~86	N-10-E	浮石塊、 土壌層に子貝殻、 粘土層上カマド土は 2時間の留置がある	平安後半
343 下前田	SH10	方形	360×304 (9.02)	南端の北寄り	粘土 月原石	南端の北寄り	対角線	×67~78	N-8-E	浮石塊、 土壌層に子貝殻、 粘土層上カマド土は 2時間の留置がある	平安後半
344 下前田	SH11	方形	562× ()	東端の北寄り	粘土 月原石	東端の北寄り	対角線	×63~77	N-68-W	浮石塊、 土壌層に子貝殻、 粘土層上カマド土は 2時間の留置がある	平安後半
345 細須御跡	SH03	方形	680× ()			対角線上	対角線	63~65×63~77		瓦他層、土壌層に子貝殻、 粘土層上カマド土は 2時間の留置がある	平安後半
346 細須御跡	SH07	方形	750×720 ()	細須の南寄り		正隅と対角線 上2ヶ	正隅	×60		土壌層、 粘土層上カマド土は 2時間の留置がある	平安後半
347 梶野自川印	SH01	方形	642×630 ()	細須でなか った		正隅とその中 間	正隅	×31~45		1個瓦、和瓦頭、 瓦頭、瓦頭	平安後半
III										SH07-14-S101-S102-S103	

第46表 堅穴住居跡観察表(32)

No.	遺跡名	遺跡名	平面形	規模(cm)	カマド	柱穴(cm)	地盤状況	山上遺物・特記事項・新山形系	樹木倒伏
348	川原日川中	SH02	方形	488×494 ()	側面の両寄り 柱上 川原石	62.2 圓形 特段できさず	60×42~67 60×42~67	N-9-E 入 入	浮石多層 土壌、葉脈岩、フジゴリ、松久保 SK07-14-S01-6802・S1001 浮石多層 土壌、葉脈岩 S01・02-S03-6808
349	川野日川中	SH03	方形	229×190 ()	側面できさず	圓形	×27~28	浮石多層 入	浮石多層 土壌、葉脈岩 S102-S01-6809
350	川原日川中	SH06	方形	880× ()	側面とその中 間で凹陥 特段できさず	圓形	×27~28	浮石多層 入	浮石多層 土壌、葉脈岩 S103-S01-6810
351	小谷村跡	SH101	方形	560× (19.5)	北側の中央 丸土	対角線 圓形	×	N-14-W 浮石多層 入	浮石多層 「角屋、須賀屋」 S104-S01-6811
352	小谷村跡	SH102	方形	560× (19.5)	北側の北寄り 丸土	対角線 圓形	×	N-10-E 浮石多層 入	浮石多層 土壌(丸山古墳)、輪郭正 S102-S01-6812-S01-6813
353	小谷村跡	SH103	方形	440× (16.7)	北側の北寄り 丸土 側上:川原石	対角線とその半 圓形 圓形:11畳	13~25×5~10	N-29-W 浮石多層 入	浮石多層 土壌(丸山古墳) S102-S01-6814-S1-6815
354	小谷村跡	SH104	方形	×	側面の東寄り	圓形	24~25×16~53	S104-S105	合算
355	水床B	SH02	方形	362×488 (20.19)	側面の両寄り 柱上 川原石	構造できな い。 いた。	N-11-W 浮石多層 入	浮石多層 土壌 輪郭はカマト部分を除き一帯 東端から北端中央までわざわざられる	浮石多層 土壌 S106-S01-6816
356	水床B	SH03	方形	340×328 (9.60)	側面の両寄り	構造できな い。 いた。	N-1-W 浮石多層 入	浮石多層 土壌 輪郭はカマト部分を除き一帯 北端に平行して2条の縦 壁	浮石多層 土壌 S107-S01-6817
357	水床B	SH04	方形	440×457 (15.59)	側面の両寄り 柱上 川原石	構造できな い。 いた。	N-S 入	浮石多層 入	浮石多層 土壌 輪郭はカマト部分を除き一帯 北端に平行して2条の縦 壁
358	水床B	SH05	方形	548× ()	側面の北寄り	柱上 川原石	15~25×19~28	N-100-W 浮石多層 入	浮石多層 土壌 輪郭はカマト部分を除き一帯 北端に平行して2条の縦 壁
359	水床B	SH06	方形	361×356 (12.1)	側面の北寄り 柱上 川原石	柱上 川原石	15~25×19~28	N-100-W 浮石多層 入	浮石多層 土壌 輪郭はカマト部分を除き一帯 北端に平行して2条の縦 壁

第47表 積穴住居跡観察表(33)

No.	通称名	遺構名	平面形	底標(cm)	カマド	位置	構造材	柱穴(cm)	長軸方向	地盤状況	出土遺物・特征要項・削除要項	特徴要項
360	积水B	S070A	方形	720× ()	雨蓋のやぐら 寄り	粘土 川削石 板上	四隅とその中 間部、内側、 板上	外石丸入、 内石丸入、 外石丸入、 内石丸入、 外石丸入、 内石丸入	1角廻、須恵器、 カマドは4箇(A-B)にいたり使用 他の東側出入口階段 階段はカマド部分を除き一層	1角廻、須恵器、 カマドは4箇(A-B)にいたり使用 他の東側出入口階段 階段はカマド部分を除き一層	1角廻、須恵器、 カマドは4箇(A-B)にいたり使用 他の東側出入口階段 階段はカマド部分を除き一層	
361	积水B	S070B	方形	720× ()	雨蓋のやぐら 寄り	粘土 川削石	四隅とその中 間部、内側、 板上	外石丸入、 内石丸入、 外石丸入、 内石丸入、 外石丸入、 内石丸入	カマドは4箇(A-B)にいたり使用 他の東側出入口階段 階段はカマド部分を除き一層	カマドは4箇(A-B)にいたり使用 他の東側出入口階段 階段はカマド部分を除き一層	カマドは4箇(A-B)にいたり使用 他の東側出入口階段 階段はカマド部分を除き一層	
362	积水B	S070C	方形	610× ()	雨蓋のやぐら 寄り	粘土 川削石	四隅とその中 間部、内側、 板上	外石丸入、 内石丸入、 外石丸入、 内石丸入、 外石丸入、 内石丸入	カマドは4箇(A-B)にいたり使用 他の東側出入口階段 階段はカマド部分を除き一層	カマドは4箇(A-B)にいたり使用 他の東側出入口階段 階段はカマド部分を除き一層	カマドは4箇(A-B)にいたり使用 他の東側出入口階段 階段はカマド部分を除き一層	
363	积水B	S070D	方形	690× ()	雨蓋のやぐら 寄り	粘土 川削石	四隅のやぐら 板上	外石丸入、 内石丸入、 外石丸入、 内石丸入、 外石丸入、 内石丸入	外石丸入、 内石丸入、 外石丸入、 内石丸入、 外石丸入、 内石丸入	カマドは4箇(A-B)にいたり使用 他の東側出入口階段 階段はカマド部分を除き一層	カマドは4箇(A-B)にいたり使用 他の東側出入口階段 階段はカマド部分を除き一層	カマドは4箇(A-B)にいたり使用 他の東側出入口階段 階段はカマド部分を除き一層
364	积水B	S070E	方形	625×625 ()	雨蓋のやぐら 寄り	粘土 川削石	外石丸上、 内石丸上	25×30×39~55	N-6-E	外石丸上、 内石丸上	[須恵器(手平土器)、鏡等]	外石丸上
365	积水B	S070F	方形	380×385 ()	雨蓋のやぐら 寄り	粘土 川削石	生野外のやぐら 板上とその中 間	22×30×30~30	N-5-E	外石丸入、 内石丸入、 外石丸入、 内石丸入	土食器、須恵器	外石丸上
366	积水B	S070G	方形	430× ()	雨蓋のやぐら 寄り	粘土 川削石	四隅	20×6				外石丸上
367	积水B	S071	方形	280×275 ()	雨蓋のやぐら 寄り	粘土 川削石	雨蓋できなか った		N-15-W	土食器		外石丸上
368	积水B	S072	方形	652×654 ()	雨蓋のやぐら 寄り	粘土 川削石	雨蓋とその中 間	25×30×36~30	N-5-W	外石丸入、 内石丸入	[須恵器、 鏡等]	外石丸上
369	积水B	S073	方形	283×282 ()	雨蓋のやぐら 寄り	粘土 川削石	雨蓋できなか った		N-3-W	外石丸入、 内石丸入	土食器、須恵器	外石丸上

第48表 墓穴住居跡観察表(34)

No.	測定名	測定名	平面形状	規模(cm) (長軸×短軸)	位置	カマド 構造	柱穴(cm) (直径×深さ)	走向	地盤状況	山上植物・特徴事項・削除記録	削除原因
370	柱底 B	SB14	方形	466× ()			直径とセの小 前	NW 23~30×13~60	浮石地盤、 砂質地盤を含む。	土壌層 被覆されている。 SB15~SB16	平安後半
371	柱底 B	SB15	方形	600×610 (27.0)	内部の西側 ()	粘土 川原石	構造できなか べか。		浮石地盤、 上部地盤	SB13~SB14	平安後半
372	柱底 B	SB106	方形	413× ()	周囲が空地	粘土 川原石	構造できなか べか。		浮石地盤、 上部地盤	SB13~SB14	平安後半
373	花壇 A	SB104	方形	420× ()	周囲の北端	粘土 川原石	構造できなか べか。	N-11 R	浮石多量地 地盤上カット10分を除き、遺 入。	浮石多量地 上部地盤	平安後半
374	花壇 A	SB001	方形	626×590 ()	周囲の南寄り	粘土 川原石	外側船上 35程度×30程度	N-16-W	浮石多量地 入。	浮石多量地 上部地盤	平安後半
375	柱底 A1 の A+B	SB01	方形	600×545 (29.45)	周囲の中央よ りやや西寄り	粘土 川原石	構造できなか べか。	N-8-W	土壌層、砂層 カット10分を除き、地盤上に一部 被覆に地盤はなし。瓦残	土壌層、砂層 一部地盤に瓦残	平安後半
376	柱底 A1 の B	SB02	方形	396× ()			構造できなか べか。		土壌層、砂層 壁はカット10分を除き一部	土壌層、砂層 壁はカット10分を除き一部	平安後半
377	柱底 A1 の C	SB04	方形	422×384 (17.0)	周囲の北端	粘土 川原石	構造できなか べか。	N-94-W	上部地盤 多量地盤	上部地盤、砂層 SC39~SC40~SC04~SC05	平安後半
378	柱底 A1 の D	SB05	方形	675× ()	周囲の中央よ り寄り	粘土 川原石	構造と柱角頭 上	N-10-E	浮石多量地 入。	浮石多量地 壁はカット10分を除き一部	平安後半
379	柱底 A1 の E	SB06	方形	527× ()	周囲の中央よ り寄り	粘土 川原石	構造と柱角頭 上	N-16-E	浮石多量地 入。	浮石多量地 SC39~SC40~SC04~SC05	平安後半
380	柱底 A1 の F	SB07	方形	387×390 (12.26)	周囲の中央よ り寄り	粘土 川原石	構造できなか べか。	N-2-E	浮石多量地 入。	浮石多量地 上部地盤、瓦残 壁はカット10分を除き一部	平安後半
										SB08~SB07	

第49表 壁穴住居観察表(35)

No.	測量名	通称名	平面形	規模(m)	柱(穴)(cm)	カマド	位置	構造材	配置	柱(穴)(cm)	地盤状況	は二重輪・特記箇所・新旧関係	備考説明
381	赤坂A1(6)	S808	方形	長軸×短軸・(面積)	397×300 ()	南面	先土	川原石		N-1-E	土壌層、フジガリ	平成8年	
382	赤坂A1(5)	S809	方形	256×266	(7.57)	南西斜面に	先土			N-9-W	浮石地、	平安時代	
383	赤坂A1(7)	S810	方形	610×518 (28.40)	南壁の中央 寄り	先土	川原石	上	四脚と好角輪	N-6-E	浮石地、須弥輪、鉄手	平安時代	
384	赤坂A1(8)	S812	方形	602×562 (31.50)	南壁の中央 寄り	先土	川原石	上	四脚とその山	N-14-E	大泥津石を留め置き(?) 入	平安後半	
385	赤坂A1(9)	S815	方形	381× ()	西壁の中央 寄り	先土	川原石	上	四脚	N-6-E	大泥津石を留め置き(?) 入	平安後半	
386	赤坂A2(2)	S8101	方形	640× ()	南壁の中央 寄り	先土	川原石	上	四脚と好角輪	N-36-W	浮石地、須弥輪	平安後半	
387	赤坂A2(3)	S8102	方形	668× ()	南壁の中央 寄り	先土	川原石	上	四脚とその山	N-17-W	浮石地、	平安後半	
388	赤坂A2(5)	S8103	方形	260× (6.08)	南壁の中央 寄り	先土	川原石	上	四脚と好角輪	N-15-E	浮石地、	平安後半	
389	赤坂A2(8)	S8104	方形	210×298 (6.09)	南壁の中央 寄り	先土	川原石	上	四脚と好角輪	N-10-E	浮石地、須弥輪、鉄手	平安後半	
390	赤坂A2(9)	S801	方形	340×290 (6.09)	南壁の中央 寄り	先土	川原石	上	四脚と好角輪	N-71-E	浮石地、	平安後半	
391	赤坂B1(1)	S802	方形	292×366 ()	西壁の柱正中 尖	先土	川原石	上	四脚と好角輪	土壌層	浮石地(?)、須弥輪	奈良	
392	赤坂B1(1)	S803	方形	372×360 ()	東壁の柱正中 尖	先土	川原石	上	四脚と好角輪	土壌層	浮石地(?)、須弥輪	平安後半	浮石地前

第50表 堅穴住居観察表(36)

No.	遺跡名	遺構名	平面形	規模(cm) 長軸×短軸・(面積)	前面	カマド 焼成柱	火葬	柱穴(cm) 床板溝×床板	火葬方向		埋蔵状況	出土物・特記事項・新旧關係	補足説明
									火葬場所	火葬場所			
393	住居跡	1号										遺物としてて出	
394	住居跡	2号										遺物としてて出	
395	住居跡	3号										遺物としてて出	
396	住居跡	4号										遺物としてて出	
397	住居跡	5号										遺物としてて出	
398	住居跡	6号										遺物としてて出	
399	住居跡	7号										遺物としてて出	
400	住居跡	8号										遺物としてて出	
401	住居跡	9号	方形	720× 720	北壁のやや西 ()	川原石	柱造石					土壙壁、倒壁 柱地穴	奈良
402	住居跡	10号										遺物としてて出	
403	住居跡	11号										遺物としてて出	
404	住居跡	12号										遺物としてて出	
405	火葬場所	N6 番	方角									河石多量 入	平成3年
406	火葬場所	ODUN28	方角									土壙壁、倒壁、 柱地穴、フイニョ	平成3年
407	火葬場所	SD201	方角	519×509 (25.0)	火葬場所下石 ()	粘土 川原石	圓窓とその中 間					土壙壁(かみ)、倒壁 柱地穴(下)を除き一般	平成3年
408	火葬場所	SD202	方角	453× ()			圓窓とその中 間					土壙壁、 柱地穴(下)を除き一般	平成3年
409	火葬場所	SD203										河石多量 入	平成3年
410	火葬場所	SD204										河石多量 入	平成3年

第51表 積水住居跡観察表(37)

No.	遺構名	遺構名	平面形	先塗(cm)	カマド	柱穴(cm)	長軸方向	堆積状況	出土遺物・特記事項・新旧関係	構造判明
410	大塗6次 (P1区)	SH401	方形	337×300 (6.01)	長軸×短軸・窓跡	柱置 窓跡の下部	配混	溝底でさく	石器入、 焼土塊入、 灰土塊入、 木炭入	平成4年半
411	大塗6次 (P1区)	SH402	方形	400×361 (12.0)	窓跡の下部	柱置 川原石	固焼きとその中 間	>8~19	石器入、 焼土塊入、 灰土塊入、 木炭入	平成4年半
412	大塗6次 (P1区)	SH404	方形	680×670 ()	窓跡の下部	柱置 川原石	固焼きとその中 間	33~36×17~39	石器入、 焼土塊入、 灰土塊入、 木炭入	平成4年半
413	大塗6次 (P1区)	SH409	×	()					石器入、 焼土塊入、 灰土塊入	平成4年半
414	大塗10次 (O3区)	SH301	方形	420× ()					石器入、 焼土塊入、 灰土塊入	平成4年半
415	大塗10次 (O3区)	SH302	方形	270× ()					石器入、 焼土塊入	平成4年半
416	大塗10次 (O3区)	SH303	方形	500×400 ()		1.5m×1.5m		N-38-W	石器・北緯24度58分 入	平成4年半
417	大塗13次 (O4区)	SH01	方形	425×345 ()	窓跡の下部	柱置 川原石	固焼きとその中 間	N-8	土壌層、ゼン 土壌層	平成4年半
418	大塗13次 (O4区)	SH02	方形	×298 ()	窓跡の下部	柱置 川原石	固焼きとその中 間	N-33-W	灰面に竹石 層	平成4年半
419	大塗13次 (O4区)	SH04	方形	432×366 ()	窓跡の下部	柱置 川原石	固焼きとその中 間	N-12-W	灰面×77万 層	平成4年半
420	大塗13次 (O4区)	SH06	方形	460×400 ()	柱置の下部	柱置 川原石	固焼きとその中 間	N-13-W	竹石層、ツイガ特有 層	平成4年半
421	大塗13次 (O4区)	SH08	方形	470×390 ()	窓跡の下部	柱置 川原石	固焼きとその中 間	N-15-W	竹石層×77万 石	竹石層 焼土塊入

第52表 堅穴住居跡 鍋緊表(38)

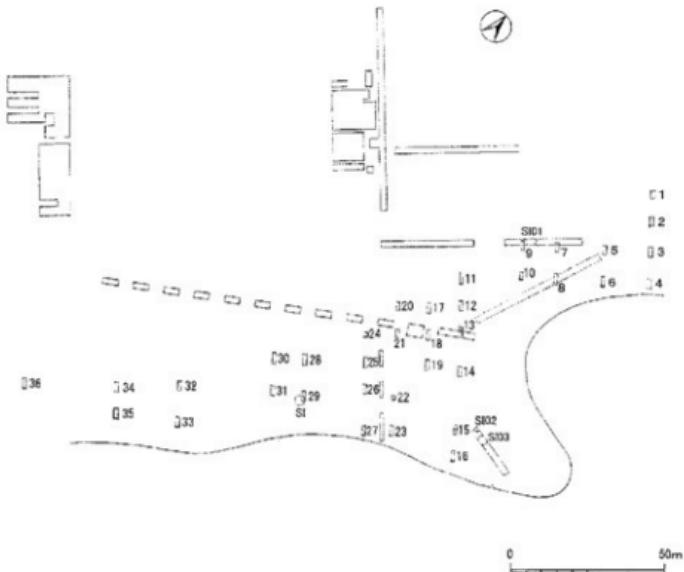
No	遺跡名	遺跡名	平面形	底幅(cm)	長軸×短軸(底面)	柱穴(cm)	ガマド	位置	構造物	柱穴	断面(空×深さ)	断面状況	出土遺物・特記事項・新旧關係	備考
422	大塙13穴 (64) [4]	SH07	方形	2935	×720	()	内側の東寄り	粘土	四隅と対角線 上	N-25-W	浮石多量	土師器、瓦等多量		
423	大塙13穴 (64) [4]	SH08	方形	4200	×410	()	内側の東寄り	粘土	床面に1箇	N-15-W	浮石多量	浮石はカマド部分を除き一透		
424	大塙13穴 (64) [5]	SH10	方形	3600	×600	()	内側の西寄り	粘土	川原石	S-21-W		水槽底で川原石が複数		
425	大塙13穴 (64) [5]	SH11	方形	640	×510	()	内側の東寄り	粘土	川原石	S-30-W				
426	大塙13穴 (64) [5]	SH12	方形	510	×510	()	内側の東寄り	粘土		S-33-W				
427	人塙19穴 (69) [5]	SH10	方形				南寄				浮石少	土師器	平安時代	
428	人塙19穴 (69) [5]	SH11	方形				南寄					1.0倍	浮石はカマド部分を除き一透	
429	人塙19穴 (69) [5]	SH12	方形				南寄						浮石少	平安時代
430	人塙19穴 (69) [5]	SH13	方形				南寄						浮石少	平安時代
431	大塙19穴 (69) [5]	SH14	方形										浮石底を切る	平安時代
432	土塙	SH118	方形	7.75	×375	()							北壁底に陶器で大きな焼成	
433	土塙	SH116	方形	320	×13×320								SH118-SH116 SH112-SH110	陶火窯
434	土塙	SH112	方形	310	×	()							土師器	
435	土塙	SH110	方形	400	×305	()	東寄の北寄り	粘土	床面に1箇			土師器、骨壺以、灰陶	瓦底を除く複数の陶器	

第53表 堅穴住居跡 賢表(39)

第V章 調査のまとめ

特別史跡大湯環状列石は、鹿角市十和田大湯字万座、字野中堂、字一本木後口に所在する縄文時代後期前葉から平安時代にかけての複合遺跡である。縄文時代後期前葉から中葉にかけては大規模な「マツリと祈りの場」として万座環状列石、野中堂環状列石を中心に、建物跡や配石遺構群、フラスコ状土坑などのさまざまな遺構が構築されていたことが明らかとなっている。また、史跡西側台地の縁には平安時代の集落とともに墓域が形成されたとみられ、堅穴住居跡や円墳などが検出されている。

今年度の調査区は、史跡の北東側に位置するA₆区・A₇区である。史跡北東側には一本木後口配石遺構群があり、昭和59年から3年にわたるA₁区～A₃区の調査で弧状に分布する配石遺構群であることが確認されている。この3年間の調査以来、史跡北東部については調査が行われておらず、一本木後口配石遺構群の周辺における分布状況は不明なままであった。平成17年には一本木後口配石遺構群の南西側の調査を行い、配石遺構13基、配石に伴う土坑1基、焼土遺構40基、平安時代前半以前の道路状遺構1条を確認した。今年度は、一本木後口配石遺構群の北東側について、一本木後口配石遺構群の分布の有無、分布状況の確認、地形の確認を



第36図 調査区北東部堅穴住居跡分布状況

主な目的として調査を行った。

調査の結果、配石遺構3基、焼土遺構22基、平安時代前半の堅穴住居跡3棟が確認された。

配石遺構は、いずれも一本木後口配石遺構群の隣接地点から検出された。配石は耕作により動かされ、その形態を分類するには至らなかったが、構築された位置からみて、一本木後口配石遺構群の一部と考えられる。また、隣接地点以外からの配石遺構の検出はなく、一本木後口配石遺構群が史跡北東側にその分布域を広げることはないことが確認された。

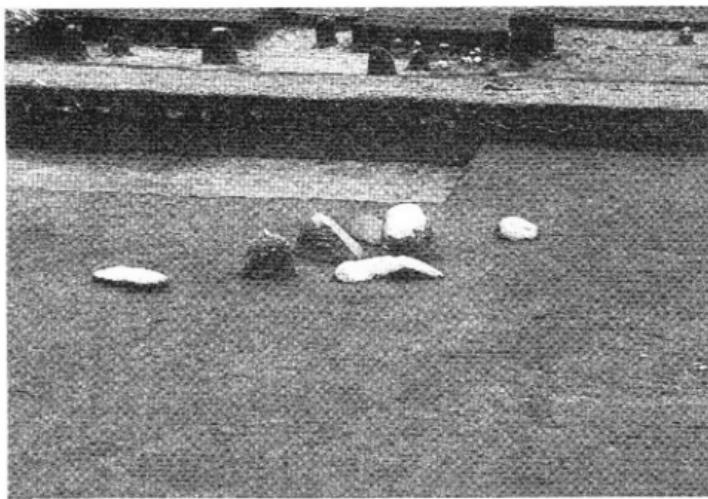
調査区北東側端では、弥生土器の破片がまとまって確認された。トレンチ設定箇所では遺構は確認されなかつたが、周辺に遺構の存在が考えられる。

堅穴住居跡は、調査区北東側の台地縁辺部で確認された。地形調査により、北東側台地縁辺部は沢状の地形があり、斜面には湧水があることが判明した。また、平成10年に行われた試掘調査においても、北東側台地縁辺部から堅穴住居跡が1棟検出されている。このことから、北東側台地縁辺部には、沢を囲むように集落が作られていたことが確認された。史跡内では、北側の台地縁辺部において集落と考えられる堅穴住居跡が検出されているが、今回確認された堅穴住居跡は、史跡北側の堅穴住居跡と比べて規模が小さいことがわかる。史跡の北側と北東側に集落を構築した人々の違いについて、今後の課題のひとつとしたい。

調査区の地形については、調査区北東側台地縁辺部にむかってなだらかに下っている状態が確認された。北東側斜面には湧水も認められ、沢状の地形であることが確認された。

参 考 文 献

- 鈴木克彦 『北日本の縄文後期土器編年研究』雄山閣 2001年
- 成田滋彦 「青森県の土器」『縄文文化の研究4 縄文土器II』雄山閣 1981年
- 高橋忠彦 「秋田県の縄文時代後期の土器」『研究紀要 第4号』
秋田県埋蔵文化財センター 1989年
- 文化財保護委員会 『大湯町環状列石』1953年
- 秋田県教育委員会 『大湯環状列石周辺遺跡分布調査概要』 1975年
秋田県教育委員会・鹿角市教育委員会
『大湯環状列石周辺遺跡緊急分布調査報告書』 1974年
- 鹿角市 『鹿角市史 第I巻』 1982年
- 鹿角市教育委員会 『昭和50年度大湯環状列石周辺遺跡分布調査概報』 1976年
- 鹿角市教育委員会 『昭和51年度大湯環状列石周辺遺跡分布調査概報』 1977年
- 鹿角市教育委員会 『大湯環状列石周辺遺跡発掘調査報告書(1)~(6)』 1985年~90年
- 鹿角市教育委員会 『大湯環状列石発掘調査報告書(7)~(8)』 1991年~92年
- 鹿角市教育委員会 『特別史跡大湯環状列石発掘調査報告書(9)~(22)』 1993年~2005年
- 鹿角市教育委員会 『特別史跡大湯環状列石(1)』 2005年

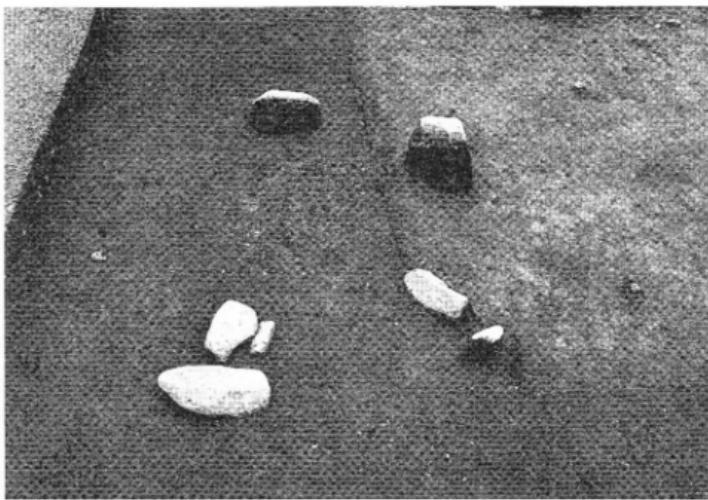


SX(S) 01

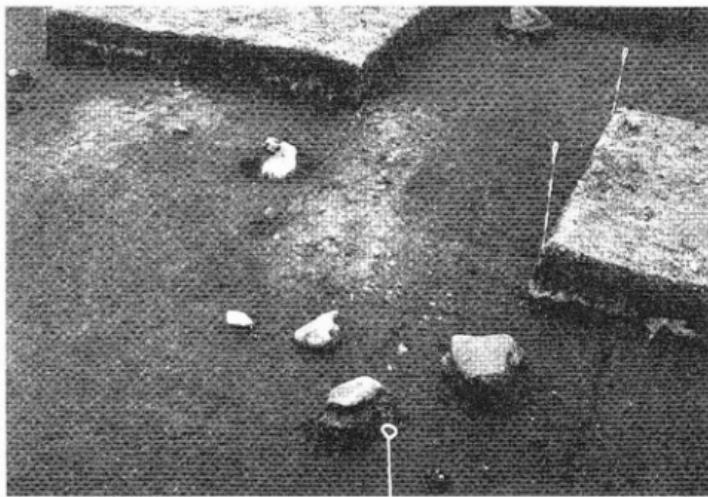


SX(S) 01

PL 1 配 石 遺 構(1)



SX(S) 02

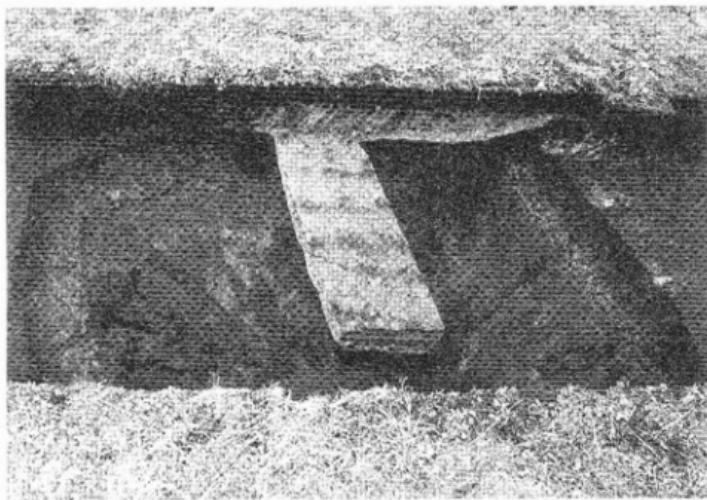


SX(S) 03

PL 2 配 石 遺 構(2)



S101確認状況



S101

PL3 壇穴住居跡(1)



S101出土炭化物



S101出土炭化物

PL 4 竖穴住居跡(2)

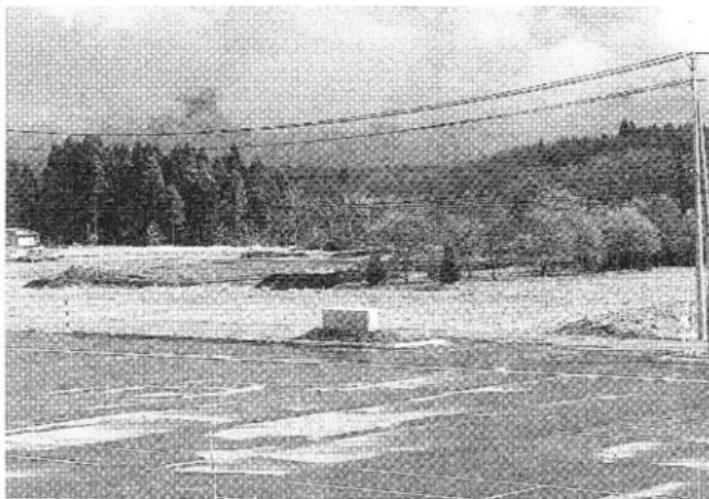


S102

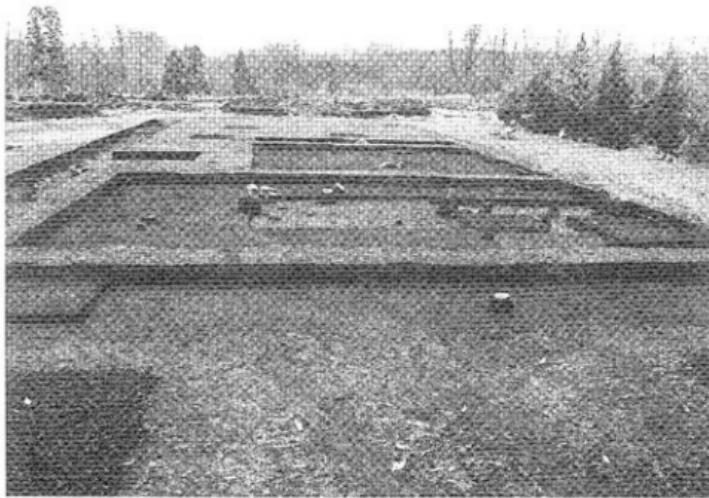


S103

PL5 壇穴住居跡(3)



調査区西側遠景

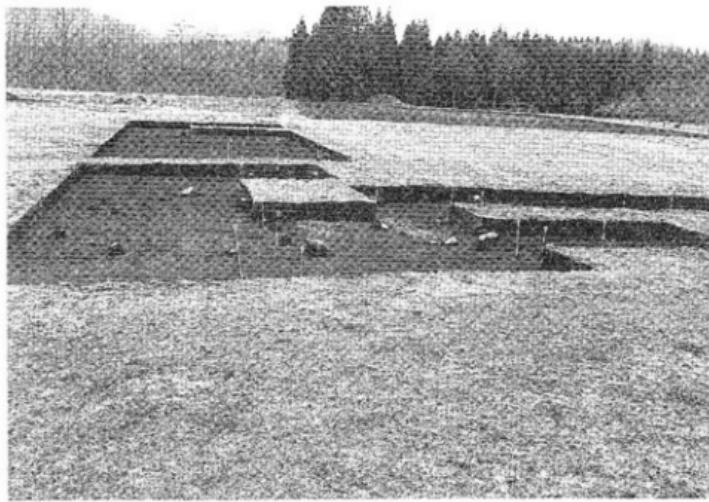


調査区西側全景

PL6 調査区西側



調査区南側遠景



調査区南側全景

PL7 調査区南側



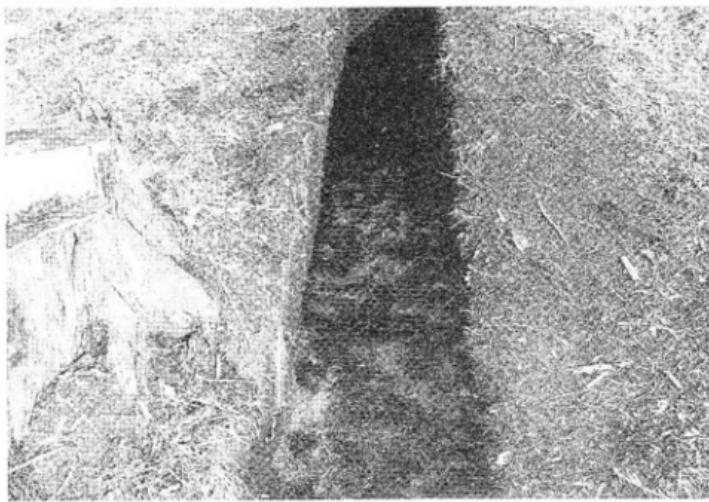
調査区北東側



調査区北東端盛り土

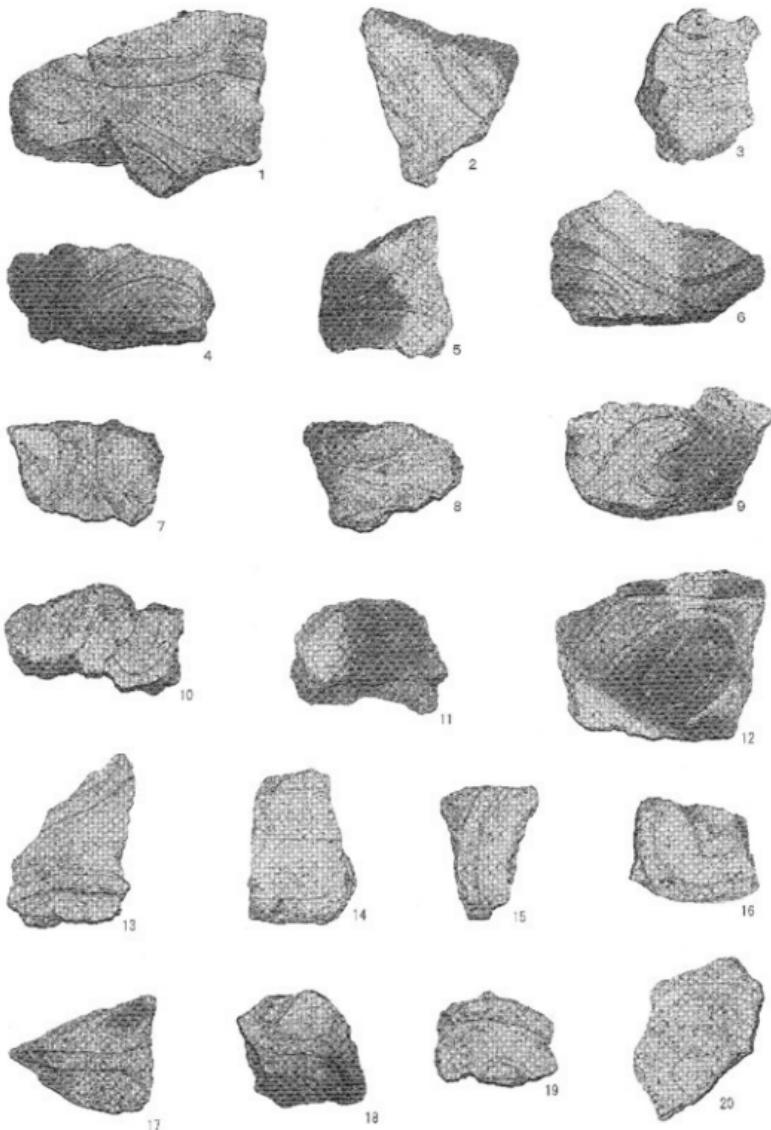


盛り土トレンチ

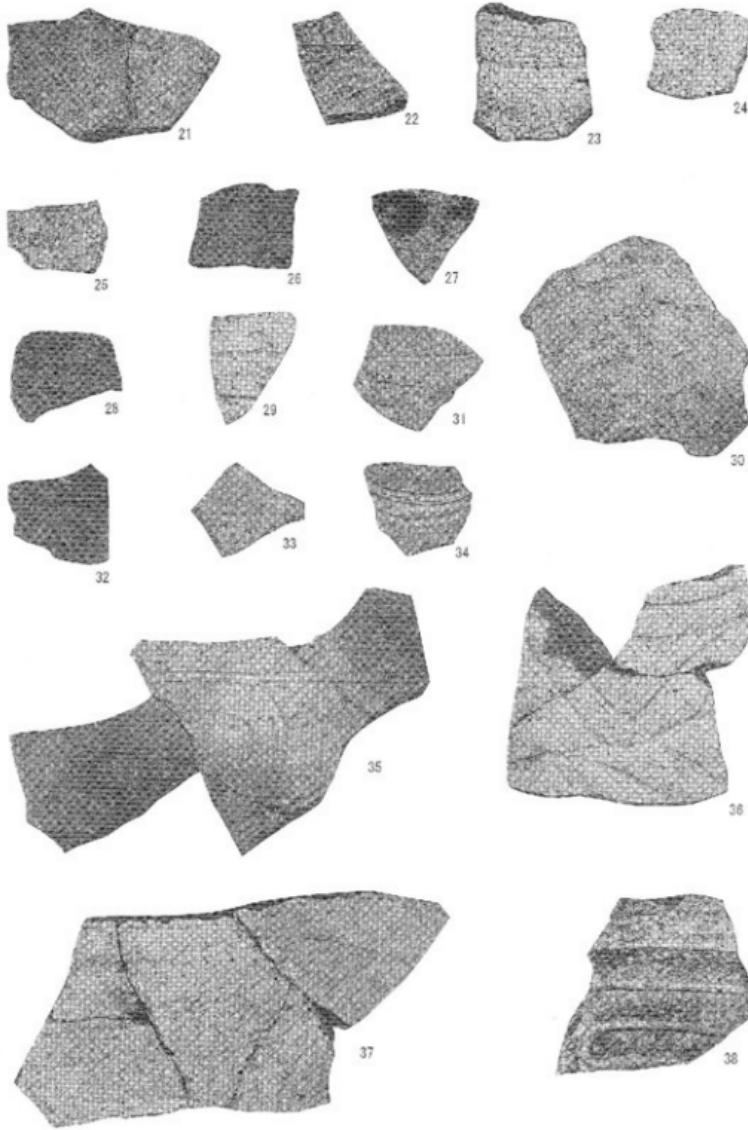


盛り土トレンチ

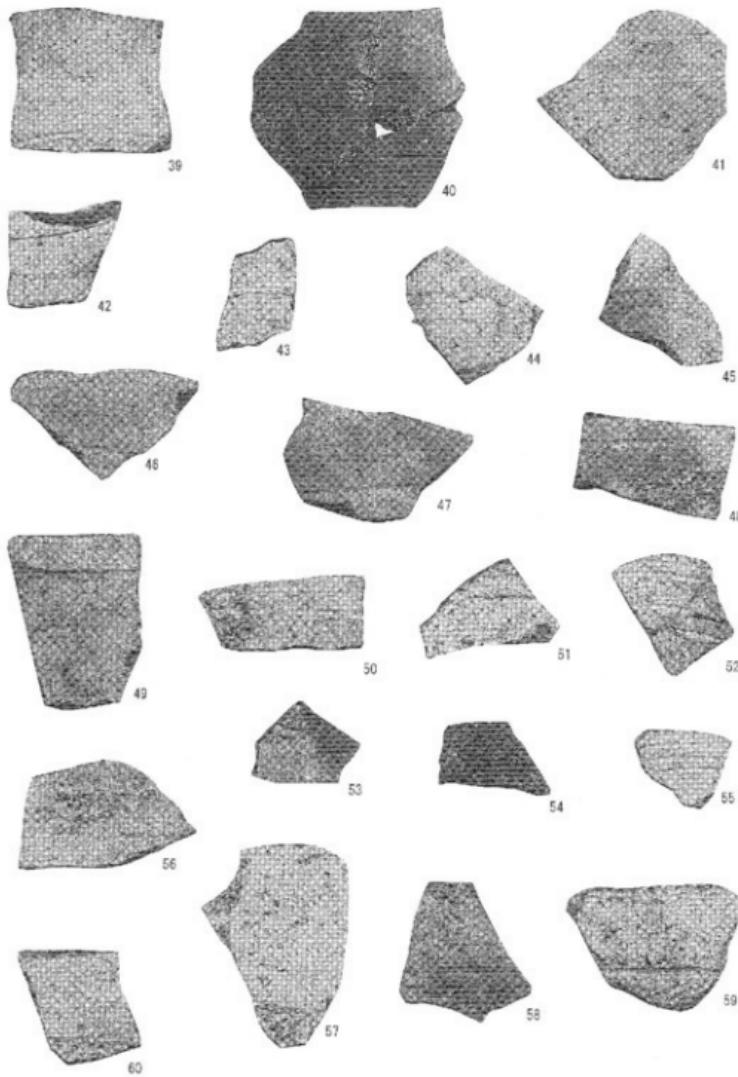
PL9 盛り土調査



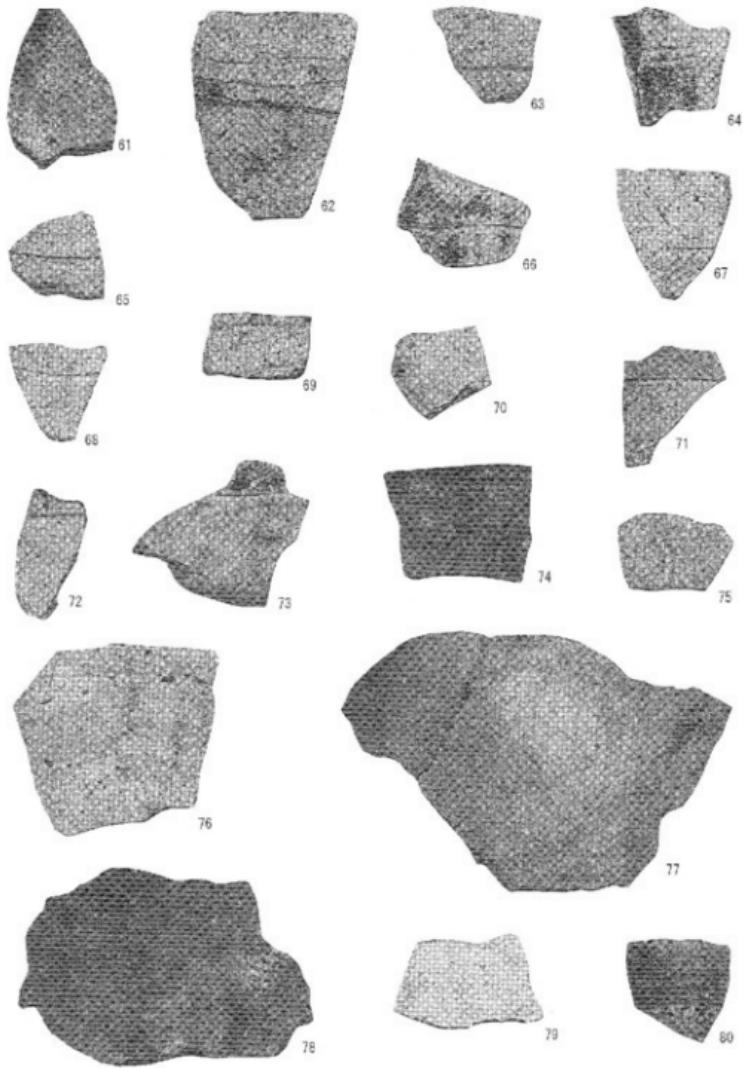
PL10 出土土器(1)



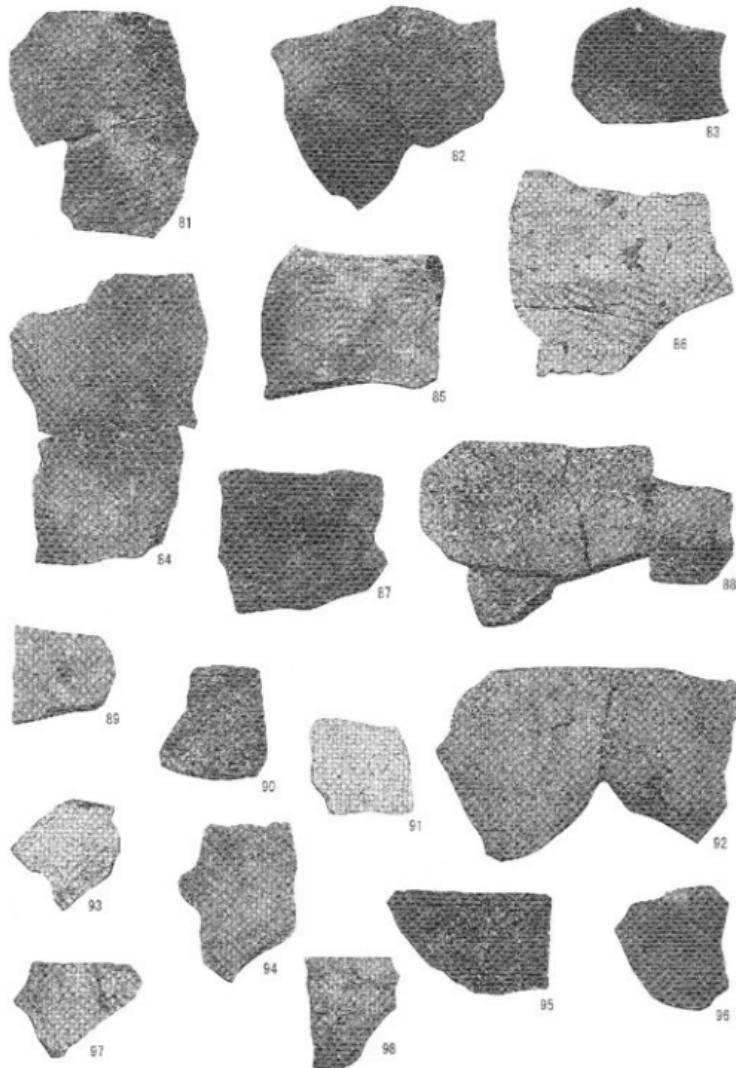
PL11 出土土器(2)



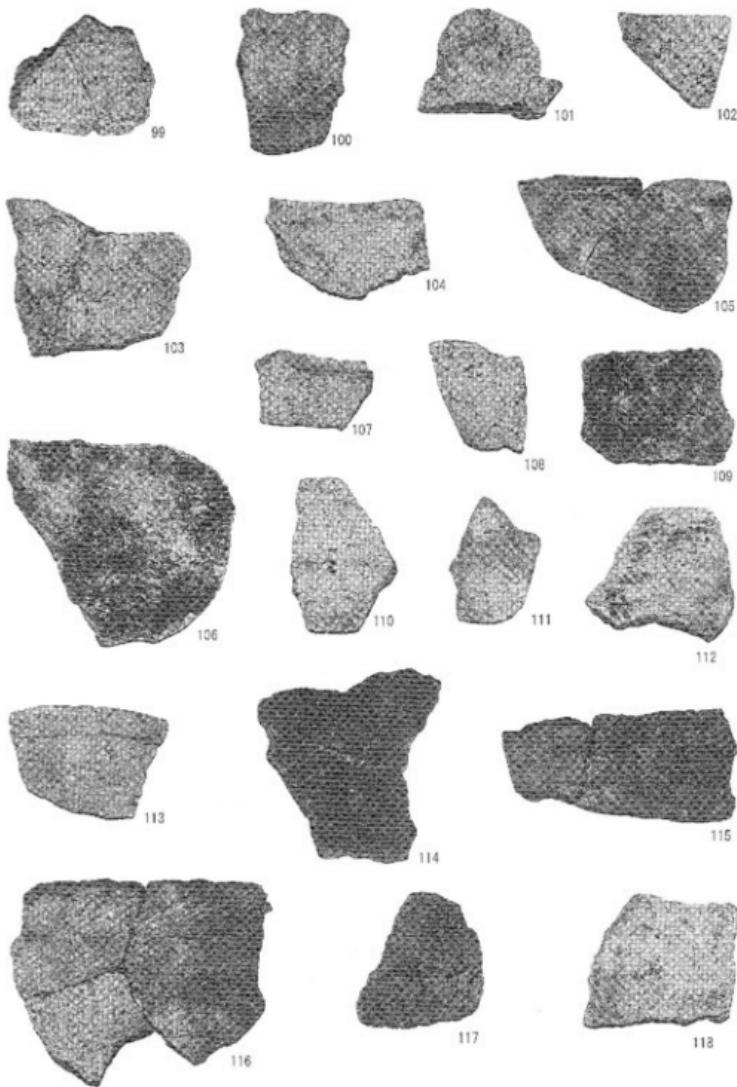
PL12 出土土器(3)



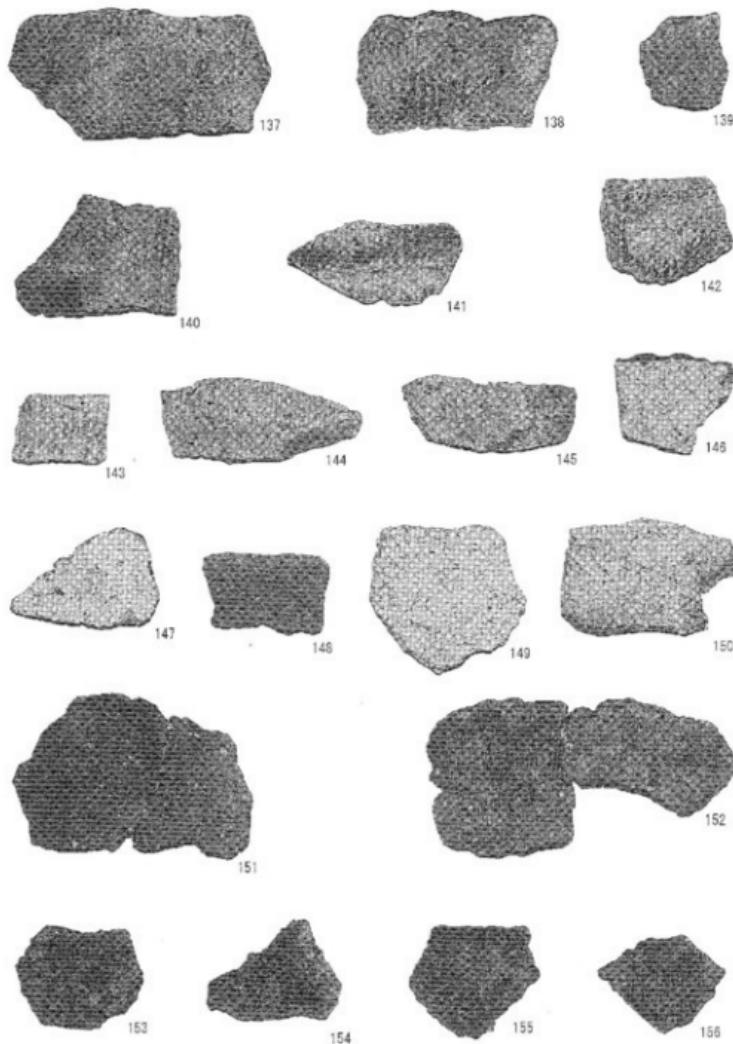
PL13 出 土 土 器(4)



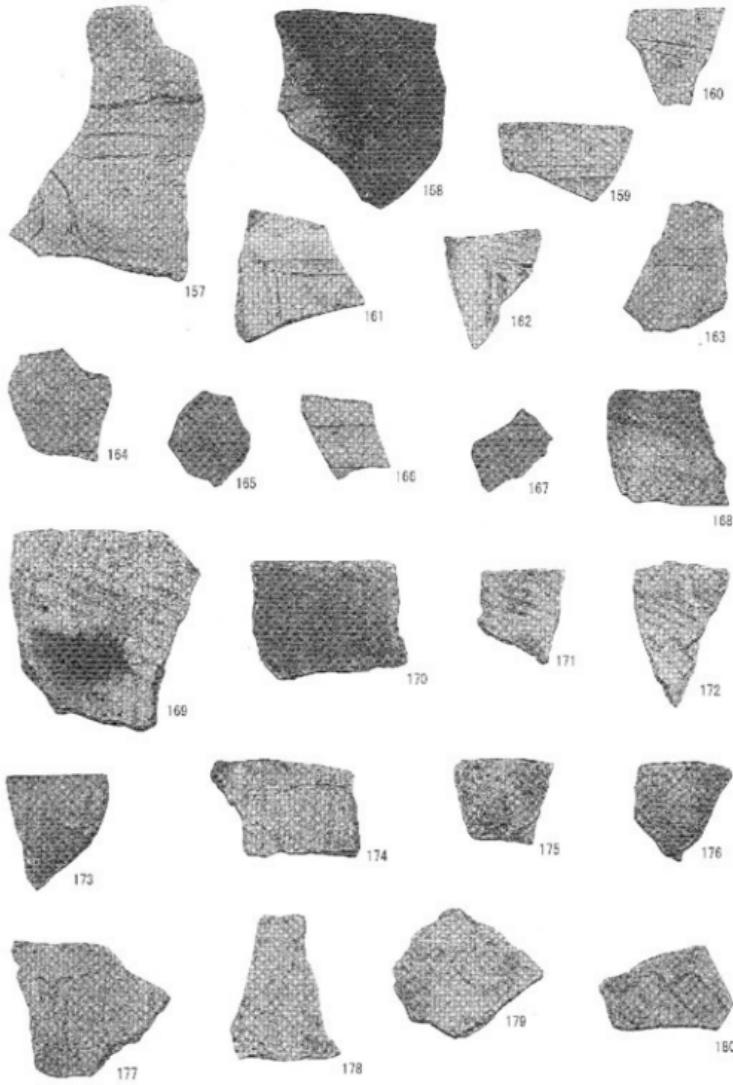
PL14 出土土器(5)



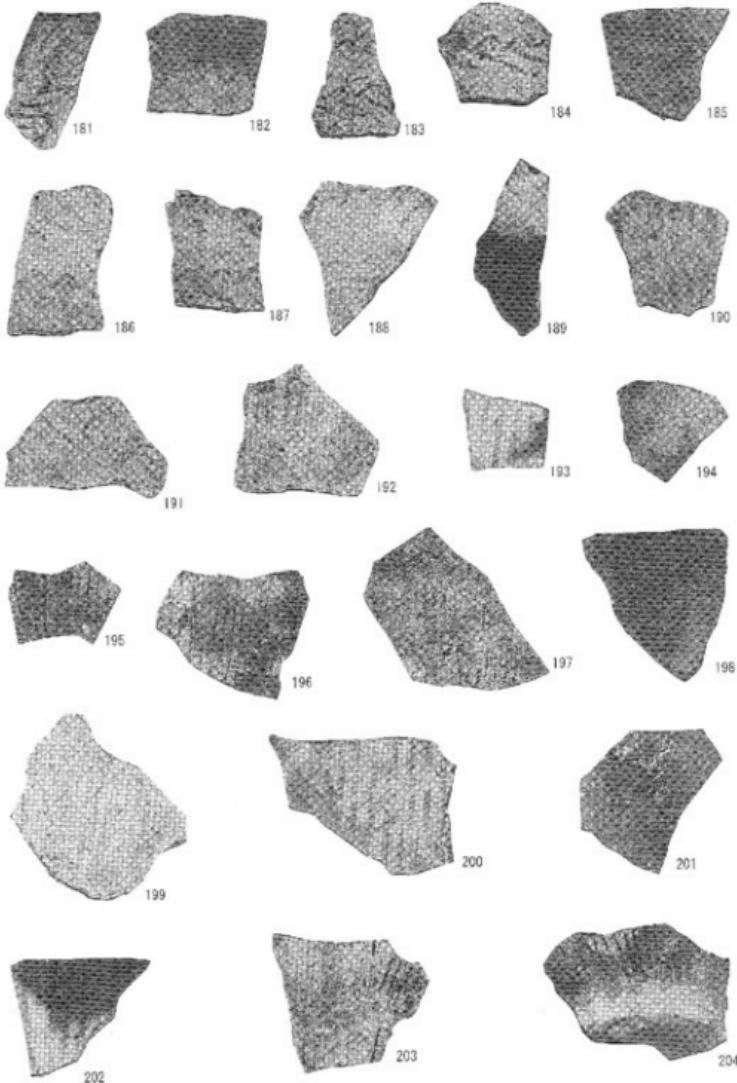
PL15 出土土器(6)



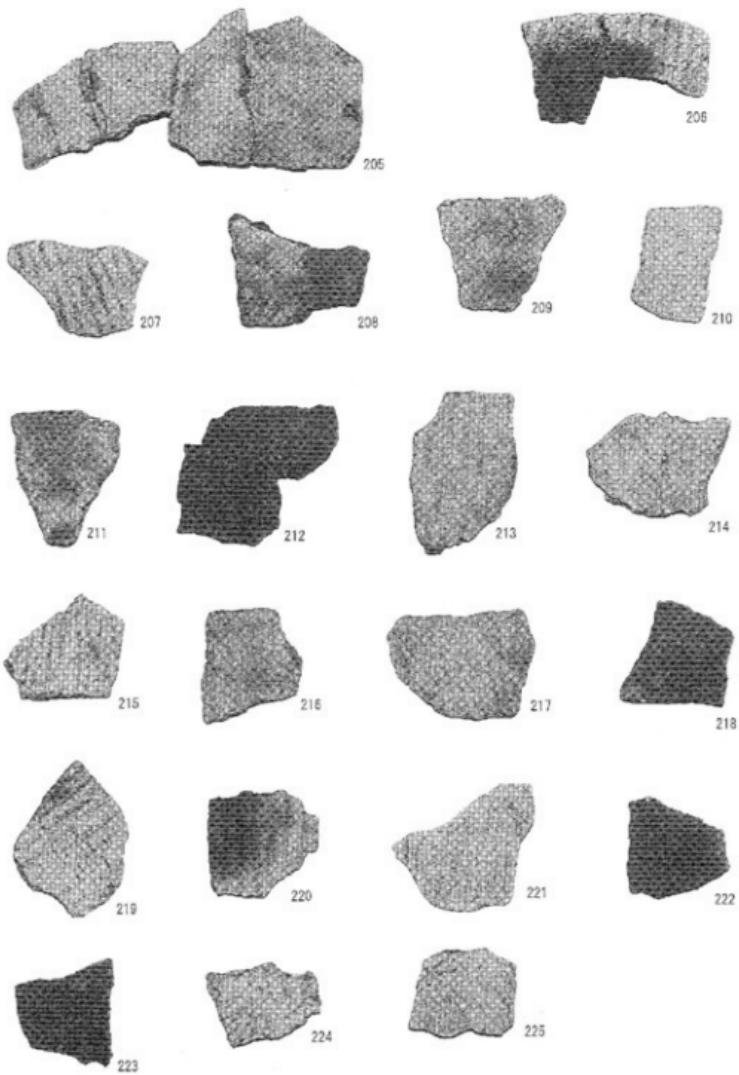
PL17 出土土器(8)



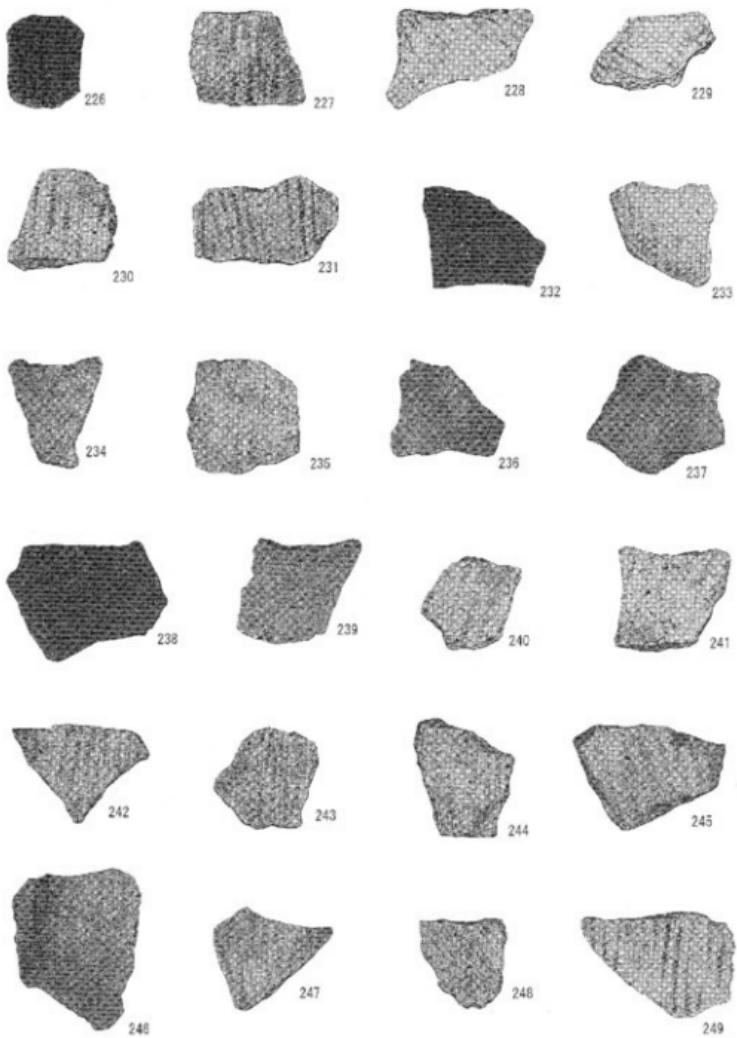
PL18 出土土器(9)



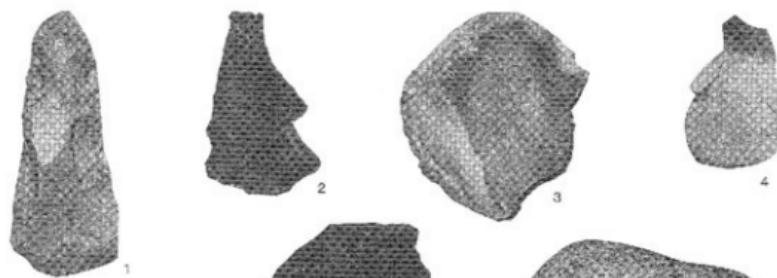
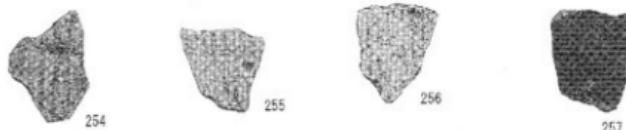
PL19 出土土器(10)



PL20 出土土器(11)



PL21 出土土器(12)



PL22 出土土器・石器

報告書抄録

ふりがな	とくべつしせき おおゆかんじょうれっせき はっくつちょうさほうこくしょ							
書名	特別史跡 大湯環状列石 発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	鹿角市文化財調査資料							
シリーズ番号	87							
編著者名	鹿角市教育委員会(生涯学習課)							
編集機関	鹿角市教育委員会(生涯学習課)							
所在地	〒018-5292 秋田県鹿角市花輪字荒田4番地1							
発行年月日	西暦2007年3月30日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
特別史跡 大湯環状列石	秋田県鹿角市十和田大湯字万座、字野中堂、字一本木後口	05209	123	40度 16分 21秒	140度 48分 50秒	2006 8.17 2006 12.12	1,340m ²	環境整備事業に伴う発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
特別史跡 大湯環状列石	環状列石	縄文時代後期 前葉～中葉 平安時代	配石遺構 堅穴住居跡	縄文土器 石器 弥生土器 土師器	一本木後口配石遺構群は二重の弧状を呈する確率が高くなつた。 また、史跡の東側に入り込んだ沢頭を囲んで平安時代の集落が確認された。			

鹿角市文化財調査資料87

特別史跡大湯環状列石発掘調査報告書(23)

発行年月日 平成19年3月30日

発 行 者 鹿角市教育委員会

〒018-5292

秋田県鹿角市花輪字荒田4番地1

Tel 0186-30-0294(生涯学習課文化財班)

印 刷 所 株式会社 米代新報社
